

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告  
8

古城遺跡

1994

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団

四国縦貫自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告  
8

古城遺跡

1994

徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
日本道路公団



調査区遠景



輸入陶磁器（青・白磁）

## 序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～脇間）の建設に伴い、平成2年度と4年度に実施した板野郡板野町古城遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

本遺跡は阿讃山脈の南麓に広がる沖積平野に位置しており、律令時代においては南海道のルートにあたる地域であります。

調査の結果、平安時代後半～鎌倉時代にかけての集落や条里に関連する溝、また南海地震に伴う噴砂などが検出されました。瓦器・土師器などの出土遺物は、当該時代の上器様相を把握する上で良好な資料といえます。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成に当たり、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元の皆様に多大の御援助、御協力を頂き、また研究者の方からは貴重な御教示を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成6年10月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 坂 本 松 雄

# 例 言

- 1 本書は四国縦貫自動車道建設に伴う古城遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査機関及び報告書作成についての実施期間は次のとおりである。
  - ・発掘調査期間 A地点 平成2年12月11日～平成3年3月10日  
B地点 平成2年6月14日～6月26日  
C地点 平成2年7月4日～12月15日（1次調査）  
平成5年2月4日～3月19日（2次調査）
  - ・報告書作成期間 平成4年4月1日～平成6年3月31日
- 3 発掘調査は徳島県と日本道路公団高松建設局の委託契約を受け、徳島県から委託契約により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

## 凡 例

SA 掘建柱建物跡・櫛列跡	ST 土墳墓
SB 竪穴住居跡	SK 土抗
SD 溝	SP 柱穴
	SX 不明遺構

- 5 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を示す。
- 6 本書で用いた土層及び上器の色調は、小山正忠・竹原秀雄 編「新版標準土色帖」1989年度版によった。
- 7 遺物番号は各地点ごとに通し番号とした。また挿図番号および図版番号は編集の都合上A・B・C地点をまとめて通し番号とした。
- 8 第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図（大寺）を基本に作成したものである。

9 調査にあたっては、下記の各機関の指導・援助を得た。

徳島県教育委員会 日本道路公団高松建設局 同徳島工事事務所  
同脇町工事事務所 徳島県土木部縦貫道推進局 同中央事務所

10 出土人骨の鑑定については、高知医科大学教授 山本恵三氏に依頼した。

11 本書の執筆はI-1を菅原康夫、その他を原 芳仲が行い、原が編集した。遺物の写真撮影は島巡賢二が行った。

# 本文目次

I 調査の経過と成果	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	6
3 調査日誌抄	10
II 遺跡の立地と環境	15
1 地理的環境	15
2 歴史的環境	15
III 調査成果	18
A 古城遺跡（A地点）	18
(1)基本的層序	18
(2)遺構と遺物	18
溝 1 (SD1001)	18
溝 2 (SD1002)	22
溝 3 (SD1003)	22
溝 4 (SD1004)	25
溝 5 (SD1005)	25
溝 6 (SD1006)	25
溝 7 (SD1007)	26
溝10 (SD1010)	26
土坑 1 (SK1001)	26
土坑 4 (SK1004)	27
犁跡 (SX1001・1002)	27
遺物包含層出土の遺物	26
(3)まとめ	34
B 古城遺跡（B地点）	36
(1)基本的層序	36
(2)遺構と遺物	36
噴砂	36

遺物包含層出土の遺物	36
(3)まとめ	40
C 古城遺跡 (C地点)	41
1 第1遺構面	41
(1)基本的層序	41
(2)遺構と遺物	42
溝 1 (SD1001)	42
溝 2 (SD1002)	46
積石土墳墓 1 (ST1001)	48
積石土墳墓 (ST1002)	53
土墳墓 3 (ST1003)	53
土墳墓 4 (ST1004)	57
掘立柱建物 (SA1001)	57
竪穴状遺構 1 (SB1001)	58
竪穴状遺構 2 (SB1002)	60
土坑 1 (SK1001)	62
土坑 2 (SK1002)	63
土坑 5 (SK1005)	63
土坑 7 (SK1007)	63
土坑 8 (SK1008)	63
土坑 9 (SK1009)	65
土坑10 (SK1010)	65
土坑11 (SK1011)	65
土坑12 (SK1012)	65
土坑13 (SK1013)	66
土坑14 (SK1014)	66
土坑15 (SK1015)	67
土坑16 (SK1016)	68
土坑17 (SK1017)	68
土坑19 (SK1019)	69
土坑20 (SK1020)	70
土坑21 (SK1021)	70
土坑22 (SK1022)	71

土坑23 (SK1023)	71
土坑24 (SK1024)	71
土坑26 (SK1026)	73
土坑27 (SK1027)	74
土坑29 (SK1029)	74
土坑31 (SK1031)	75
土坑32 (SK1032)	76
土坑33 (SK1033)	76
土坑34 (SK1034)	77
土坑35 (SK1035)	80
土坑36 (SK1036)	80
土坑37 (SK1037)	81
土坑38 (SK1041)	83
土坑39 (SK1039)	83
土坑41 (SK1041)	83
土坑42 (SK1042)	84
土坑45 (SK1045)	85
土坑47 (SK1047)	85
土坑50 (SK1050)	86
土坑51 (SK1051)	86
土坑52 (SK1052)	86
土坑54 (SK1054)	87
土坑55 (SK1055)	87
土坑57 (SK1057)	87
土坑58 (SK1058)	90
土坑59 (SK1059)	91
土坑60 (SK1060)	90
土坑61 (SK1061)	92
土坑62 (SK1062)	93
土坑63 (SK1063)	93
土坑65 (SK1065)	94
ビット24 (SP1024)	94
ビット67 (SP1067)	95
ビット79 (SP1079)	96

ビット95 (SP1095) .....	96
ビット97 (SP1097) .....	97
ビット100 (SP1100) .....	100
ビット104 (SP1104) .....	100
ビット107 (SP1107) .....	101
ビット114 (SP1114) .....	102
ビット144 (SP1144) .....	102
ビット148 (SP1148) .....	102
ビット151 (SP1151) .....	102
ビット166 (SP1166) .....	102
ビット173 (SP1173) .....	103
ビット178 (SP1178) .....	105
ビット179 (SP1179) .....	105
ビット181 (SP1181) .....	108
2 第2遺構面 .....	108
掘立柱建物 (SA2001) .....	108
掘立柱建物跡2 (SA2002) .....	109
掘立柱建物跡3 (SA2003) .....	109
柵列 (SA2004~2007) .....	109
柵列1 (SA2004) .....	110
柵列2 (SA2005) .....	111
柵列3 (SA2006) .....	111
柵列4 (SA2007) .....	112
土坑1 (SK2001) .....	113
土坑4 (SK2004) .....	113
遺物包含層出土遺物 (第177~190図) .....	113
4 第3遺構面 .....	127
5 まとめ .....	128
IV 考察 .....	130
1 古城遺跡の中世土器様相について .....	130
2 古城遺跡の中世土墳墓について .....	134
V 徳島県古城遺跡出土人骨の所見 .....	141

## 挿図目次

第1図	西園縦貫自動車道(徳～脇)路線図……………3	第32図	SD1001出土遺物実測図2……………47
第2図	古城道跡(A地点)グリッド配置図……………6	第34図	SD1901出土遺物実測図3……………48
第3図	古城道跡(B地点)グリッド配置図……………7	第35図	SD1001出土遺物実測図4……………49
第4図	古城道跡(C地点)グリッド配置図……………8	第36図	SD1902出土遺物実測図……………50
第5図	古城道跡(A地点・B地点・C地点)調査区位置図…13	第37図	ST1001・1002積石検出状況……………51
第6図	古城道跡(A地点・B地点・C地点)周辺の道跡…………16	第38図	ST1001実測図……………52
第7図	古城道跡(A地点)土層実測図……………19	第39図	ST1001出土遺物実測図……………53
第8図	古城道跡(A地点)遺構配置図……………21	第40図	ST1001積石礫中山十遺物実測図1……………54
第9図	SD1001・1002実測図……………23	第41図	ST1001積石礫中山十遺物実測図2……………55
第10図	SD1001出土遺物実測図……………23	第42図	ST1002実測図……………55
第11図	SD1002出土遺物実測図……………20	第43図	ST1002出土遺物実測図……………56
第12図	SD1004土層断面実測図……………25	第44図	ST1003実測図……………56
第13図	SD1005土層断面実測図……………25	第45図	ST1003出土遺物実測図……………57
第14図	SD1006土層断面実測図……………25	第46図	ST1004実測図……………58
第15図	SD1007土層断面実測図……………26	第47図	ST1004出土遺物実測図……………58
第16図	SD1010土層断面実測図……………26	第48図	SA1001実測図……………59
第17図	SK1001実測図……………26	第49図	SB1001・1002実測図……………60
第18図	SK1004実測図……………27	第50図	SB1001出土遺物実測図……………61
第19図	遺物包含層出土遺物実測図1……………28	第51図	SB1002出土遺物実測図……………61
第20図	遺物包含層出土遺物実測図2……………29	第52図	SK1001実測図……………61
第21図	遺物包含層出土遺物実測図3……………30	第53図	SK1002実測図……………62
第22図	遺物包含層出土遺物実測図4……………31	第54図	SK1005実測図……………62
第23図	遺物包含層出土遺物実測図5……………32	第55図	SK1005出土遺物実測図……………62
第24図	遺物包含層出土遺物実測図6……………33	第56図	SK1007実測図……………64
第25図	遺物包含層出土遺物実測図7……………34	第57図	SK1008実測図……………64
第26図	古城道跡(B地点)土層実測図(基本的層序)……………37	第58図	SK1009実測図……………64
第27図	古城道跡(B地点)遺構配置図(噴砂)……………38	第59図	SK1010実測図……………64
第28図	遺物包含層出土遺物実測図……………39	第60図	SK1011実測図……………65
第29図	基本土層様式柱状図および土層実測図……………41	第61図	SK1011出土遺物実測図……………65
第1道情面		第62図	SK1012実測図……………66
第30図	古城道跡(C地点)第1遺構面遺構配置図……………43	第63図	SK1013実測図……………66
第31図	SD1001・1002土層断面図……………45	第64図	SK1013出土遺物実測図……………66
第32図	SD1001出土遺物実測図1……………46	第65図	SK1014実測図……………67
		第66図	SK1014出土遺物実測図……………66
		第67図	SK1014実測図……………66
		第68図	SK1015出土遺物実測図……………66

第69区	SK1016实测区	68	第110区	SK1047实测区	84
第70区	SK1016出土遗物实测区	68	第111区	SK1050实测区	84
第71区	SK1017实测区	68	第112区	SK1051实测区	85
第72区	SK1017出土遗物实测区	68	第113区	SK1052实测区	85
第73区	SK1019实测区	69	第114区	SK1054实测区	86
第74区	SK1019出土遗物实测区	69	第115区	SK1055实测区	87
第75区	SK1020实测区	70	第116区	SK1057实测区	88
第76区	SK1021实测区	71	第117区	SK1057出土遗物实测区 1	89
第77区	SK1021出土遗物实测区	72	第118区	SK1057出土遗物实测区 2	90
第78区	SK1022实测区	73	第119区	SK1058・1060实测区	91
第79区	SK1023实测区	73	第120区	SK1058出土遗物实测区	92
第80区	SK1023出土遗物实测区	73	第121区	SK1060出土遗物实测区	93
第81区	SK1024实测区	74	第122区	SK1059实测区	93
第82区	SK1024出土遗物实测区	74	第123区	SK1059出土遗物实测区	93
第83区	SK1026实测区	75	第124区	SK1061实测区	94
第84区	SK1026出土遗物实测区	76	第125区	SK1061出土遗物实测区	94
第85区	SK1027实测区	77	第126区	SK1062实测区	95
第86区	SK1028实测区	77	第127区	SK1062出土遗物实测区	95
第87区	SK1029出土遗物实测区	77	第128区	SK1063实测区	96
第88区	SK1031实测区	78	第129区	SK1063出土遗物实测区	96
第89区	SK1032实测区	78	第130区	SK1065实测区	97
第90区	SK1032出土遗物实测区	78	第131区	SK1065出土遗物实测区	97
第91区	SK1033实测区	78	第132区	SP1024实测区	98
第92区	SK1033出土遗物实测区	78	第133区	SP1024出土遗物实测区	98
第93区	SK1034实测区	79	第134区	SP1067实测区	98
第94区	SK1034出土遗物实测区	79	第135区	SP1067出土遗物实测区	98
第95区	SK1035实测区	79	第136区	SP1078实测区	98
第96区	SK1035出土遗物实测区	79	第137区	SP1078出土遗物实测区	98
第97区	SK1036实测区	80	第138区	SP1095实测区	98
第98区	SK1036出土遗物实测区	80	第139区	SP1095出土遗物实测区	98
第99区	SK1037实测区	81	第140区	SP1097实测区	99
第100区	SK1037出土遗物实测区	81	第141区	SP1097出土遗物实测区	99
第101区	SK1038实测区	81	第142区	SP1100实测区	99
第102区	SK1038出土遗物实测区	81	第143区	SP1100出土遗物实测区	99
第103区	SK1039实测区	82	第144区	SP1104实测区	99
第104区	SK1039出土遗物实测区	82	第145区	SP1104出土遗物实测区	99
第105区	SK1041实测区	83	第146区	SP1107实测区	100
第106区	SK1041出土遗物实测区	83	第147区	SP1107出土遗物实测区	100
第107区	SK1042实测区	83	第148区	SP1114实测区	101
第108区	SK1045实测区	84	第149区	SP1114出土遗物实测区	101
第109区	SK1045出土遗物实测区	84	第150区	SP1144实测区	101

第151図	SP1144出土遺物実測図	101	第172図	SA2007実測図	111
第152図	SP1148実測図	102	第173図	SK2001実測図	111
第153図	SP1148出土遺物実測図	102	第174図	SK2001出土遺物実測図	111
第154図	SP1151実測図	103	第175図	SK2004実測図	112
第155図	SP1166実測図	103	第176図	SK2004出土遺物実測図	113
第156図	SP1166出土遺物実測図	103	第177図	遺物包含層出土遺物実測図1	114
第157図	SP1173実測図	103	第178図	遺物包含層出土遺物実測図2	115
第158図	SP1173出土遺物実測図	104	第179図	遺物包含層出土遺物実測図3	116
第159図	SP1178実測図	104	第180図	遺物包含層出土遺物実測図4	117
第160図	SP1178出土遺物実測図	104	第181図	遺物包含層出土遺物実測図5	118
第161図	SP1179実測図	105	第182図	遺物包含層出土遺物実測図6	119
第162図	SP1179出土遺物実測図	105	第183図	遺物包含層出土遺物実測図7	120
第163図	SP1181実測図	105	第184図	遺物包含層出土遺物実測図8	121
第164図	SP1181出土遺物実測図	105	第185図	遺物包含層出土遺物実測図9(瓦質土等)	122
第165図	2次調査区第1遺構面遺構配置図	106	第186図	遺物包含層出土遺物実測図10	123
第166図	2次調査区第2遺構面遺構配置図	107	第187図	遺物包含層出土遺物実測図11	124
第167図	SA2001実測図	108	第188図	遺物包含層出土遺物拓影	125
第168図	SA2002実測図	109	第189図	遺物包含層出土遺物実測図12	126
第169図	SA2003実測図	109	第190図	遺物包含層出土鉄貨拓影	126
第170図	SA2004実測図	110	第191図	C地点出土中世遺物の分類	150
第171図	SA2005・2006実測図	110	第192図	C地点出土中世遺物年表	151

## 表目次

第1表	西田麻呂自働車道埋藏文化財調査地一覽表	4	第4表	古城遺跡(A地点)出土遺物観察表	175
第2表	A地点遺構一覽表	160	第5表	古城遺跡(B地点)出土遺物観察表	184
第3表	C地点遺構一覽表	161	第6表	古城遺跡(C地点)出土遺物観察表	185

## 図版目次

巻頭図版	古城遺跡遺景 輸入陶磁器(青・白磁)	図版5	古城遺跡(A地点)出土遺物(1)
図版1	古城遺跡(A地点)土層堆積状況・古城遺跡 (A地点)遺構輪出状況全景	図版6	古城遺跡(A地点)出土遺物(2)
図版2	SD1001~3検出状況・SD1001土層堆積状況	図版7	古城遺跡(A地点)出土遺物(3)
図版3	SD1002土層堆積状況・SD1003土層堆積状況	図版8	古城遺跡(A地点)出土遺物(4)
図版4	古城遺跡(A地点)遺物出土状況・同上	図版9	古城遺跡(A地点)出土遺物(5)
		図版10	古城遺跡(A地点)出土遺物(6)
		図版11	古城遺跡(A地点)出土遺物(7)

図版12 古城遺跡（B地点）土層堆積状況・同上  
 図版13 古城遺跡（B地点）噴砂検出状況  
 図版14 古城遺跡（B地点）出土遺物  
 図版15 古城遺跡（C地点）調査前風景・古城遺跡（C地点）調査風景  
 図版16 古城遺跡（C地点）土層堆積状況・同上  
 図版17 SD1001・1002検出状況・SD1001・1002土層堆積状況  
 図版18 SD1001土層堆積状況・SD1002土層堆積状況  
 図版19 SD1001土層堆積状況・SD1002土層堆積状況  
 図版20 ST1001・1002検出状況・ST1001石組検出状況  
 図版21 ST1001礎部除去状況・ST1001検出状況  
 図版22 ST1001人骨出土状況・同上  
 図版23 ST1001人骨及び副葬品（土師質土器小皿）出土状況・同上  
 図版24 ST1002検出状況・同上  
 図版25 ST1002遺物（土師質土器杯）出土状況・ST1002人骨出土状況  
 図版26 ST1002プラン検出状況・ST1002完掘状況  
 図版27 ST1003検出状況・ST1003人骨出土状況  
 図版28 ST1002人骨出土状況・ST1003人副葬品埋納状況（刀子）  
 図版29 ST1004人骨出土状況・同上  
 図版30 古城遺跡（C地点）遺構検出状況（第1遺構面）・同上  
 図版31 SA1001検出状況・SB1001・1002検出状況  
 図版32 SK1019遺物出土状況・SK1021遺物出土状況  
 図版33 SK1026検出状況・SK1026遺物出土状況  
 図版34 SK1036検出状況・SK1036遺物出土状況  
 図版35 SK1037遺物出土状況・SK1039遺物出土状況  
 図版36 SK1057検出状況・SK1057遺物出土状況  
 図版37 SK1057遺物出土状況・同上  
 図版38 SK1057遺物出土状況・同上  
 図版39 SK1058・1060遺物出土状況・SK1065遺物出土状況  
 図版40 SP1107遺物出土状況・SP1114検出状況  
 図版41 SP1166検出状況・SP1166遺物出土状況  
 図版42 SP1173遺物出土状況・SP1178遺物出土状況

図版43 古城遺跡（C地点）遺物検出状況（第2遺構面）・SA2001～2003全景  
 図版44 古城遺跡（C地点）出土遺物（1）  
 図版45 古城遺跡（C地点）出土遺物（2）  
 図版46 古城遺跡（C地点）出土遺物（3）  
 図版47 古城遺跡（C地点）出土遺物（4）  
 図版48 古城遺跡（C地点）出土遺物（5）  
 図版49 古城遺跡（C地点）出土遺物（6）  
 図版50 古城遺跡（C地点）出土遺物（7）  
 図版51 古城遺跡（C地点）出土遺物（8）  
 図版52 古城遺跡（C地点）出土遺物（9）  
 図版53 古城遺跡（C地点）出土遺物（10）  
 図版54 古城遺跡（C地点）出土遺物（11）  
 図版55 古城遺跡（C地点）出土遺物（12）  
 図版56 古城遺跡（C地点）出土遺物（13）  
 図版57 古城遺跡（C地点）出土遺物（14）  
 図版58 古城遺跡（C地点）出土遺物（15）  
 図版59 古城遺跡（C地点）出土遺物（16）  
 図版60 古城遺跡（C地点）出土遺物（17）  
 図版61 古城遺跡（C地点）出土遺物（18）  
 図版62 古城遺跡（C地点）出土遺物（19）  
 図版63 古城遺跡（C地点）出土遺物（20）  
 図版64 古城遺跡（C地点）出土遺物（21）  
 図版65 古城遺跡（C地点）出土遺物（22）  
 図版66 古城遺跡（C地点）出土遺物（23）  
 図版67 古城遺跡（C地点）出土遺物（24）  
 図版68 古城遺跡（C地点）出土遺物（25）  
 図版69 古城遺跡（C地点）出土遺物（26）  
 図版70 古城遺跡（C地点）出土遺物（27）  
 図版71 古城遺跡（C地点）出土遺物（28）  
 図版72 古城遺跡（C地点）出土遺物（29）  
 図版73 古城遺跡（C地点）出土遺物（30）  
 図版74 古城遺跡（C地点）出土遺物（31）  
 図版75 古城遺跡（C地点）出土遺物（32）  
 図版76 古城遺跡（C地点）出土遺物（33）  
 図版77 古城遺跡（C地点）出土遺物（34）  
 図版78 古城遺跡（C地点）出土遺物（35）

## 写真目次

写真1 古城遺跡（A地点）調査風景.....10	図1 下顎骨.....154
写真2 古城遺跡（C地点）調査風景.....12	図2 肩甲骨と鎖骨.....155
	図3 上腕骨.....156
図1 下顎骨.....144	図4 尺骨と橈骨.....157
図2 鎖骨と上腕骨.....145	図5 大腿骨.....158
図3 脛骨と腓骨.....146	図6 脛骨と腓骨.....159

# I 調査の経過と成果

## 1 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施行命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施行命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日の路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島 I.C を起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の仲積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇 I.C を結ぶ、区間延長41.4km、用地取得面積259ha に及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により、暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には、藍住 I.C（追加 I.C）の施行命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間、徳島県教育委員会（以下「県教委」という）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査実施し、埋蔵文化財の実態把握につとめた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施行に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5ヵ年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化センター（以下「センター」という）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000㎡（暫定分約340,000㎡）事業地区面積のほぼ13%にあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、平成元年6月1日付けで締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削上量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び腐厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案し

つつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行ない、調査を実施した。前述したように、試掘調査を先行することによって扇厚・調査範囲を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表下3m以下に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500㎡、2年度は33遺跡76,390㎡、3年度は30遺跡35,748㎡、4年度は残件であった14遺跡6,826㎡について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

調査組織及び整体制は以下である。

事務局長	日下 昭（平成元・2年度） 佐藤信博（平成3・4年度） 柴田 広（平成5年度）
総務課長	吉田 寛（平成元・2年度） 木内正幸（平成3年度） 岡本一仁（平成4・5年度）
主 事	佐藤 馨（平成2～4年度） 二木和文（平成5年度）
研究補助員	扶川道代（平成元～5年度）
調査課長	桑原邦彦（平成元・2年度） 羽山久男（平成3・4年度） 紀伊司郎（平成5年度）
調整係長	菅原康夫（平成元年度） 島巡賢二（平成2～4年度）
技 師	森長 進（平成元・2年度技術主任） 堀江隆治（平成3・4年度） 酒井彰彦（平成5年度）
調査係長	島巡賢二（平成元年度） 菅原康夫（平成2～5年度）

発掘調査担当

古城遺跡A地点 研究員 井上章生(当時)・濱田 明(当時)・笠井教光(当時)  
西 博美(当時)・小泉信司

研究補助員 北原雅代(当時)

古城遺跡B地点 研究員 石川直章(当時)・池淵 茂(当時)・近藤隆弘(当時)  
笠井教光(当時)・小泉信司

研究補助員 桑原千代美

古城遺跡C地点(1次調査)

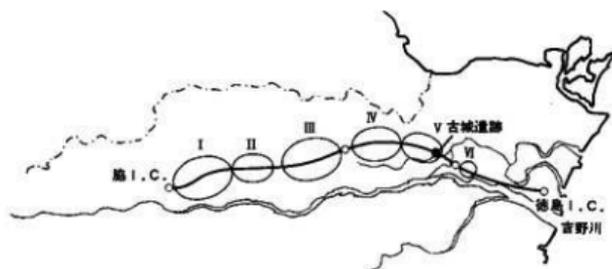
研究員 石川直章(当時)・井上章生(当時)・池淵 茂(当時)  
近藤隆弘(当時)・笠井教光(当時)・小泉信司

研究補助員 桑原千代美(当時)・原 芳伸(当時)

(2次調査)

研究員 原 芳伸・安友克佳(当時)・橋川充男(当時)

報告書作成業務 研究員 原 芳伸・須崎一幸(当時)



- |                 |                                   |
|-----------------|-----------------------------------|
| I 阿波町No.1～12    | IV 上郷町No.98～55                    |
| II 市場町No.13～25  | V 徳島市No.56～65                     |
| III 土成町No.26～37 | VI 藍住町No.66～68(No.は第1表の道路番号に対応する) |

第1図 四国縦貫自動車道(徳島～脇)路線図

第1表 四國縦貫自動車道(徳島～脇間)埋蔵文化財調査地一覧表

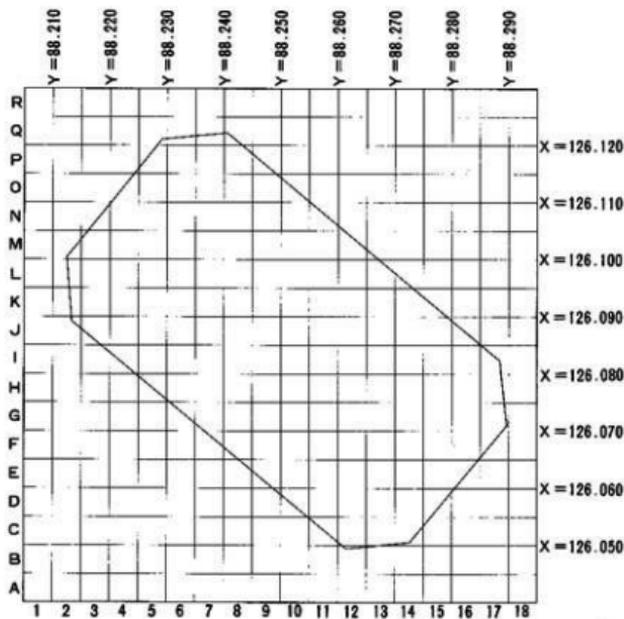
遺跡番号	遺跡名	所在地	実積面積	面積 (㎡)				備 考
				元年度	2年度	3年度	4年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170				
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100				
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30			
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240			報告書第5集所収
5	赤坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800			報告書第1集所収
6	赤坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50			報告書第1集所収
7	赤坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,600	600	1,000			報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310			報告書第3集所収
9	桜ノ岡遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240		240			報告書第3集所収
10	桜ノ岡～東正広遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,000		1,000			
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10			
12	山ノ神～八丁原遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30			
13	上喜来遺跡	阿波郡市場町大俣	1,160		900	260		
14	大俣山路～大俣宇佐遺跡	阿波郡市場町大俣	250			250		
15	上喜来経子～中佐古遺跡	阿波郡市場町上喜来	12,560		11,720	840		報告書第7集所収
16	八板遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町尾開	11			11		
17	八板遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町尾開	360	360				
18	八板遺跡(Ⅲ)	阿波郡市場町尾開	114			85	29	
19	八板遺跡(Ⅳ)	阿波郡市場町尾開	2,000	2,000				
20	日吉～金清遺跡	阿波郡市場町尾開	3,100	2,850	250			
21	吉田遺跡(Ⅰ)	阿波郡市場町切幡	60		60			
22	吉田遺跡(Ⅱ)	阿波郡市場町切幡	510	510				
23	坤山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	60			60		
24	乾山～観音遺跡	阿波郡市場町切幡	850			850		
25	乾山遺跡	阿波郡市場町切幡	2			2		
26	金蔵～上井遺跡	板野郡土成町浦池	2,730	2,730				報告書第1集所収
27	北原～大法寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890			報告書第6集所収
28	前田遺跡	板野郡土成町土成	10,810		7,710	3,100		報告書第2集所収
29	椎ヶ丸～芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550			報告書第6集所収
30	北門～深堂遺跡	板野郡土成町吉田	200			200		
31	広坪～宮ノ下遺跡	板野郡土成町宮川内	60		60			
32	向山古墳群	板野郡土成町宮川内	50				50	
33	藪ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400			
34	けやき原～林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210			
35	西谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650		
36	法教池遺跡(Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10			
37	十楽寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430			報告書第6集所収
38	安楽寺古墳墓群	板野郡土成町引野	2,140			2,140		
39	関堤遺跡	板野郡土成町引野	20			20		
40	天神山遺跡	板野郡土成町引野	1,330		1,330			報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡土成町引野	3,980		3,110	870		報告書第1集所収
42	明神池古墳群	板野郡土成町引野	194		80	114		

遺跡 番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)				備 考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町泉谷	8,930		3,280	5,650	
44	新池遺跡	板野郡上板町泉谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宅	15,649			11,507	4,142
46	苜蓿谷西山A遺跡	板野郡上板町神宅	460		130	330	
47	苜蓿谷西山B遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	苜蓿谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,200	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷義師遺跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	祝谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	岷天山遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷堂跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	353			65	288 報告書第4集所収
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町犬伏	340		340		報告書第4集所収
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	1,220		1,220		
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町犬伏	40	40			
62	黒谷川宮ノ前遺跡	板野郡板野町犬伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840 本報告書所収
64	西中宮遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中宮	975			975	
65	西中宮遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中宮	125			125	
66	東中宮遺跡	板野郡藍住町東中宮	760			550	210
67	前須遺跡	板野郡藍住町徳命	876			625	251
68	新尾須遺跡	板野郡藍住町徳命	190				190
		計	133,464				

## 2 調査の経過

本遺跡は、四国縦貫自動車道建設予定地に瓦器片、青磁片、白磁片等の分布が認められたため、平成元年度に試掘調査を行い、中世に位置付けられる遺構の存在が確認されたため、本調査の必要があるとの結論に達した。試掘結果に基づき、北西よりA・B・Cの3地点の調査区を設定した。いずれも河川の氾濫原の中にある微高地上に存在し、中世（12世紀～15世紀）の遺物包含層及び遺構面が確認された。本遺跡の存在する地形は地区全体に微高地が連続しており、現在の古城地区の集落の存在する地域がもっとも安定した地形である。

本遺跡は旧吉野川、宮河内谷川、黒谷川などの河川により形成された氾濫原に所在する。黒谷川をはさみ、北西に黒谷川宮の前遺跡、北東に黒谷川郡頭遺跡が隣接している。検出された遺構には、溝・住居跡・土壇墓・水田跡などがあり、A・B・C地点それぞれ性格が異なるが、これらは有機的関連をもつものとして理解する必要がある。AおよびB地点では15世紀代の噴砂のあとが確認され、地震災害の痕跡が認められた。



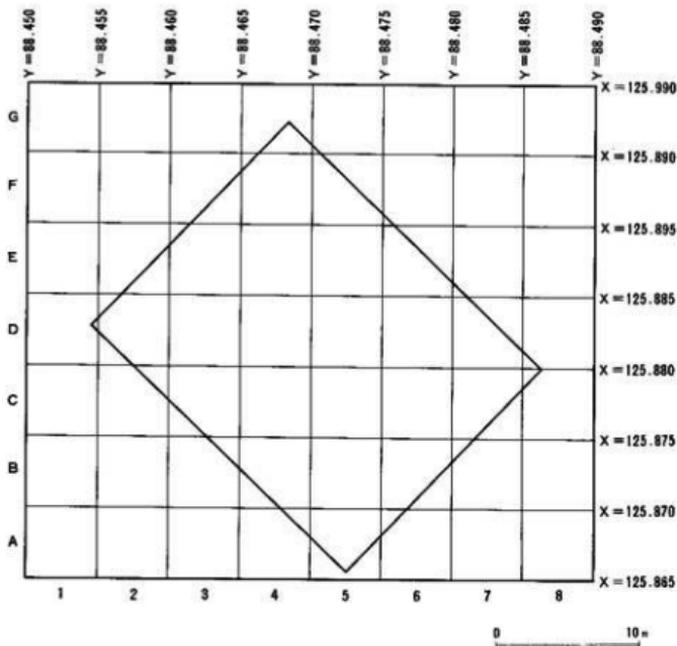
第2図 古城遺跡(A地点)グリッド配置図

(A地点)

本調査は3,320㎡の調査区を設定し、平成2年12月11日から平成3年3月10日の調査期間で発掘調査を行った。調査区画は5m×5mのメッシュを国土地理院座標軸、X軸・Y軸の線上に組み、X軸方向は西から東へ1～18の数字を、Y軸方向は南から北へB～Qの記号をつけて、それぞれグリッド名とした(第1図)。

今回の調査において平安時代中期～鎌倉時代初頭のもつ認められる水田跡およびそれを区画するものと思われる水路、溝状遺構13条を検出した。また部分的に礎跡も確認された。その他、検出した遺構として土坑6基、ピット6基がある。

遺構面および遺物包含層からは緑釉陶器、土師器、須恵器、黒色土器、上鐏などが出土している。

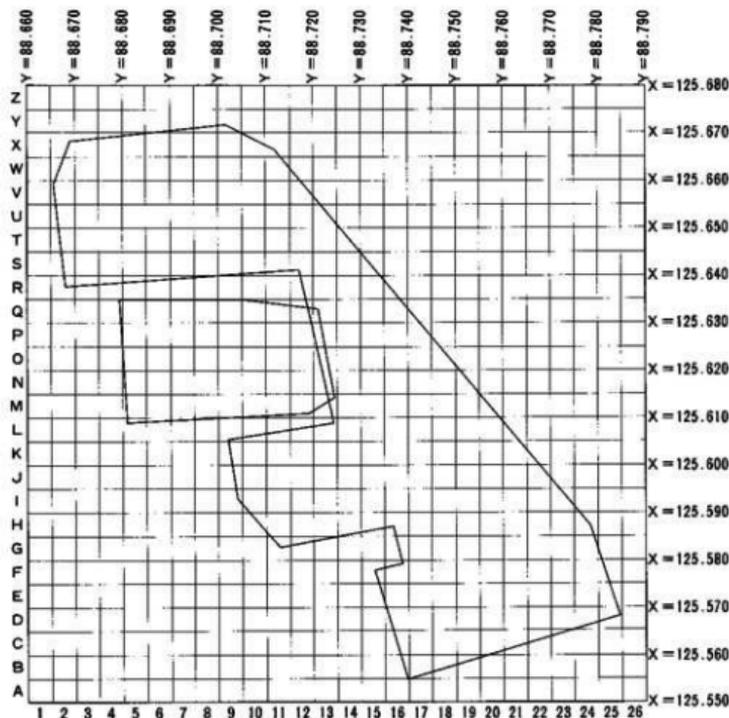


第3図 古城遺跡(B地点)グリッド配置図

(B地点)

試掘調査の結果から、遺物包含層の安定していると考えられる地点に500㎡の調査面積を設定し、平成2年6月14日～26日までの調査期間で発掘調査を行った。調査区画は5m×5mのメッシュを国土座標軸、X軸・Y軸の線上に組み、X軸方向は西から東へ1～8の数字を、Y軸方向は南から北へA～Gの記号をつけて、それぞれグリッド名とした(第2図)。

今回の調査においては十節質土器、中世陶磁器、青磁片など鎌倉～室町時代の遺物が出土したが、遺構は確認できなかった。また調査区南側に噴砂の痕跡が認められた。



第4図 古城遺跡(C地点)グリッド配置図

(C地点)

平成元年度に行った試掘調査の結果、出土遺物などから平安末～中世に位置付けられる遺構・遺物の存在が確認され、5,100㎡の調査区を設定し、平成2年7月4日から12月15日(1

次調査)および平成5年2月4日から3月19日(2次調査)の調査期間で発掘調査を行った。

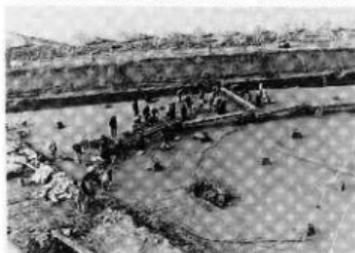
調査区内のグリッド設定に際しては、5m×5mのメッシュを国土座標の座標軸、X軸、Y軸の線上に組み、X軸方向は西から東へ1～26の数字を、Y軸方向には南から北へとA～Zの記号をつけてグリッドを設定した(第2図)。調査の結果、鎌倉時代初頭頃と思われる土壇墓・土坑等の遺構を検出した。出土遺物には青磁片、白磁片、瓦器碗、土師質土器等がある。

### 3 調査日誌抄

#### 古城遺跡 (A地点)

1990年

- 12月11日 発掘調査の準備にかかる。
- 12月12日 調査地点現地測量 (請負業者)。



古城遺跡 (A地点) 調査風景

- 12月17日 プレハブ設営。物品等搬入。
  - 12月21日 調査区決定。調査工程表作成。  
年明けに調査開始。
  - 12月28日 御用納め。
- 1991年
- 1月4日 御用初め。
  - 1月5日 機械掘削開始 (掘削厚1.8m)。  
青磁片等出土。
  - 1月7日 層序の確認。試掘データとの照  
合を行う。東播系須恵器・土師質  
土器片等出土。
  - 1月10日 人力掘削開始 (排水溝)。
  - 1月14日 遺構面直上まで包含層掘り下げ  
開始。
  - 1月16日 土層断面実測および写真撮影を  
行う。
  - 1月17日 溝状遺構検出。
  - 1月23日 遺構面精査開始。

- 1月31日 溝状遺構検出。遺構面より緑釉  
陶器・土師器片出土。
- 2月4日 機会掘削終了。人力掘削を全調  
査区に展開。併行して遺構面の精  
査を行う。
- 2月13日 溝状遺構・土坑・竪穴等検出。
- 2月21日 遺構検出終了。遺構掘り下げお  
よび遺構平・断面図作成にかかる。
- 2月27日 遺構完掘。調査区全景写真撮影。
- 3月2日 遺構配置図作成。調査区埋め戻  
し開始。
- 3月8日 調査終了。現場事務整理。

#### 古城遺跡 (B地点)

1990年

- 6月1日 調査準備。プレハブ設営。物品  
搬入。
- 6月4日 機械掘削開始。
- 6月5日 機械掘削完了。
- 6月11日 人力掘削開始。包含層掘り下げ。
- 6月19日 土層断面実測。
- 6月21日 包含層掘り下げ終了。
- 6月22日 遺構面精査。噴砂検出。
- 6月25日 噴砂実測図作成。
- 6月26日 調査区完掘。遺構が検出されな  
かったため、本日をもって調査終  
了。

#### 古城遺跡 (C地点)

1990年 (1次調査)

- 5月21日 プレハブ設営。
- 5月23日 調査準備。物品等を搬入する。

- 5月28日 調査区現況が水田のため仮設水路工事を行う。
- 6月4日 場内進入路仮設。
- 6月5日 仮設水路完了。通水試験を行う。
- 6月7日 場内進入路仮設工事終了。
- 6月8日 鋼矢板施工準備。
- 6月11日 鋼矢板打設開始。
- 6月25日 調査区全周の3/4矢板打設終了。調査区南側A区より機械掘削開始。
- 6月27日 A区より人力掘削開始（排水溝）。
- 7月4日 鋼矢板打設工事終了。機械掘削B区まで終了。被圧地下水確認のトレンチをいれる。
- 7月10日 A区より包含層掘り下げ開始。
- 7月11日 全調査区の機械掘削終了。
- 7月23日 A・B区遺構面精査開始。D区において横石土壌基（ST1001）検出。ST1001実測にかかる。
- 7月24日 A・B区の遺構面精査終了。A区において溝状遺構（SD1003・1004）2条検出。B区において大溝（SD1001・1002）を検出。その他竪穴状遺構・ピットを数基検出。
- 7月26日 C区遺構面精査開始。獨立柱遺物跡と思われるピットを検出。
- 7月27日 B区の遺構掘り下げ開始。
- 7月31日 C区において2m間隔に並ぶピット例（SA1001）を確認。
- 8月1日 B区の遺構平面図作成にかかる。
- 8月9日 DST1001主体部検出および検出状況写真撮影。
- 8月21日 D区包含層掘り下げ開始。
- 8月27日 D区遺構面精査開始。
- 8月29日 D区において上坑8基検出。
- 9月4日 A・B・C区の空中写真撮影を行う。D区ST1001で人骨と副葬品と思われる土師質小皿を検出。
- 9月7日 D区においてB区SD1001・1002の続きと思われる大溝を2条検出。その他、D区において上坑・ピット等多数の遺構を検出。遺構の掘り下げにかかる。
- 9月11日 D区遺構平・断面図作成にかかる。
- 10月2日 D区の遺構平・断面図等終了。
- 10月16日 D区空中写真撮影を行う。D区全景写真撮影。
- 10月17日 A区より第2次機械掘削および第2包含層の掘り下げを始める。
- 10月19日 D区遺構面再精査終了。本日もって第1遺構面の調査を終了する。
- 10月23日 第2遺構面の精査にかかる。
- 10月26日 マンガン粒を多量に含む水田面と思われる粘土層を検出。
- 11月4日 全調査区の第2次機械掘削を終了。
- 11月13日 全調査区の第2遺構面の精査を終了。全調査区にわたり水田面らしき層を検出したが、明確に畦畔と断定できる遺構は検出されなかった。
- 11月14日 確認のトレンチを数カ所いれるが、

遺構・遺物は検出されなかったため、本日をもって古城遺跡の発掘調査を終了する。

- 11月15日 図面・遺構・遺物台帳作成等の整理を行う。調査区埋め戻し開始。
- 11月19日 発掘調査のとりまとめを行う。鋼矢版の引き抜き工事を開始。
- 11月22日 調査区の埋め戻し終了。
- 12月7日 鋼矢版引き抜き工事終了。
- 12月10日 現場撤収。

#### 1993年（2次調査）



古城遺跡（C地点）調査風景

- 2月3日 現地測量写真立会。
- 2月4日 機械掘削開始。約2.0m掘り下げ。
- 2月6日 土篩器、瓦器片等出土。
- 2月10日 グリッド杭打設。
- 2月12日 調査区西側より人力掘削（第1包含層掘り下げ）開始。土坑検出。
- 2月15日 包含層掘り下げと併行して遺構面精査を行う。輸入磁器、土器器、瓦器片等出土。
- 2月18日 第1包含層掘り下げ終了。
- 2月19日 第1遺構面精査。大溝・土坑・ビット等多数の遺構を検出。遺構

の掘り下げにかかる。

- 2月22日 遺構の掘り下げおよび遺構実測を行う。
- 2月26日 第1遺構面の再精査を行う。新たに土坑・ビットを検出。
- 3月1日 土墳墓（SK1002・1003）掘り下げ。人骨を検出。
- 3月8日 第1遺構面の遺構検出状況全景写真撮影。
- 3月9日 第1遺構面検出遺構の実測終了。空中写真撮影準備。
- 3月10日 空中写真撮影を行う。午後より第2遺構面調査準備にかかる。
- 3月11日 第2包含層掘り下げにかかる。併行して第2遺構面精査を行う。
- 3月12日 第2包含層掘り下げおよび遺構検出終了。ビット等多数検出。遺構の掘り下げにかかる。
- 3月15日 第1遺構面検出のST1002・1003人骨取り上げ。
- 3月17日 遺構平・断面図および検出状況写真撮影終了。
- 3月18日 第2遺構面遺構検出状況全景写真撮影。本日で発掘調査終了。
- 3月19日 現場撤収。



平成2年度調査区  
 平成4年度調査区

0 100

第5図 古城遺跡(A・B・C地点)調査区位置図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

四国東部に位置する徳島県は、山地が大部分を占めており、平野の部分は段丘・扇状地を含めても全県面積の二割ほどにすぎない。中央構造線と呼ばれる大断層に沿う吉野川下流域平野をはさんで北は阿讃山脈が連なり、南は四国山地、剣山山地・海部山地がそれぞれ東西に併走しており、いずれの山地も西に高く東に低くなる傾向がある。また阿讃山脈と四国山地の二列の山脈の間を四国最大の河川である吉野川がやや直線に東流して紀伊水道に注いでいる。その流域の北岸には扇状地が発達し、南岸には段丘地形がみられる。

古城遺跡が所在する板野町は、この吉野川下流域に属する。阿讃山脈の南麓に広がる吉野川氾濫源の沖積平野が大部分を占め、起伏の少ない海拔5.0～7.0mの低地からなり、東南部を旧吉野川がななめに大きく蛇行している。また板野町では、中央構造線が山地の南縁を西南西～東北東に走り、平野部と山地を区分する格好となり、平野部は西南日本外帯の最北縁、山地は内帯の最南縁に位置している。

本遺跡は旧吉野川、宮川内谷川、黒谷川等の河川により形成された氾濫源の低湿地に所在する。この周辺は、これら大小の河川によって形成された数高地が複雑に入り組んでおり、A・B・C地点いずれもその一角に占地し、地表面下約2.0～3.0m、海拔2.0～4.0m前後に位置している（第1図）。

### 2 歴史的環境

この地域は律令時代における南海道のルートにあたり、南海道の交通の要所である郡頭駅（推定地）が存在し、弥生～中世にかけての遺跡が確認されている。

遺跡の所在する古城（ふるしろ）地区は、室町戦国時代に城（板西城）があったところであり、天正以後、古城（ふるしろ）と呼称されるようになった。昔は板西（板野郡の西半分、現在の板野町・上板町。）と呼ばれ、平安時代より広大な荘園（板西荘）が営まれた地域である<sup>1)</sup>。

中世においては、佐々木経高が最初の守護として入部し、名西郡石井町白鳥の烏坂城に拠って、阿波・淡路・土佐の三国を管轄した。また板野町に関係がある各荘園には、漆原、赤沢、伊沢、久米氏などが、その後に地頭として入部し、この頃より阿波においても古代的権威が崩壊し始める。承久元年（1219年）、承久の変以後、幕府の実権が執権北条氏に移り、新た

に小笠原長清が守護として阿波に入部した。これ以後、地頭の領主化が進み、板野町における荘園構造にも社会的変化がみられるようになり、下地中分が行われ、板西庄は板西上庄と板西下庄の二つの荘園となった。応仁の乱の後、下克上の風潮に乗り、細川氏を倒して三好氏が阿波の実権を掌握すると、三好氏の有力家臣団の一人である赤沢信濃守が板西城に入城し、付近16ヵ所を治め勢力をふるったとされる。

また、本道跡周辺には弥生～中世にかけての遺跡が点在している（第6図）。

弥生時代では、弥生時代後期の朱精製遺構の黒谷川郡頭遺跡、また黒谷川宮ノ前遺跡では弥生時代後期の水田跡が検出されている。

古墳時代では、古墳時代前～後期の蓮華谷古墳群（Ⅰ）<sup>20</sup>・（Ⅱ）をはじめ、蓮華池遺跡（Ⅰ）、愛宕山古墳、阿王塚古墳、かんぞう山古墳群など丘陵上に多くの古墳が存在している。



第6図 古城遺跡（A地点・B地点・C地点）周辺の遺跡

古代においては、継続した周辺部の発掘調査により板野郡衙の所在も想定されている地域である。延喜式にある郡頭駅は、板野町内の郡頭橋周辺に想定され、交通の要所として重要な位置を占めていたと考えられる。また金泉寺周辺は、白鳳・天平期に創建の可能性を残す金光明庵寺の存在が指摘されている。さらに、平安時代にかけて韓崇寺、大唐国寺跡などの寺院が点在している。黒谷川宮ノ前遺跡<sup>6)</sup>では平安時代中期～後期の遺構・遺物が検出され、周辺地域には郡衙の存在が予想される。

中世においては、徳島県では徳島市名東遺跡<sup>4)</sup>、中島田遺跡<sup>5)</sup>などで集落の調査が実施され、板野町では古城遺跡の他、隣接して中世方形屋敷地の黒谷川宮ノ前遺跡等がある。また文献などに板西城・板西荘(曹達院門跡領)等の所在がみられる。また隣接する板野郡藍住町勝瑞においては、南北朝の頃、阿波守護職細川氏の「阿波屋形」として知られる勝瑞城(現在、臨濟宗見性寺境内に本丸跡があったと伝えられている。)の所在が「阿波志」「阿波徴古雑抄」等にみられることから、沖積平野上に中世荘園村落遺跡等の点在が予想される。

#### 注

- (1) 長応元年(1222年)の慈鎮旗状には三昧院領とし阿波国板西荘があげられ、年貢として米200石、麦200石を納めていたことが「華頂妻略」にみられる。
- (2) 須崎一幸「蓮華谷古墳群(Ⅱ)・蓮華谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第4集』徳島県埋蔵文化財センター 1993
- (3) 早瀬隆人「黒谷川宮ノ前遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第9集』徳島県埋蔵文化財センター 1994
- (4) 徳島県教育委員会「名東遺跡(天神地区)『県営名東町間地立替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1990
- (5) 徳島県教育委員会「中島田遺跡」『県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1989

#### 参考文献

- 板野町史編纂委員会『板野町史』板野町 1972  
『角川日本地名大辞典36 徳島県』角川書店 1986  
天羽利夫・岡山真智子『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館 1985  
菅原康夫『日本の古代遺跡 37 徳島』保育社 1988

### Ⅲ 調査結果

#### A 古城遺跡 (A地点)

##### (1) 基本的層序

本遺跡は阿讃山脈の平野部、宮河内谷川と旧吉野川、黒谷川により形成された氾濫原の低湿地の中にある、微高地上に位置している。礫を含まない粘性砂質土が安定して平行堆積している。地表面下約2.2m (L=2.2m) より11～13世紀の遺物包含層があり、緑軸陶器、土師器、須恵器、黒色土器、管状土鍾などの遺物を多く含んでいる。この遺物包含層は第6・7層に対応して、層厚は約20cmで安定している。その下の第8層が平安時代後半～鎌倉時代の遺構面である。この層はにぶい黄褐色を呈し、マンガン粒、鉄分を多量に含んでいる (第7図)。

##### (2) 遺構と遺物

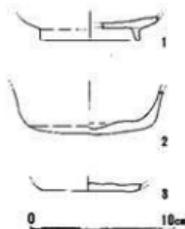
今回の調査により地表面下約2.6mで平安時代中期～鎌倉時代の水田跡を確認した。水田面のレベルはL=2.0mであり、水田を区画するものと思われる水路の他、溝状遺構を多数確認した。また部分的に犁跡らしき遺構を確認した (第8図)。

##### 溝1 (SD1001)

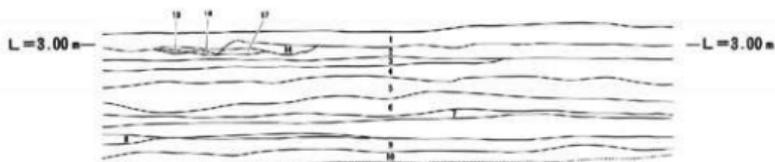
調査区北西部L-3～12グリッドに位置する。ほぼ東西方向に直線状に延びる小溝である。緩やかに傾斜するテラスをもち、水田の水利に伴う水路であると思われる。一部調査区外に延びているため規模は不明であるが、現長約50m、幅約2.6m、深さ約0.5mであり、断面形は中央部で梯状を呈する (第9図)。SD1001からは土師器、須恵器などが出土しているが、いずれも小片であるため実測可能なものは少ない。

##### 出土遺物 (第10図)

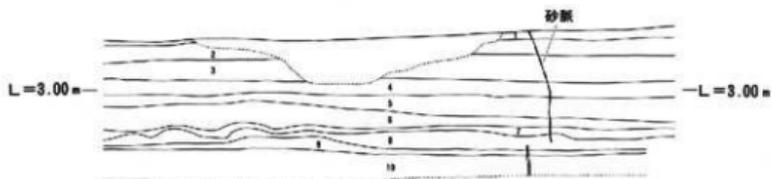
出土遺物はいずれも小片であり、実測可能なものは1点のみである。1は土師器の碗で、輪高台である。2は土師器の



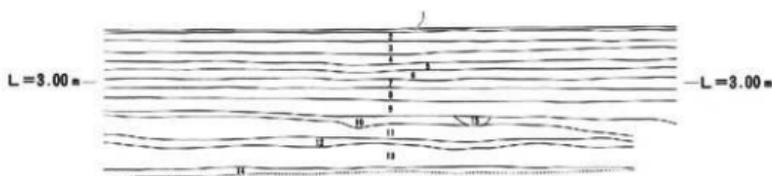
第10図 SD1001出土遺物実測図



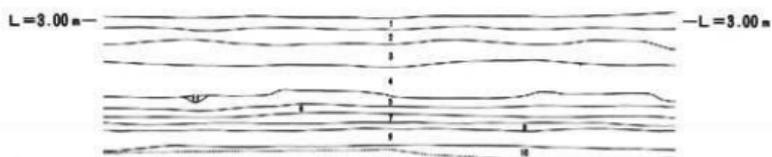
1 調査区北壁セクション



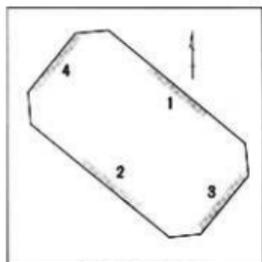
2 調査区南壁セクション



3 調査区東壁セクション



4 調査区西壁セクション



土層実測位置図

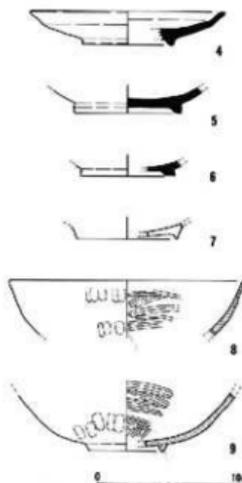
- 0 3m
- 1 区い黄褐色10Y R5/2砂質土(マンガン鉄を若干含む、粘性中あり)
  - 2 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(マンガン鉄、鉄分を含む、粘性中あり)
  - 3 灰オリーブ色5Y 6/2砂質土(マンガン鉄、鉄分を含む、粘性中あり)
  - 4 灰赤5Y 6/2砂質土(マンガン鉄、鉄分を含む、粘性中あり)
  - 5 灰赤7.5Y 6/2砂質土(マンガン鉄、鉄分を多く含む、土層片を少量含む、粘性中あり)
  - 6 灰赤7.5Y 6/1砂質土(マンガン鉄、鉄分を多く含む、土層片を少量含む、粘性中あり)
  - 7 区い黄褐色2.5Y 6/2砂質土(土層片を少量含む、粘性中あり)
  - 8 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(灰化物、土層片を少量含む)
  - 9 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(灰化物、土層片を少量含む、粘性中あり)
  - 10 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(マンガン鉄を若干含む、粘性中あり)
  - 11 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(マンガン鉄を若干含む、粘性中あり)
  - 12 区い黄褐色2.5Y 6/2砂質土(マンガン鉄を多く含む、粘性中あり)
  - 13 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(マンガン鉄が豊富、粘性中あり)
  - 14 褐色10D Y 6/1粘質土(マンガン鉄を含む、粘性あり)
  - 15 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(粘性あり)
  - 16 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(灰化物、土層片を若干含む、粘性中あり)
  - 17 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(灰化物、土層片を含む)
  - 18 区い黄褐色10Y R5/4砂質土(マンガン鉄を若干含む、粘性中あり)
  - 19 灰赤2.5Y 7/2砂質土(マンガン鉄、土層片を若干含む、粘性中あり)

第7図 古城遺跡(A地点)土層実測図

杯である。体部は直立気味に外上方に延びる。3は土師器の皿である。土師器の杯、皿の底部切り放し手法は回転ヘラ切りである。小片であるため時期の決定は困難であるが、概ね11世紀頃に位置付けられるものと思われる。

### 溝2 (SD1002)

K-3～12グリッドに位置し、溝1より南へ6m離れた地点で確認され、溝1とほぼ平行に延びる小溝である。溝1と同様、一部調査区外に延びているため、規模は不明であるが現長約56m、幅約1.4m、深さ約0.4mである。数回内外の補修改築が行われており、土層断面で溝の切り合い関係が確認できる。断面形は梯形を呈する(第9図)。溝2は調査区南側にひろがる水田跡の水利に伴う水路であると思われる。出土遺物から存続時期は10～13世紀のころであると考えられる。



第11図 SD1002出土遺物実測図

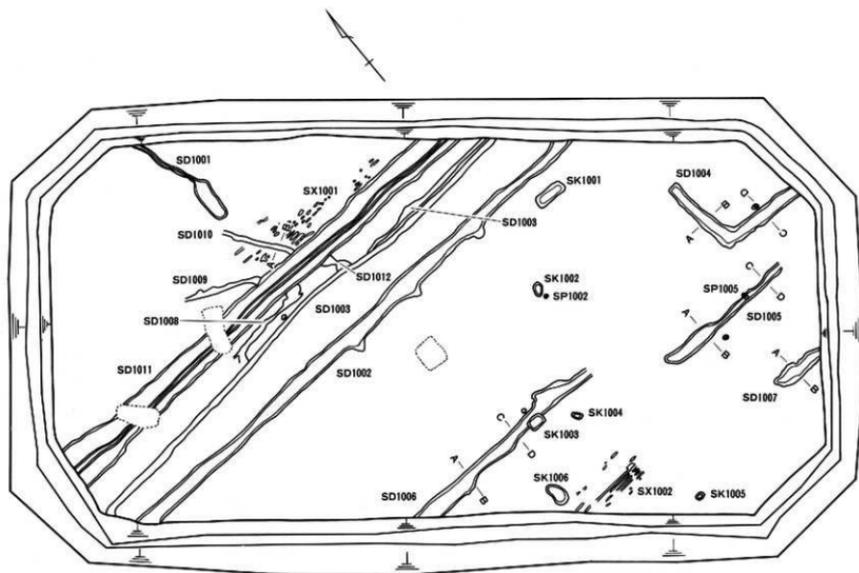
### 出土遺物 (第11図)

溝2からは緑釉陶器の高台付皿・土師器碗・瓦器碗・土師質の管状土鍋等が出土している。いずれも小片であり、実測可能なものは少ない。4～6は京都系(洛西)の緑釉陶器の皿であり、いずれも硬質である。出土した

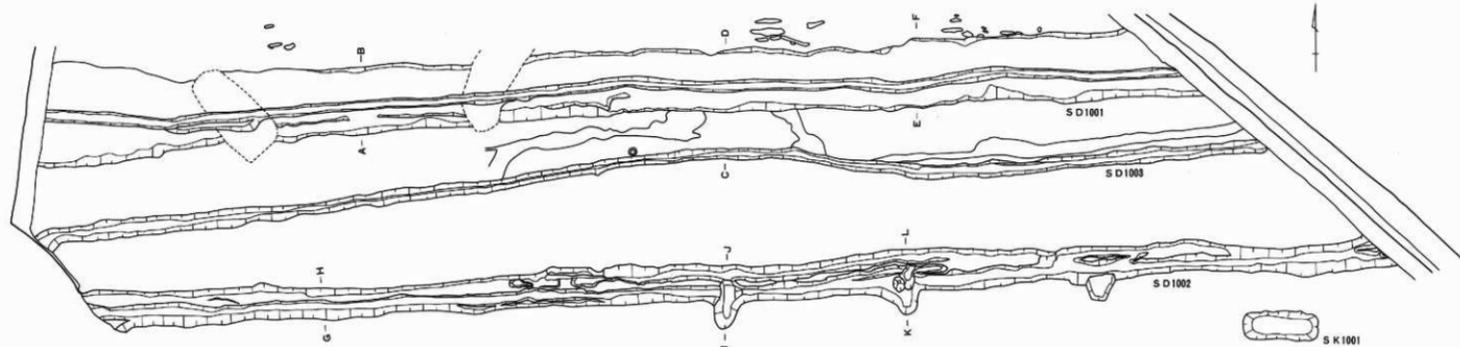
緑釉陶器の器種には碗と皿がある。これらの緑釉陶器はC期<sup>①</sup>に属するものである。技法的には器体の全面には施釉されず一部露胎であること、および器形から10世紀初頭～10世紀前半の時期に属するものと思われる。他には軟陶の緑釉陶器も出土している。7は土師器の碗であるが、小片であるため時期決定は困難である。8・9は和泉型の瓦器碗である。体部は内彎して外上方に延びる。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期<sup>②</sup>に属するものと思われ、時期的には13世紀初頭頃のものと思われる。その他、図化はしていないが、小形の土師質の管状土鍋も出土している。形態は紡錘形を呈する

### 溝3 (SD1003)

K, L-3～12グリッド、溝1と溝2の間を東西南北に延びる溝である。一部調査区外に延びているため規模は不明であるが、現長約52m、幅約0.4m、深さ約0.15mの浅い小溝である。断面形はD字状を呈する。水田跡に関連した水路であると思われる(第9図)。



第 8 图 古城遺跡 (A地点) 遺構配置図



L=2.00 m **A** **B** L=2.00 m



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒を若干含む)
- 2 暗黄褐色2.5Y6/8砂質土
- 3 比較的黄色2.5Y6/3粘質土
- 4 灰色5Y6/1粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 5 灰色5Y6/1粘質土 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 6 灰色5Y6/1粘質土 黄灰色2.5Y6/1粘質土(マンガン粒を含む)

L=2.00 m **C** **D** L=2.00 m



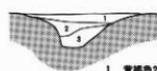
- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒を若干含む)
- 2 灰黄色2.5Y6/2砂質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 3 灰黄色2.5Y6/2砂質土
- 4 灰色5Y6/1粘質土
- 5 灰色5Y6/1粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)

L=2.00 m **E** **F** L=2.00 m



- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒を若干含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 3 灰黄色2.5Y6/2砂質土
- 4 黄灰色2.5Y6/2粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 5 灰色5Y6/1粘質土
- 6 灰色5Y6/1粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)

L=1.80 m **G** **H** L=1.80 m



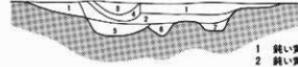
- 1 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 2 黄灰色2.5Y6/1粘質土(マンガン粒を含む)
- 3 赭灰色10G Y5/1粘質土(鉄分を若干含む)

L=1.80 m **I** **J** L=1.80 m



- 1 灰黄色2.5Y6/2粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 2 灰オリーブ色5Y6/2粘質土(マンガン粒、鉄分を若干含む)
- 3 灰色5Y6/1粘質土(鉄分、マンガン粒を若干含む)
- 4 オリーブ灰色2.5G Y6/1粘質土(鉄分を若干含む)
- 5 比較的黄2.5Y6/3砂質土(マンガン粒、鉄分を含む)
- 6 赭灰色10G Y5/1粘質土(鉄分を若干含む)
- 7 黄褐色2.5Y5/3砂質土(マンガン粒、鉄分を含む)

L=1.80 m **K** **L** L=1.80 m



- 1 鈍い黄色2.5Y6/3砂質土(マンガン粒、鉄分を含む)
- 2 鈍い黄色2.5Y6/4粘質土(マンガン粒、鉄分を含む)
- 3 鈍い黄色20Y R5/4粘質土(マンガン粒、鉄分を含む)
- 4 黄灰色2.5Y6/1粘質土(マンガン粒を若干含む)
- 5 赭灰色10G Y6/1粘質土(鉄分を若干含む)
- 6 赭灰色10G Y5/1粘質土(鉄分を若干含む)
- 7 赭灰色10G Y6/1粘質土(鉄分をスジ状に含む)

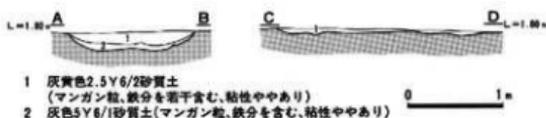
第9図 SD1001・1002実測図

## 出土遺物

土師質土器の壺口縁部が1点出土しているが、小片であるため図化できなかった。

## 溝4 (SD1004)

G~I-14~16グリッド、調査区南東部で確認された小溝である。一部調査区外に延びているため、規模は不明であるが現長約15m、幅約1.7m、



第12図 SD1004土層実測図

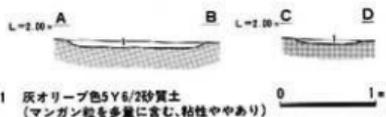
深さ約0.2mであり、断面形はU字状を呈する。途中で90°屈曲しており、その機能は不明であるが、水田の区画あるいは排水溝であると考えられる。溝2と同様、調査区南側にひろがる水田跡の水利に伴う水路であると思われる(第12図)。

## 出土遺物

土師器等が出土したが、小片であるため図化し得るものはなかった。

## 溝5 (SD1005)

G-12~15グリッド、調査区南東部で確認された小溝である。規模は現長約7.5m、幅約1.0m、深さ約0.05mの浅い溝である。断面形は扁平なD字状



第13図 SD1005土層実測図

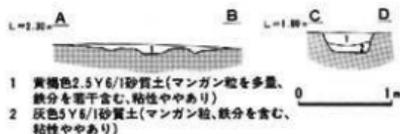
を呈する。その機能は不明であるが、水田の区画あるいは一時的な注排水の機能を有する溝であると考えられる(第13図)。

## 出土遺物

土師器等が出土したが、小片であるため図化し得るものはなかった。

## 溝6 (SD1006)

G-7~11グリッド、調査区南西部で確認された小溝である。規模は現長約11.0m、幅約1.1m、深さ約0.05mの浅い溝である。その機能は不明であ

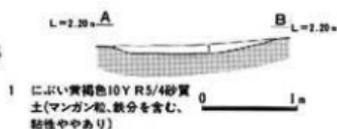


第14図 SD1006土層実測図

るが、水田の区画あるいは一時的な注排水の機能を有する溝であると考えられる延長方向にはSD1004があり、SD1006とつながるものと思われる（第14図）。

#### 出土遺物

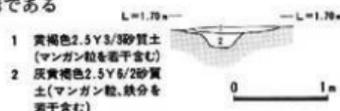
土師器等が出土したが、小片であるため図化し得るものはなかった。



第15図 SD1007土層実測図

#### 溝7 (SD1007)

E-15グリッド、調査区南西部で確認された小溝である。規模は現長約2.8m、幅約1.7m、深さ0.05mの浅い溝である。その機能は不明であるが、水田の区画あるいは一時的な注排水の機能を有する溝であると考えられる（第15図）。



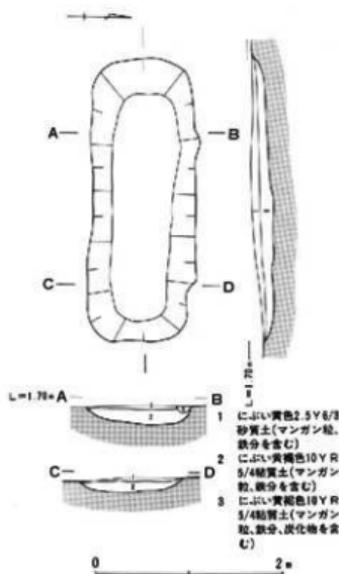
第16図 SD1010土層実測図

#### 出土遺物

土師器等が出土したが、小片であるため図化し得るものはなかった。

#### 溝10 (SD1010)

N, M-8グリッド、北西から南東方向に水田面と溝1をつなぐように延びている。規模は長さ約7m、幅約0.4m、深さ0.15mである。断面形は偏平なD字状を呈する。溝10の底面高は、溝1の底面より0.35~0.4m程度高い位置にあり、溝10の底面高が水田面側のが高く、溝1に流れ込むようになっていることから、水田内の一時的な排水の機能を持っていたものと思われる（第16図）。



第17図 SK1001実測図

#### 出土遺物

土師器・瓦器等が出土したが、小片であるため図化し得るものはなかった。

#### 土坑1 (SK1001)

J-13グリッド、調査区南部で確認された土坑

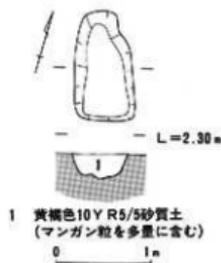
である。溝2の南側に隣接する。主軸は東西方向であり、隅丸方形の平面プランを呈する。規模は長軸3.0m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。断面形は梯子状を呈する。遺構内埋土は2層に分層される。形状、規模から土墳墓の可能性も考えられる（第17図）。

#### 出土遺物

土坑1の埋土中より緑釉陶器の小片、管状土鍾が出土しているが、実測し得る個体はない。

#### 土坑4（SK1004）

G-11グリッド、SD1006の南側で確認された土坑である。主軸は北西方向であり、隅丸方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.5m、短軸0.6m、深さ0.26mである。断面形は梯形状を呈する。遺構内埋土は1層である。形状・規模からSK1001と同様、土墳墓の可能性も考えられる（第18図）。



第18図 SK1004実測図

#### 出土遺物

土師器・瓦器等が出土したが、小片であるために図化し得るものはなかった。

#### 犁跡（SX1001・1002）

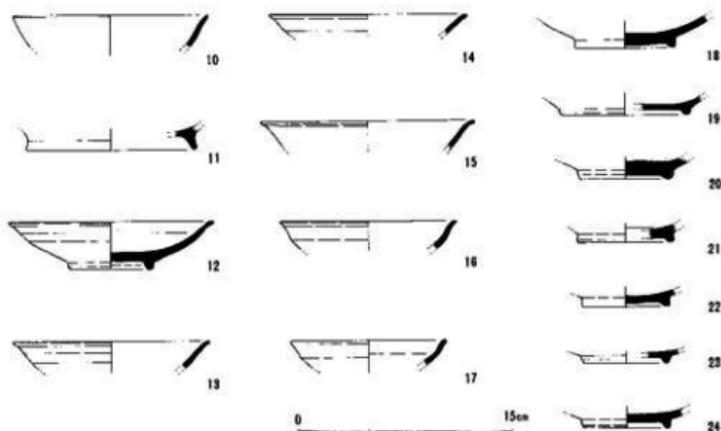
M-9、10及びE-11グリッド、調査区北東部、南西部の水田面で部分的に確認されている（第8図）。遺存状態は痕跡を示す程度であり、検出状態が良好なもので長さ約1.5m、幅約0.4m、深さ約0.15mを測る。規模・方向および形状に斉一性がみられる。また足跡らしき痕跡もみられる。

#### 遺物包含層出土の遺物

遺物包含層および水田面からは土師器の杯・皿・土師質土器釜、緑釉陶器、土師質の管状土鍾、東播系須恵質土器・瓦器等が出土しているが、いずれも小片であり実測可能なものは少ない。

#### 緑釉陶器（第19図）

10は椀の体部、11は高台部である。10は硬質、11は軟質である。軸は薄くハケ塗りされる。12～24は皿である。いずれも形態・製作技法・釉の発色等から、京都系（洛西）の産と思われる。时期的にはC期に属すものと思われ、10世紀末葉～11世紀後半頃の年代が与えられよう。



第19図 遺物包含層出土遺物実測図 1

#### 土師器 (第20図)

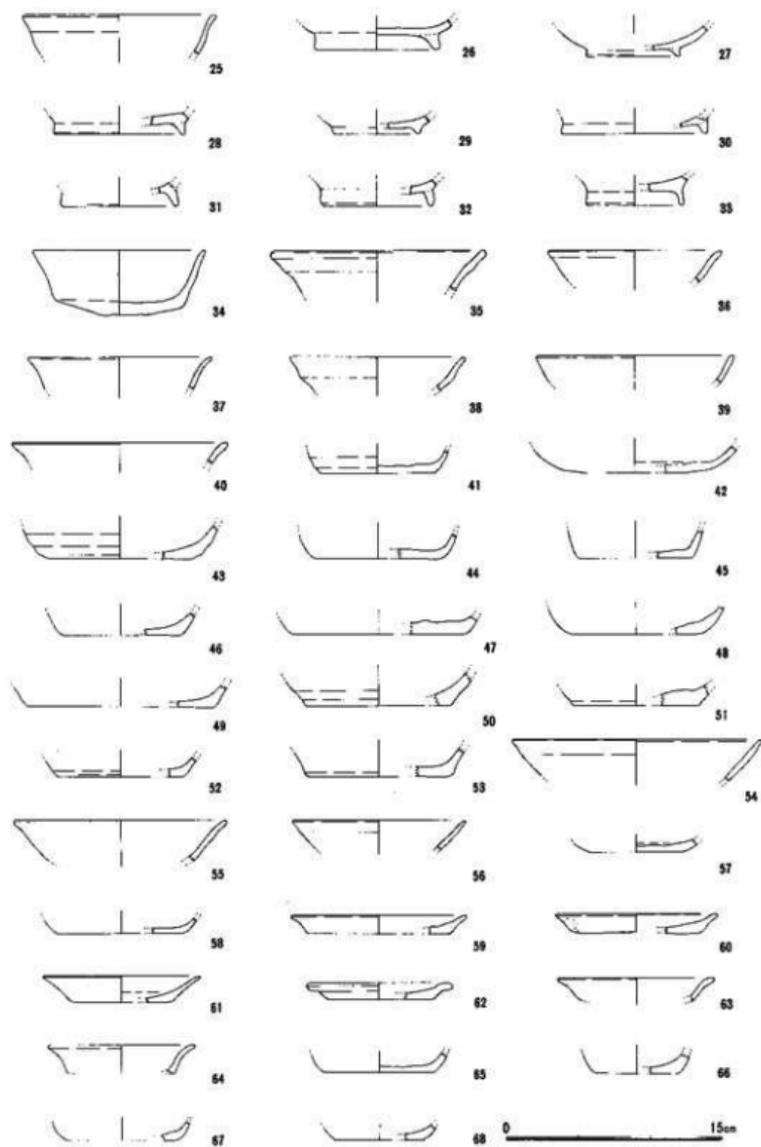
25～33は碗である。高台は高く、器体全体をヨコナデで仕上げる。完形のものはなく、いずれも小片であるため詳細な時期の特定は困難である。34～44は杯である。34のように、体部が直立気味に外上方へ直線的に延びる形態のものが多い。底部切り放し手法は43・49・53の他はすべて回転ヘラ切りである。54～58は皿である。体部は外上方に延びる。59～68は小皿である。口縁部は外反するものが多い。(59～61・63・64)。62は「て」字状の口縁を呈する。これらの土師器類の時期は、概ね10世紀末葉～11世紀後半に位置付けられるものと思われる。

#### 黒色土器 (第21図)

69・70はともに黒色土器A類碗<sup>①</sup>である。内面に平行ヘラミガキが施される。小片であるため詳細な時期特定は困難であるが、10世紀後半～11世紀初頭頃と思われる。

#### 瓦器 (第21図)

71～75は碗である。外面はヨコナデで仕上げられており、ヘラミガキは施されない。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、時期的には12世紀末葉～13世紀初頭頃に属するものと思われる。76は和泉型の瓦器小皿である。



第20图 遺物包含層出土遺物実測図 2

### 土師質土器釜（第22図）

77～81は土師質土器釜である。77～79は体部、80・81は脚部である。77はいわゆる摂津C型の釜<sup>66</sup>である。78は釜の底部である。いずれも小片であるため詳細な時期の特定は困難であるが、概ね11世紀後半～13世紀後半の頃と思われる。

### 土師質土器鍋（第22図）

68～76は土師質土器鍋である。口縁部は外反し、端部をつまみ上げるもの（82・83・90）、三角形を呈するもの（84・86）、方形状におさめるもの（85・87～89）がある。いずれも小片であるため詳細な時期の特定は困難であるが、概ね10世紀後半～12世紀後半の頃と思われる。

### 須恵質土器（第23図）

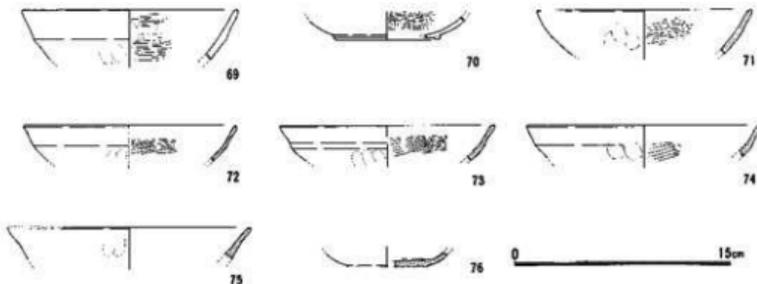
91～94は杯である。体部は直線的に外上方に延びる。95～100は壺である。81は長頸壺の口～頸部で、口縁端部は屈曲する。8世紀末～9世紀頃と思われる。101は東播系甗である。时期的には12世紀末～13世紀初頃と思われる。102は東播系片口鉢である。口縁部はやや肥厚する。東播系須恵質土器Ⅲ期第1段階<sup>67</sup>、12世紀末～13世紀初頃と思われる。

### 近世陶器（第23図）

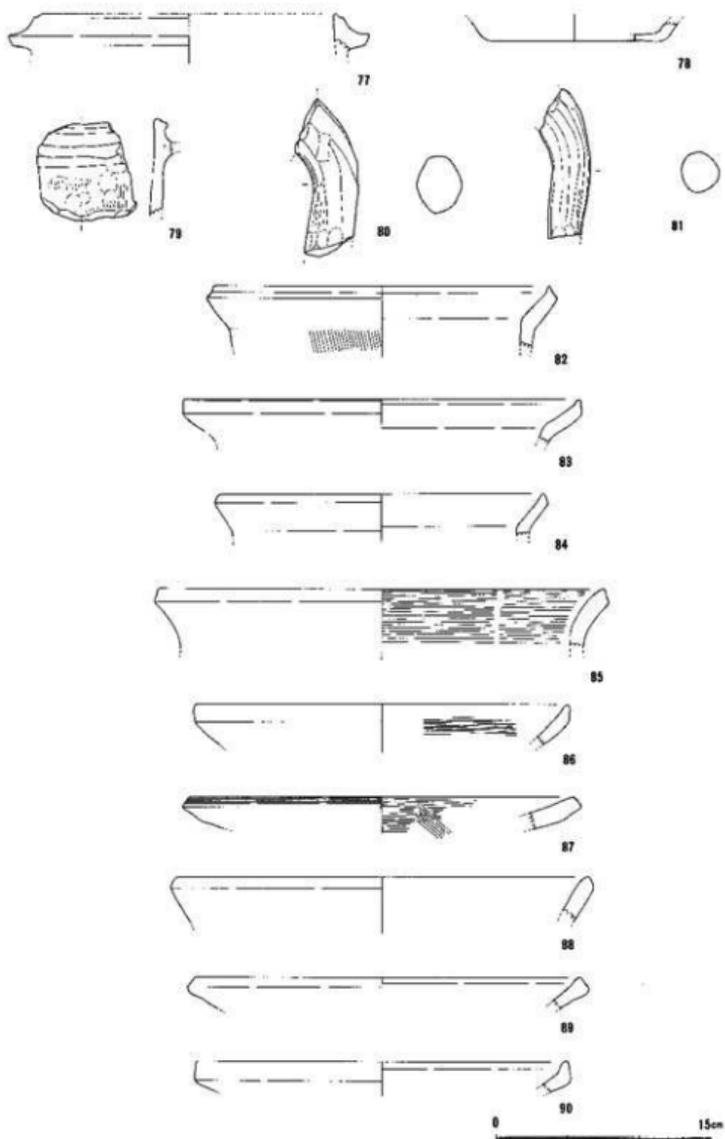
103は焼き締めの小鉢である。104は施釉陶器の小皿である。

### 土鍾（第24図）

105～145は土師質の管状土鍾である。形態は小形の紡錘形を呈する。



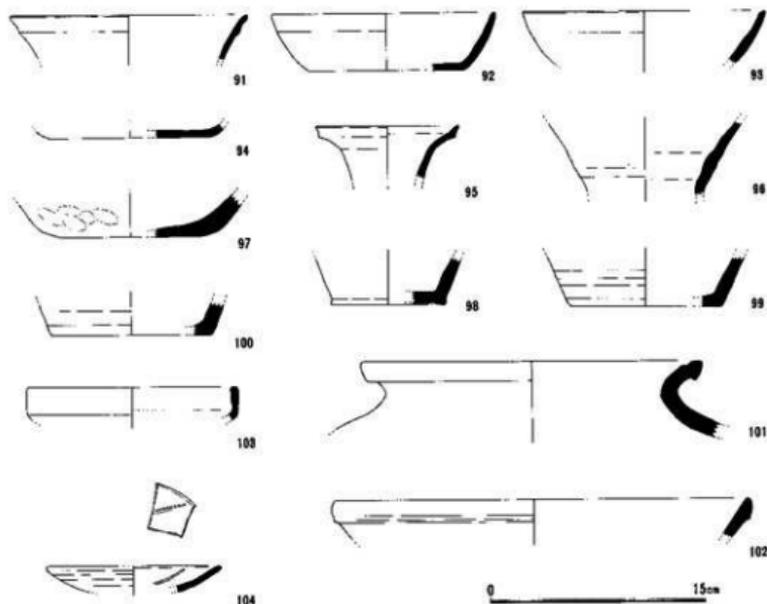
第21図 遺物包含層出土遺物実測図 3



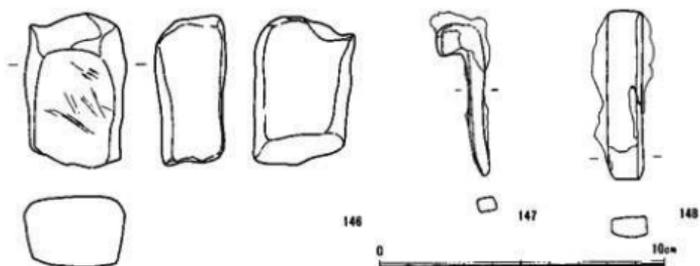
第22图 遗物包含層出土遺物実測图 4

その他の遺物 (第25図)

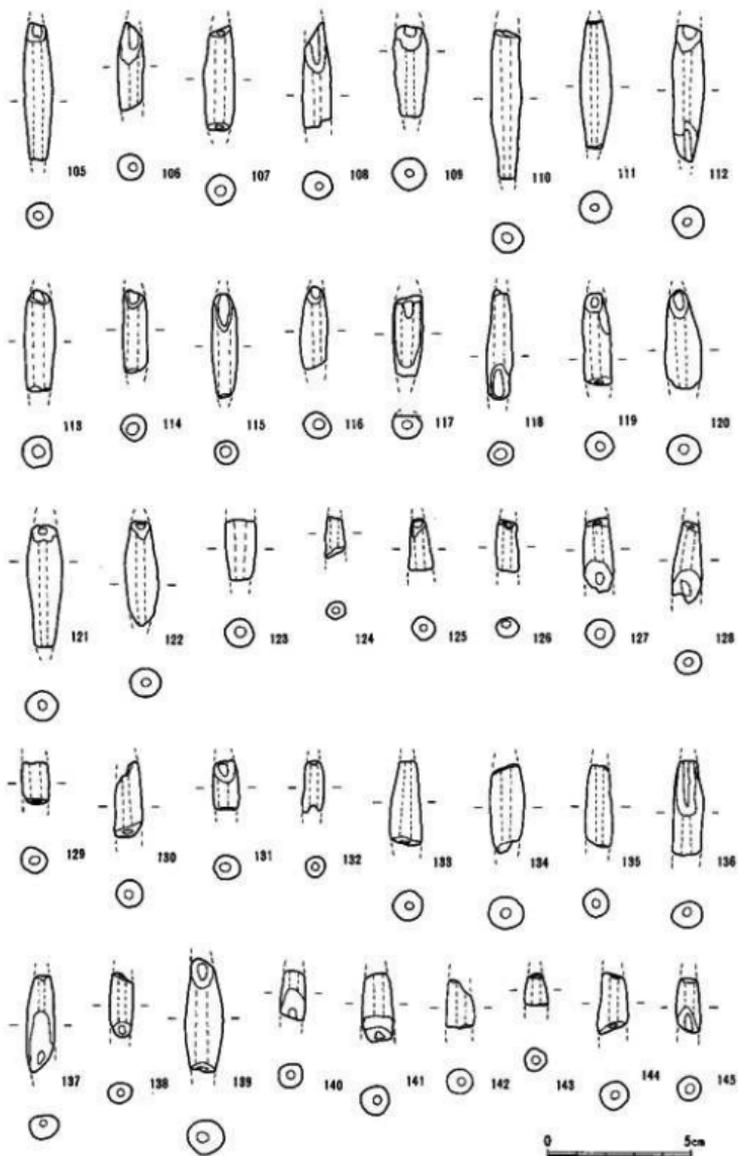
146は砂岩の砥石である。147・148は鉄製の釘である。断面形は四角形を呈する。



第23図 遺物包含層出土遺物実測図 5



第25図 遺物包含層出土遺物実測図 7



第24图 遺物包含層出土遺物 6

### (3)まとめ

#### 遺構について

今回の調査では、水田跡を裏付ける畦半は確認することができなかった。しかし、遺構面を形成する上層はマンガング粒、鉄分を多量に含み、下部にはそれらの沈澱層が確認でき、また犁耕や水稻の根株と思われる痕跡なども検出されていること等から、水田土壌と認定できよう。

検出された多くの溝状遺構は、耕作に関連した遺構であると思われる。特にSD1002は等間隔に南に延びる溝の痕跡があり、調査区南部で検出したSD1006に直交するものと想定できる。またSD1004はSD1002およびSD1006と繋がる可能性がある。

これらの遺構は、水田土壌から出土した緑釉陶器・土師質土器の釜、土師器杯および上層の遺物包含層出土の東播系の須忠質土器・土師質土器の皿・瓦器碗等から10世紀前半～13世紀の時期が考えられる。

#### 条里との関係

水利に関わると同時に地割区画の機能も持つSD1001・SD1002と条里の関係についてふれておきたい。

板野町周辺の条理の方向については、服部昌之氏の『阿波条理の復元的研究（1966）』によれば、磁北より $9\sim 10^\circ$ 西へ傾くといわれている。しかしSD1001・SD1002の方向から想定すると磁北から西へ約 $1^\circ$ 傾くにすぎない。これは古城遺跡（C地点）で検出したSD1001・SD1002も同様である。黒谷川を挟み北側に隣接する黒谷川宮ノ前遺跡において検出された溝条遺構では、13世紀後半～14世紀前半の時期とされるSD1001～SD1004では木遺跡と類似した様相を示す。しかし、10世紀頃の時期とされるSD1007・SD1016では様相が異なり、磁北より $9\sim 10^\circ$ 西へ傾いている。

条里については板野町古城地区の微高地周辺部の唐園・高樹・大寺地区において条里の区画が一部存在している。しかし、古城地区の集落を中心に広がる微高地においては条里の方面地割を復元することができない。これは13世紀段階において正方位に沿った区画の改変があったためであると考えられている<sup>(4)</sup>。

また平行して並ぶSD1002-SD1006-SD1007間は、それぞれ約10m間隔で構築されている。これは一町区画（一坪・一辺約109m）を細長く十等分して一反とする長地型の条里地割と符号している。古代においては一坪を二等分して、更に五分する半折型が多いが、牛馬耕開始以降、牛馬耕の能率を高めるのに都合のよい長地型の地割に改変したとされる。木遺跡では犁跡が検出されていることから、中世（牛馬耕開始以降）の水田区画の規模を示す

一資料となろう。

文献資料(華頂要略 鎌倉遺文1974・2970・4687)によれば、この時期に当該地域において大規模な開発・開墾を記す記述が見られる。当該地域は板西荘の一角に含まれており、また年貢に関する記事では、1222年から1234年の12年間で米・麦等の石高が2倍以上に増加しており、この時期に大規模な荘園の拡大および生産力の向上があったと推測できよう。

これらのことから、10～13世紀の時期に条里方向の変化が生じたものと推測されている<sup>(7)</sup>。変化の要因としては、旧条里が埋没した後の再区画あるいは補修改築によるものと考えられる。他府県においても、顕在する条里遺構と重なり合うもの、あるいは全く異なる方向を示す事例が報告されている。今回の調査で検出されたSD1002は、数内外の補修改築がされ、現在の地割に至っていることから、旧条里の方向性のある程度踏襲し再整理されたものと考えられる。またSD1001-SD1002間は幅約6.0mを測り、その性格として、道の機能を有していたと考えられる。

古城遺跡周辺の条里については早淵隆人氏の論考<sup>(8)</sup>があるが、今回は発掘面積の制約があり、水系や坪並を明らかにすることはできなかった。しかし検出された遺構は条里研究としての資料的価値は高く、今後諸分析の結果および周辺の遺跡との関連、文献、古図など様々な角度から研究していく必要があろう。

## 注

- (1) 百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 1986
- (2) 尾上 実「南河内の瓦器概観」『古文化叢書』 1983
- (3) 田中 琢「古代・中世における手工業の発達 窯業 畿内」『日本の考古学』Ⅵ 河出書房 1967
- (4) 菅原正明「畿内における土管と製作の流通」奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集『文化財叢書』 1983
- (5) 森田 稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987
- (6) 早淵隆人「古野川下流域における条里地割の継続性について -黒谷川宮ノ前遺跡に見られる区画溝を中心として-」徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2 1991
- (7) 注(6)
- (8) 注(6)

## B 古城遺跡（B地点）

### (1) 基本的層序

地表面下平均1.5mまでは無遺物層の黄褐色、褐色、オリーブ褐色等の粘性砂質土の7つの層が堆積しており、第8層は土色の違いにより、8a層、8b層、8c層と分層した。第8層はいずれの層も遺物を含んでおり、また第8層上面では噴砂の吹き上げを確認した。

近世の水田面らしき層を第7層より上層で確認したが、遺物包含層に伴う面での遺構は確認できなかった（第26図）。

### (2) 遺構と遺物

明確に遺構面として確認できなかったが、土層断面には中世（鎌倉～室町時代）のものと思われる水田の畦畔らしき痕跡が見られた。その他、地震災害による噴砂現象が確認された。

#### 噴砂（第27図）

A-5、B-5、6、C-6、7グリッド、調査区南側に噴砂（液状化現象）の痕跡が認められた<sup>□</sup>。噴砂が広がる面の直上の層からは15世紀後半～16世紀の遺物が出土していることなどから、噴砂現象が生じた年代は15世紀後半頃と推測される。

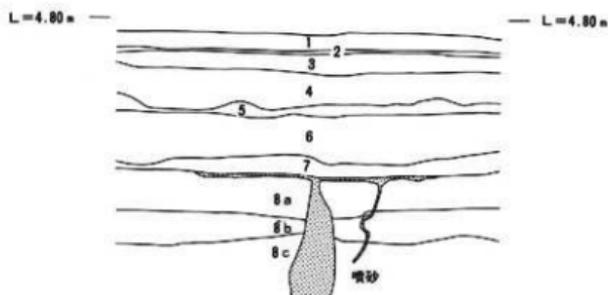
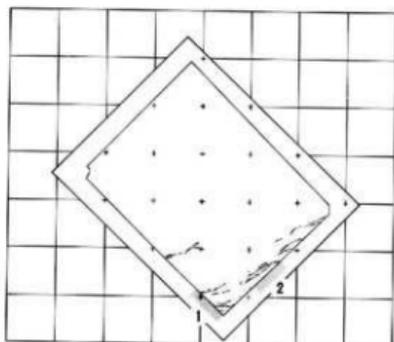
この時期に相当する巨大地震としては、『熊野年代記』に明応7年（1498年）9月20日、辰の刻（午前8時頃）に大地震（明応東海地震）が発生し、この地震で紀伊山地の熊野神社の本宮社と那智坊舎が倒壊した記述がみられ、これが明応東海地震の存在を示す可能性があると考えられている。

東海地震と南海地震には、ほぼ同時、または東海地震が発生して少なくとも2年以内に南海地震が発生するという規則性があることなどから、この噴砂は明応7年（1498年）の南海地震の際の噴砂現象ということが推測される。

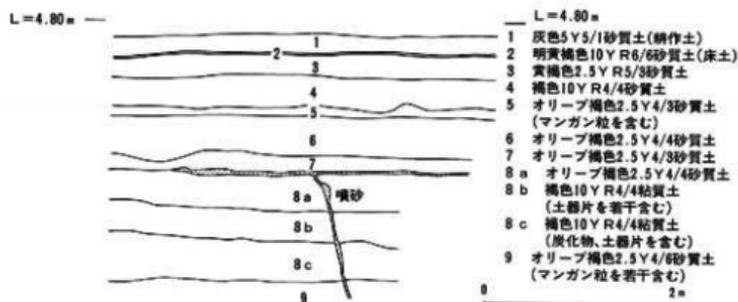
#### 遺物包含層出土の遺物（第28図）

古城遺跡（B地点）は遺構を確認するにいたらなかったが、遺物包含層中からは中世土器等の遺物が数点出土している。いずれも小片であるため実測可能点数は少ない。

1～12は上師質土器の供膳具である。1～4は杯、5～9は皿、10～12は小皿である。いずれも小片であり、摩滅しているため時期を特定することは困難であるが、概ね14～15世紀に収まるものと思われる。



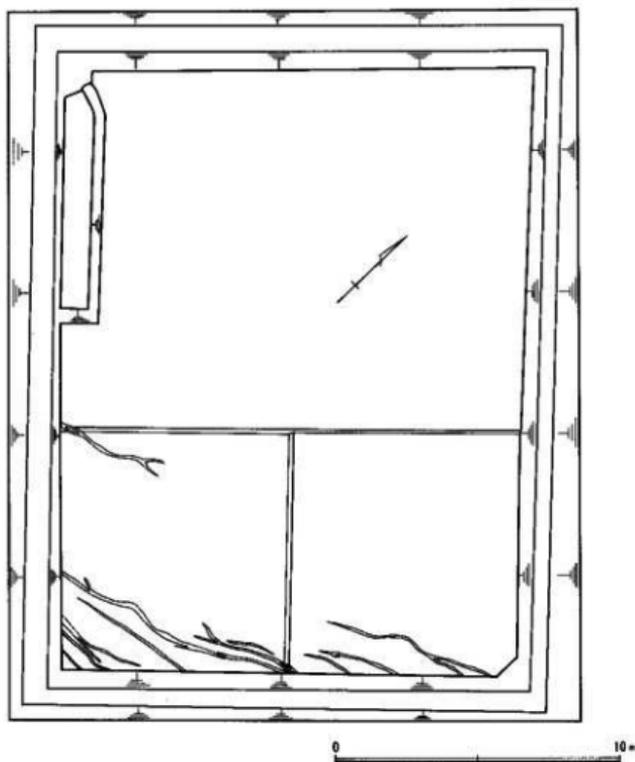
1. 西壁セクション



2. 南壁セクション

第26図 古城遺跡 (B地点) 土層実測図 (基本的層序)

13～15は瓦器である。13・14は碗、15は皿である。時期は13世紀後半～14世紀頃と考えられる。



第27図 古城遺跡（B地点）遺構配置図（噴砂）

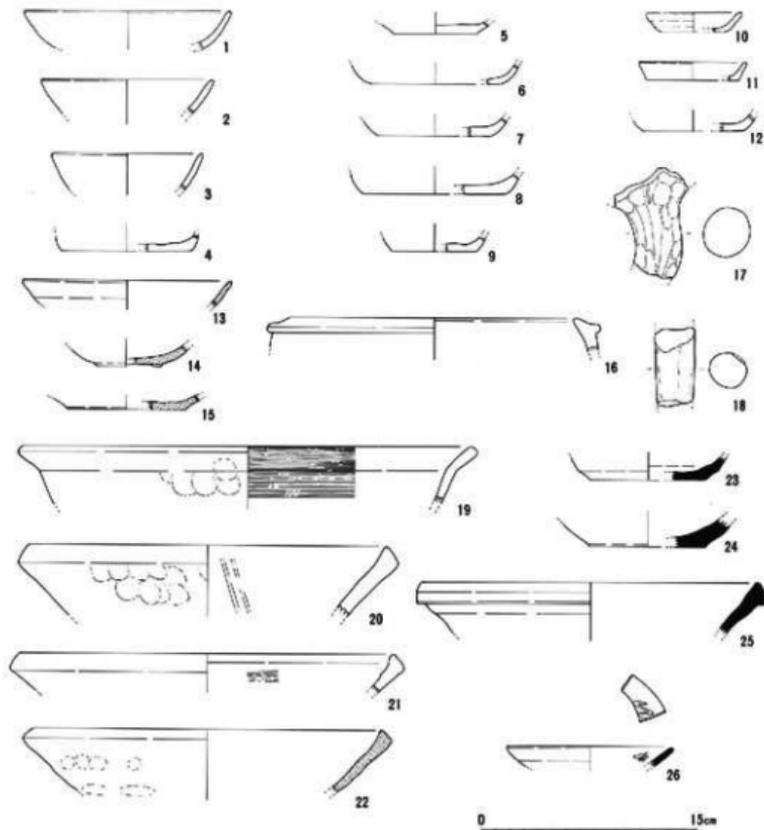
16～19は煮沸具である。16は土師質土釜である。口縁部直下に短い鋤が付く。17・18は脚部である。19は土師質の土鍋である。口縁部は外反し、口縁部および体部内面はハケで仕上げる。時期は14世紀後半～15世紀頃と思われる。

20～22は調理具である。20は土師質の摺り鉢、21・21はこね鉢であり、21は土師質、22は瓦質である。体部は直線的に外上方に延びて、口縁部は肥厚する。

23～25は須恵質土器である。23は杯である。底部切り放し手法は回転糸切りである。24は甕の底部である。25は東播系の片口鉢である。口縁部は肥厚して端部は上下に拡張する。時

期は14世紀前半の頃と思われる。26は近世の染め付けの小皿である。

その他、出土遺物には輸入陶磁器（龍泉窯系青磁碗<sup>(2)</sup>）の小片が数点、緑釉陶器の小片が1点出土しているが、いずれも小片であるため図化できなかった。



第28図 古城遺跡B地点遺物包含層出土遺物実測図

### (3)まとめ

平成元年度の試掘調査により、中世遺物を主とする遺物包含層が確認され、今回の調査でも鎌倉～室町時代の遺物が検出されたが、遺構は確認できなかった。しかし、調査区南側に噴砂（液状化現象）の痕跡が認められた。通産省地質調査所の寒川 旭氏の御教示によると、明応7年（1498年）の大地震の際の噴砂現象ということが推定され、文献資料に残る記録の存在を裏付ける貴重な資料である。

遺物包含層は調査区の周辺にもかなり広い範囲に広がっていると予想され、噴砂直上の層から水田耕作が繰り返されていると思われる層が確認されていること等から、中世後半にかなりの規模で土地利用がされていたと考えられる。その際の基幹集落としては、古城遺跡（C地点）・黒谷川宮ノ前遺跡等が推定できる。

### 注

- (1) 古城遺跡（B地点）のほかにも大地震による液状化現象は確認されており、板野郡板野町黒谷川宮の前遺跡、黒谷川古城遺跡、黒谷川郡頭遺跡、神宅遺跡（徳島県教育委員会調査）、黒谷川宮ノ前遺跡（当センター調査）等の遺跡においても噴砂が確認されている。
- (2) 龍泉窯系青磁碗1-5b類 横田賢次郎・森田 勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年を中心にして - 』『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978



第1包含層とし、その下の8層を12世紀末～13世紀前半（鎌倉時代前半）の遺構面（標高3.7m）と考え、第1遺構面とした。9層は層位的に非常に不安定であり、部分的にしか確認できず、ほぼ8層の直下に10層があり、これを12世紀後半～末（平安時代末～鎌倉時代初）の遺構面（標高3.5m）と考え第2遺構面とした。

その下は次第に砂性が増し、遺物を全く含まない粘土質・砂質が交互に堆積した層厚0.75mの無遺物層をはさみ、第3包含層（19・20層）に至る。第3包含層は黄灰色を呈し、マンガング粒、炭化物を多量に含み、遺物は上器細片が極少量出土する程度である。その下の第3遺構面とした21層はマンガング粒を多量に含むにぶい黄褐色粘質土で、弥生時代の水田跡と想定したが、そのことを裏付ける畦半等の遺構を確認するに至らなかった（第29図）。

## 第1遺構面

### (2)遺構と遺物

第1遺構面では、主に12世紀末葉～13世紀初頭にかけての遺構・遺物を検出した（第30図）。検出した遺構は、大溝2条・溝条遺構4条・掘立柱建物3棟・棚列2基・堅穴状遺構2軒・土壇墓3基・土坑65基・ピット185基がある。出土遺物には、輸入青・白磁、黒色土器の碗、土師質土器の杯・皿、瓦器の碗・皿等の供膳具の他、土師質土鍋、瓦質土釜、滑石製石鍋等の煮沸具、東播系片口鉢、備前摺り鉢等の調理具等が多数出土している。その他、北宋銭、鉄製品も出土している。

なお土壇墓出土の人骨については、高知医科大学の山本恵三先生に人骨鑑定を依頼した。鑑定結果の詳細な報告は別章に記載してあるので参照されたい。また平成2年度調査のST1001出土人骨については腐食・変形が著しく鑑定不可能であった。

### 溝1（SD1001）

調査区中央部を貫く、掘削的な機能を持つものと推定される南北に延びる大溝を検出した（第30図）。N-10°-W方位に延び、調査区北側で西方向へ直角に曲がる。規模は幅が開口で約2.2～2.5m・底面で約0.7m・深さ約1.3m前後で、断面形は逆台形を呈する。素掘りの溝であり、数回内外の補修改築が行われているようであり、最初の溝が埋没した後、新しく溝を掘削したことが断面で確認できた（第31図）。

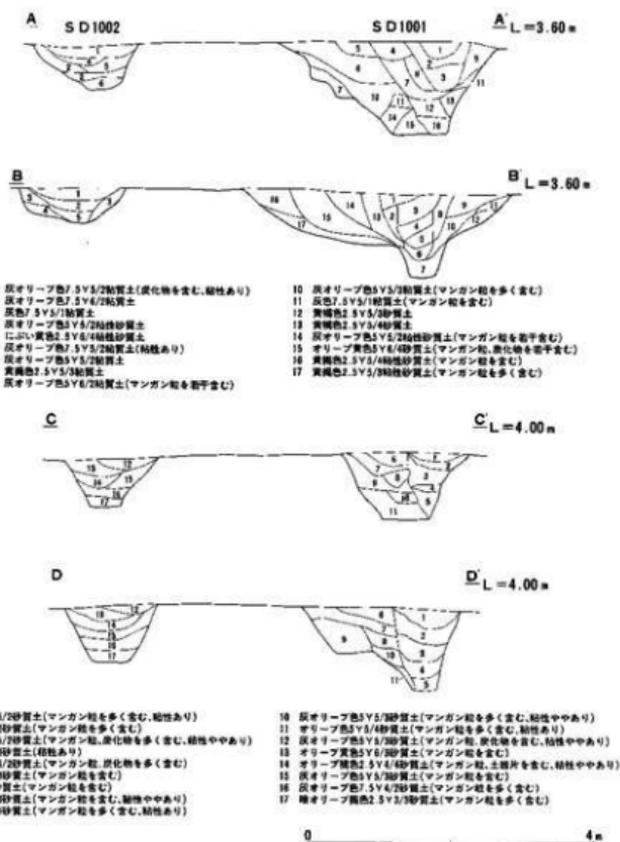
### 溝1出土の遺物（第32～35図）

溝1からは輸入青磁・瀬戸窯の卸付皿・古唐津窯の碗・亀山窯の壺・伊万里青磁・瓦器・土師質土釜等が出土しており、存続時期は13世紀前半～15世紀末葉（鎌倉時代前半～室町時

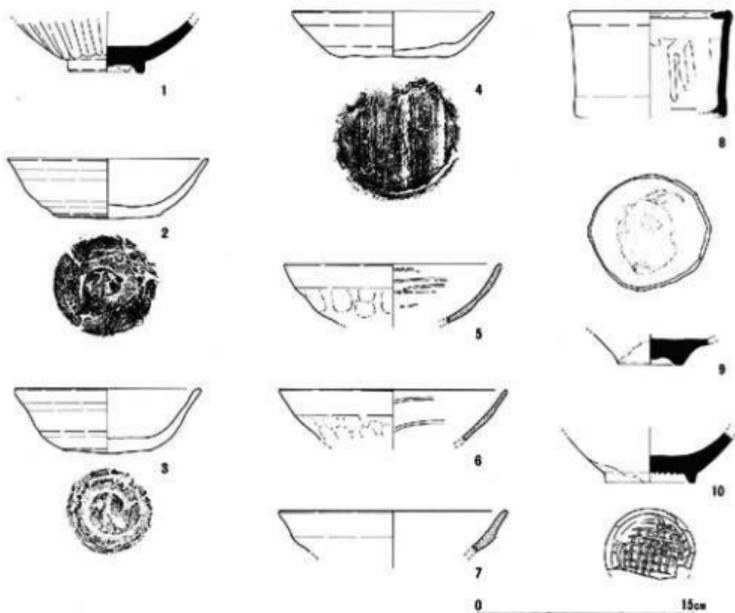


代)と推定される。

1～10は供膳具類である。1は青磁碗である。横出・森田編年<sup>(1)</sup>の龍泉窯系青磁碗1～5類である。体部外面に蓮弁が施される。2～4は上師質土器の杯で、いずれも底部切り放し手法は回転ヘラ切りである。また4の底部には板状圧痕がみられる。时期的には13世紀後半～14世紀にかけての頃と思われる。5～7は瓦器碗である。尾上分類<sup>(2)</sup>の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀後半～13世紀初頭頃に属するものと思われる。8は伊万里青磁の香炉である。9は古唐津の溝紋皿である。見込みには砂目がみられる。10は瀬戸<sup>(3)</sup>の底部卸目皿である。8～10の国産陶磁器は概ね16世紀以降の時期が考えられる<sup>(3)</sup>。



第31図 SD1001・1002土層断面図



第32図 SD1001出土遺物実測図 1

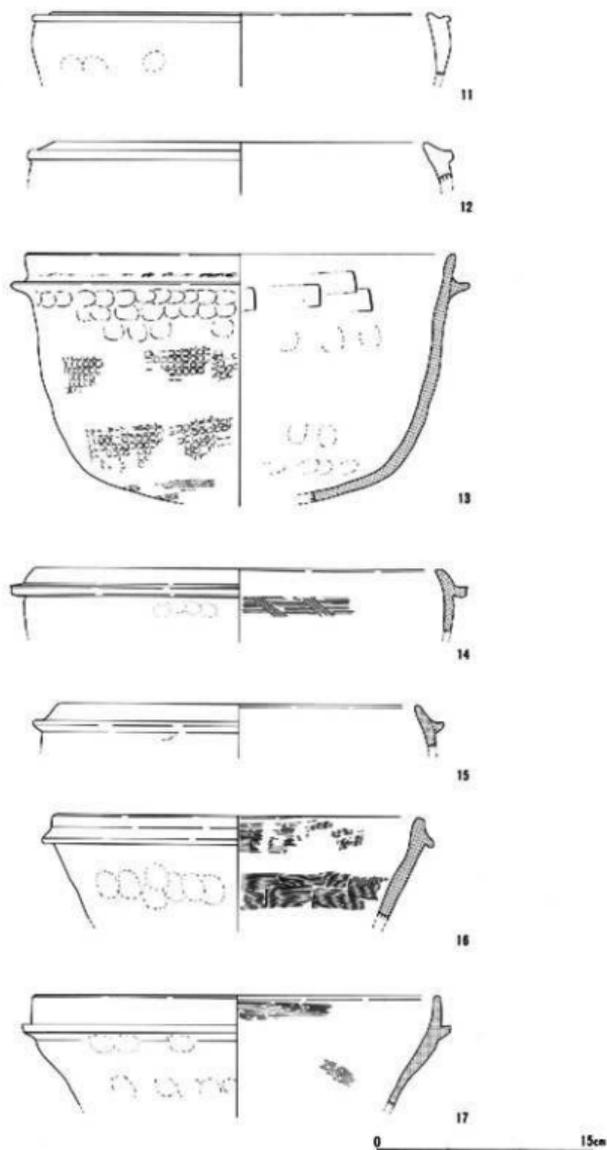
11～20は煮沸具である。11・12は土師質土器釜である。小片であるため詳細な時期決定は困難であるが、概ね14世紀前半頃と思われる。13～17は瓦質土器釜である。18～20は土師質土器鍋である。時期的には概ね13世紀後半頃に属するものと思われる。

21～26は調理具、27・28は貯蔵具である。21は瓦質土器こね鉢である。22は瓦質土器摺り鉢で、内底面に菊花文のスタンプが施される。23・24は東播磨片口鉢で東播系中世須恵器第Ⅲ期第1段階<sup>40</sup>、13世紀前半～後半の頃に属するものと思われる。25は備前こね鉢、26は備前摺り鉢である。27・28は須恵質の甕である。27は龜山系の甕である。12世紀末葉～13世紀初頭にかけての年代が与えられる。

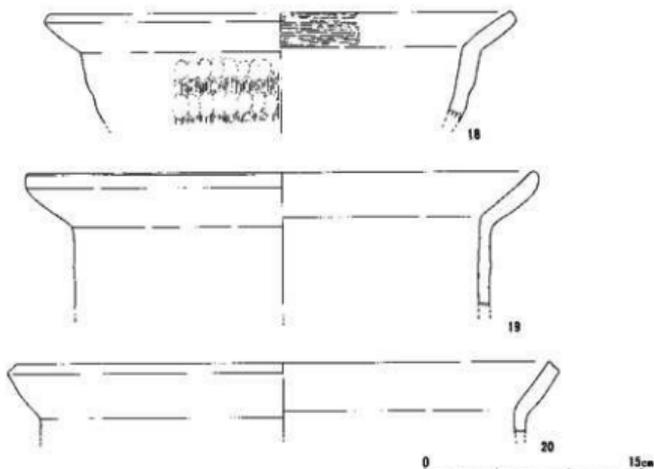
その他、29は土師質の製塩土器、30は土師質の竈の一部である。

## 溝2 (SD1002)

掘割的な機能を持つものと推定される素掘りの溝である。溝1と平行して南北に延びる溝を検出した。規模は溝1に比べ小さく、幅が肩口で約1.1m・底面で約0.5m・深さ約0.6m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。溝1と同様、幾度かの補修改築をうけているよう



第33图 S D1001出土遺物実測图 2



第34図 S D 1001出土遺物実測図 3

である(第31図)。

#### 溝2出土の遺物(第36図)

溝2からは土師器杯・皿・須恵器等が出土しており、構築時期は溝1よりやや古く、12世紀末葉～13世紀前半(平安時代末～鎌倉時代前半)まで存続していたものと推定される。

31～35は供膳具、36～43は煮沸具である。

31～34は土師器碗である。器体の内外面には赤色顔料が塗布されている。

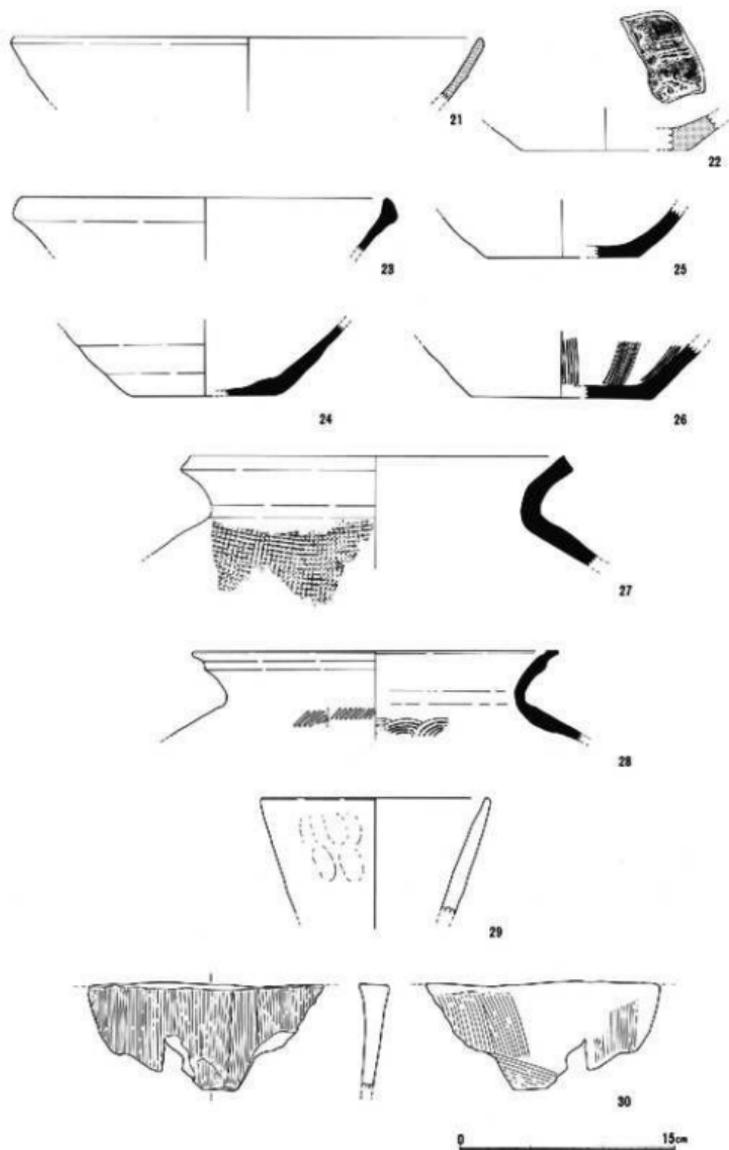
35は瓦器碗である。体部外面全体に平行ヘラミガキが施されており、高台もしっかりした作りである。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ・1期、12世紀前半～末葉頃のものと思われる。

36は土師質土器鍋である。37・38は土師質土器釜で37は体部、38は脚部である。39は土師質土器鍋取手である。

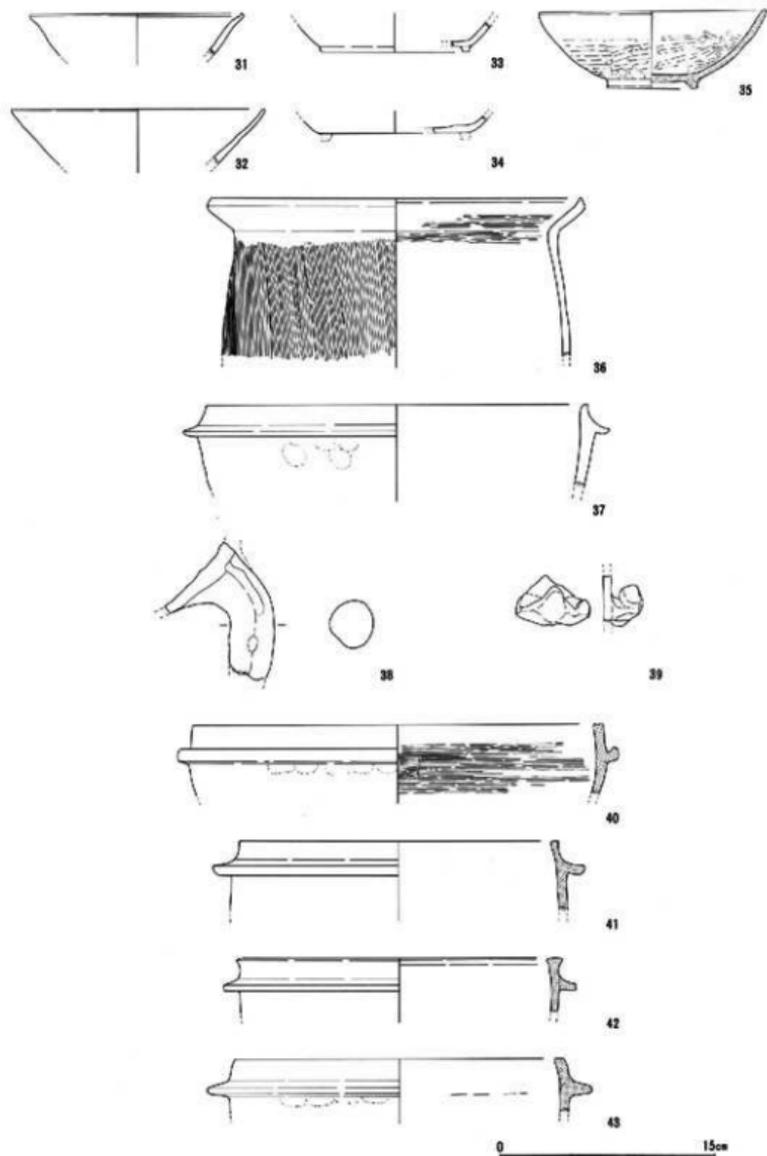
40～43は瓦質土器釜である。いずれも口縁部が直立するタイプである。43は体部上端を外方に折り返して鈎を作出し、口縁部を貼り付けている。

#### 積石土墳墓1(S T 1001)

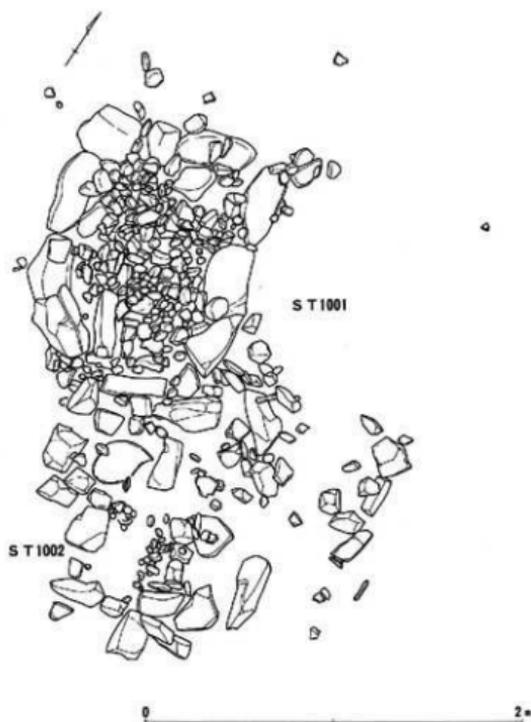
U-5グリッド、調査区北側のほぼ中央部で検出された方形の石組の土墳墓である(第37・38図)。上部構造は不明であるが、人形の河原石を長方形に組み、その上に拳大の小碟で



第35图 S D1001出土遺物実測图 4



第36图 S D 1002出土遺物実測図

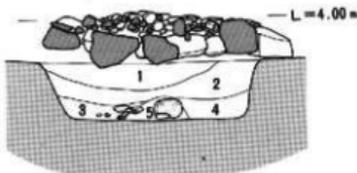
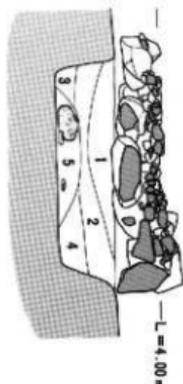


第37図 ST 1001・1002積石検出状況実測図

覆っている。これらの小礫の集石は墓地形成途上に敷かれたものであろう。下部構造は素掘りで、遺構内埋土は5層に分層される。土壌の規模は長軸1.8m、短軸1.2m、0.32mで、楕円形状を呈する。主軸方向は北西方向である。

被葬者の埋葬形態は北頭位横臥屈葬であると思われるが、人骨の腐食が著しく特定は困難である。遺体は木棺に納められていた可能性があるが、それこそを裏付ける資料は検出されなかった。埋葬時期の特定は困難であるが、副葬品および土壌墓周辺の状況から13世紀前半と思われる。

積石土壌墓1からは屈葬人骨（頭蓋骨その他）と副葬品と思われる土師質土器の小皿が3点出土している。

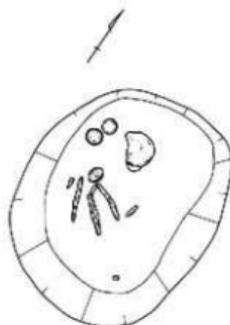


- 1 褐色10Y R4/4砂質土(マンガン粒、炭化物を若干含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R4/3砂質土(炭化物を若干含む)
- 3 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 4 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 5 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土

礫石基検出状況



礫石確除去後



石確除去後

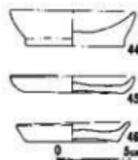


第38図 S T 1001実測図

### 出土遺物 (第39~41図)

副葬品として床面より土師質土器の小皿(44~46)が3点出土している(第39図)。いずれも頭部付近に置かれていた。粗雑な作りで、体部は短く外方に延びる。内面は緩やかな段を有する。

また表面の隅中からも土師質・瓦質土器等が出土している(第40・41図)。47~49は土師質土器の杯、50は皿、51・52は小皿である。53~61は和泉型瓦器碗および小皿である。小片であるため明確な時期決定は困難であるが、概ね尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1~2期、12世紀後半~13世紀初頭頃に属するものと思われる。61の小皿は底部回転糸切りである。



第39図 ST1001出土遺物実測図

62~69は瓦質土器釜・脚部である。口縁部が内傾するもの(62~65)と直立するもの(66・67)とがある。62に体部上端を外方に折り返して鈎と体部を一体成形したのち、粘土帯を貼り付け口縁を作出している。

70は瓦質土器甕、71・72は東播系甕、73・74は東播系片口鉢である。概ね東播系中世須恵器Ⅲ系第1段階、13世紀前半~後半頃のものと思われる。

### 積石土墳墓 (ST1002)

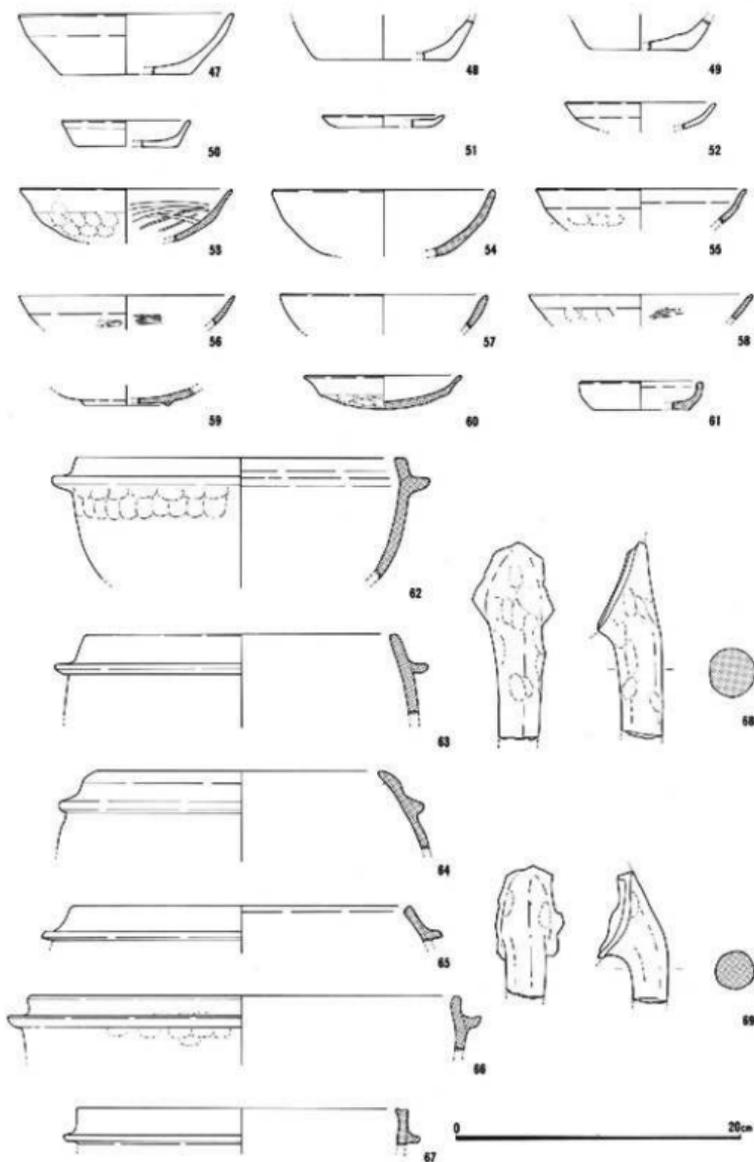
U-5グリッド、調査区北側のほぼ中央部で検出された積石土墳墓である(第37・42図)。ST1001の南側に隣接して造築している。築造時期はST1001とほぼ同時期であると思われる。石組は長方形に組まれていたものと思われるが崩壊が著しく一部が残存するのみである。土壌は楕円形の平面プランを呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.2mである。遺構内埋土は2層に分層される。上面からは土師質土器の杯・馬具(ハミ)・人骨と思われる骨片等が出土している。

### 出土遺物 (第43図)

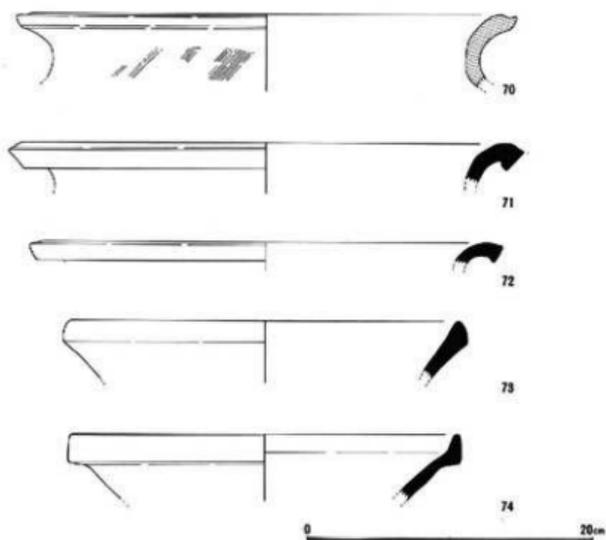
遺構内埋土中より供献に使用されたと思われる土師質土器の杯・鉄製馬具(ハミ)等が出土している。ハミは腐食が著しく、凶化はできなかった。75は底部回転糸切りの土師質土器の杯である。器体の内外面はヨコナデで仕上げている。76は土師質土器の脚部である。

### 土墳墓3 (ST1003)

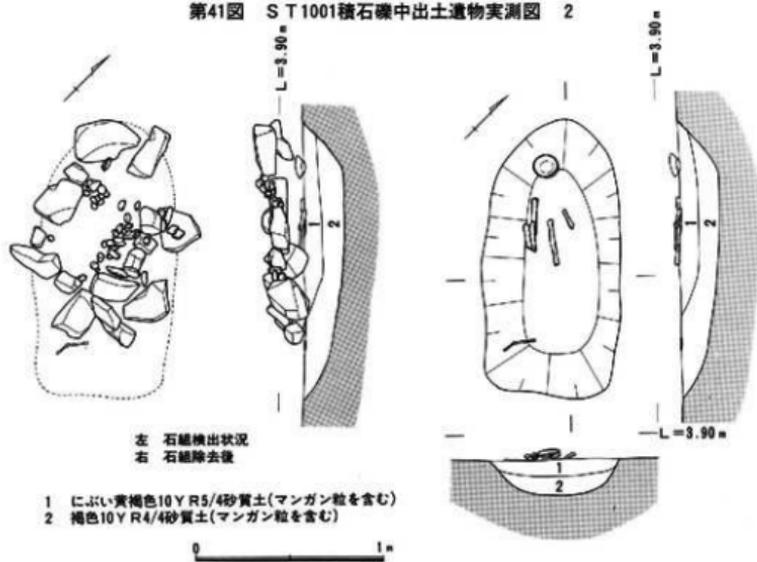
P-7、8グリッド、調査区西側で検出された来掘りの土墳墓である(第44図)。石囲い等の外部表象は見られなかった。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.3mである。遺構内埋土は2層に分層される。埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬であり、



第40図 S T 1001積石磯中出土遺物実測図 1



第41図 S T 1001積石塚中出土遺物実測図 2



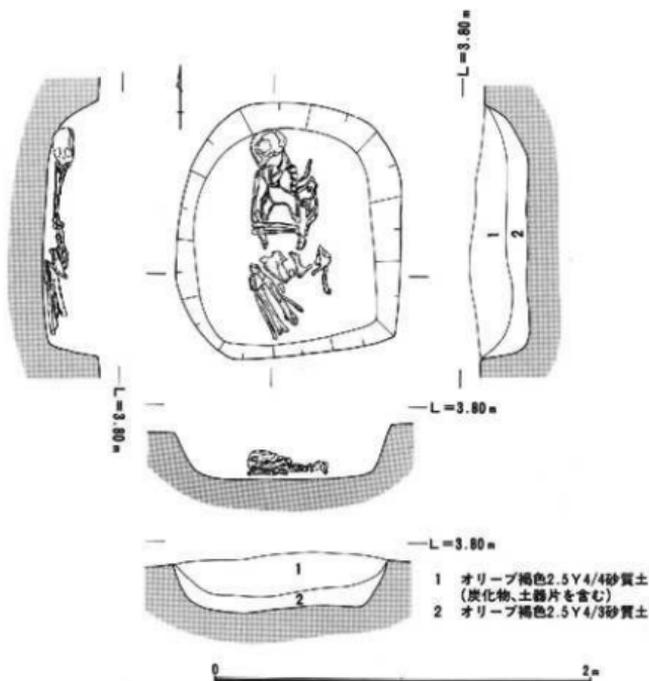
第42図 S T 1002実測図

被葬者の胸部には鉄製の刀子が副葬されていた。北野天神絵巻などにみられる葬列には、棺の脇に薙刀を持った人が添っている情景が描かれたものがあることから判断して、これは刃物の呪力によって悪霊がとりつくのを防ぐまじないとして添えられたものであろう。遺骸は木棺に納められていた可能



第43図 ST 1002出土遺物実測図

性があるが、その痕跡を確認することはできなかった。埋葬時期は、埋土中より出土した瓦器碗等から12世紀末葉～13世紀初頭にかけての年代が考えられる。

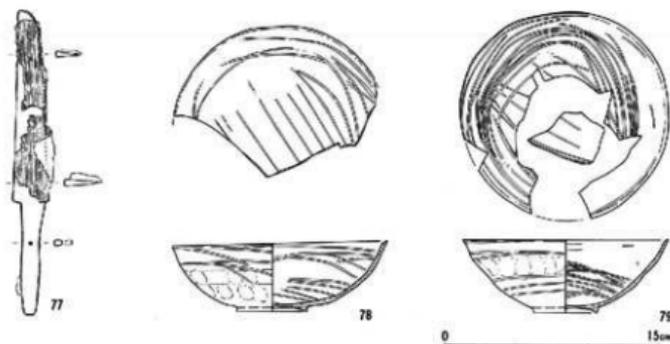


第44図 ST 1003実測図

出土遺物 (第45図)

77は被葬者の胸部に副葬されていた鉄製の刀子である。木質が部分的に残存している。

その他には、遺構内埋土中より瓦器碗（78・79）が2点出土している。共に薄手であり、体部は内彎して外上方に延びる。体部外面にもヘラミガキがみられ、時期的には尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期～Ⅲ-1期に属するものと思われ、12世紀後半～13世紀初頭の年代が与えられる。



第45図 ST1003出土遺物実測図

#### 土墳墓4（ST1004）

0-5、6グリッド、調査区西端で検出された土墳墓である（第46図）。外部表象は見られなかった。下部構造は素掘りで、遺構内埋土は2層に分層される。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.1mである。埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬である。ST1002と同様、木棺に納められていた可能性があるが、その痕跡を確認することはできなかった。埋葬時期はST1003と同時期と思われる。

#### 出土遺物（第47図）

遺構内埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片であるため実測可能なものは瓦器碗（80）1点のみである。底部付近は外方に張り出し気味である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1器に属し、時期的には12世紀末葉～13世紀初頭頃のものと思われる。

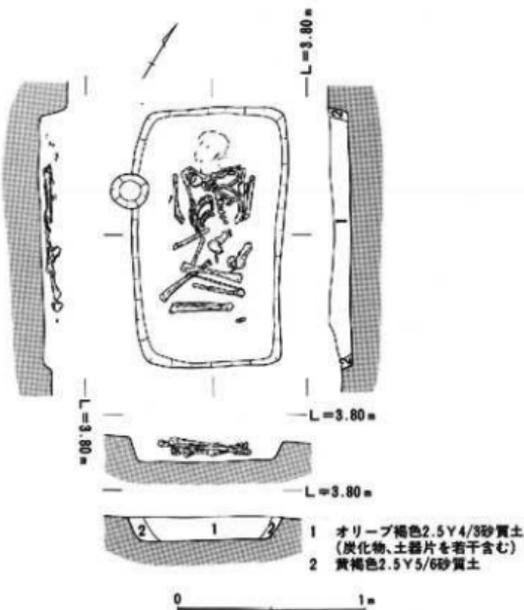
#### 独立柱建物（SA1001）

M、N-14～16グリッド、調査区中央部において検出された梁間3間×桁行4間（6.6m×11m）で東側に庇をもつ独立柱建物である（第48図）。柱穴はやや大形の隅丸方形を呈す

るもので平均幅0.56mを測り、柱間は梁間、桁行ともに平均長2.2mを測る。この掘立柱建物には棟持ち柱が認められている。棟方向はN-18°-Wである。主軸は真北より約18°西偏している。時期的には周辺の状況から12世紀後半～13世紀前半頃と思われる

#### SA1001出土の遺物

ピット内の埋土中からは土師質土器片、瓦器片等が出土しているが、いずれも小片であり実測可能なものはなかった。



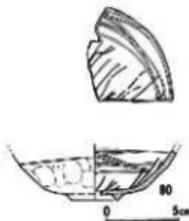
第46図 ST1004実測図

#### 竪穴状遺構

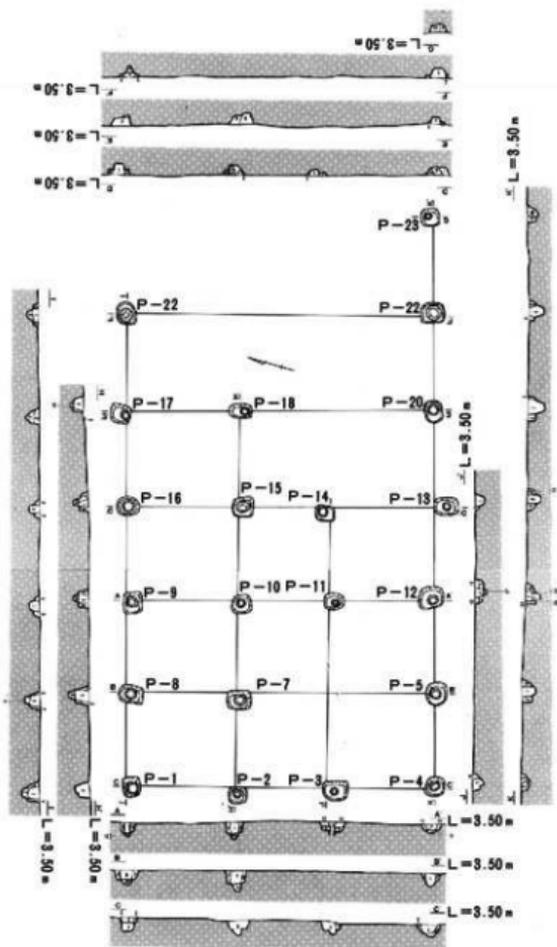
調査区中央部西側において2基の竪穴状遺構を検出した。出土遺物等から13世紀代の時期であると思われる。

#### 竪穴状遺構1 (SB1001)

H, I-11, 12グリッド、調査区中央部南側で検出された遺構である(第49図)。規模は長軸5.9m、短軸3.8m、深さ0.39mであり、平面プランは隅丸形状を呈する。遺構内埋土は5層であり、埋土は炭化物及び焼土等を多量に含む。10数基の柱穴と思われるピットが確認されており、簡略な構築物(作業小屋等)が想定される。



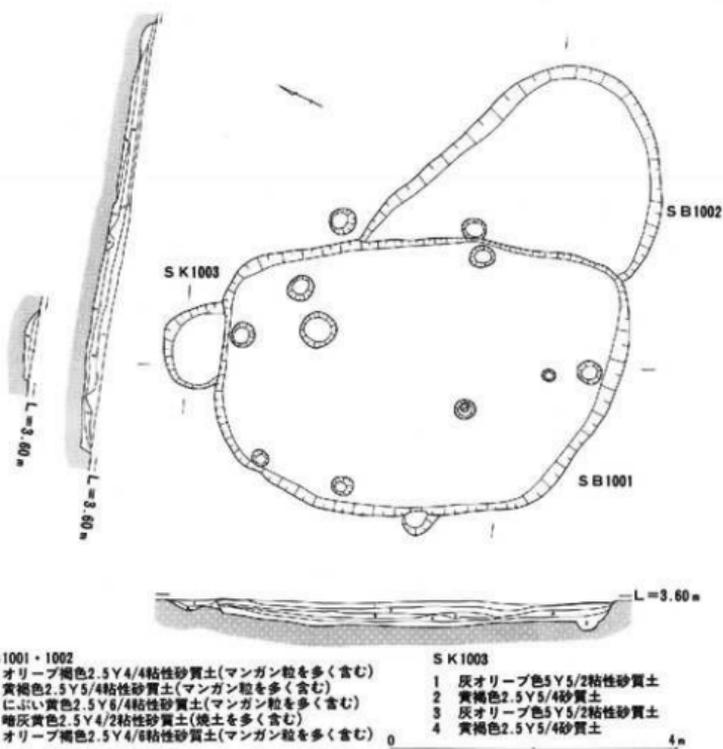
第47図 ST1004出土遺物実測図



- |  |  |
|--|--|
| <p>1 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>2 比ふい突鋭形2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>3 比ふい突鋭形2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む)</p> <p>4 比ふい突鋭形2.5V5.4種研削玉(マンガン酸を含む)</p> <p>5 比ふい突鋭形2.5V5.4種研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>6 比ふい突鋭形2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>7 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>8 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>9 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(結核中あり)</p> <p>10 真鍮製2.5V5.4種研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> | <p>11 オリーブ鋼製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>12 深溝溝2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>13 比ふい突鋭形2.5V5.4種研削玉(マンガン酸を含む)</p> <p>14 比ふい突鋭形2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む)</p> <p>15 比ふい突鋭形2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>16 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>17 オリーブ鋼製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>18 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む)</p> <p>19 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> <p>20 真鍮製2.5V5.4種特殊研削玉(マンガン酸を含む、結核中あり)</p> |
|--|--|



第48図 SA1001実測図



第49図 SB1001・1002実測図

#### 出土遺物 (第50図)

土師質土器・瓦器等が出土しているが、小片であるため実測可能なものは5点である。81～84は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1類に属するものと思われる。时期的には12世紀末葉～13世紀前半の頃と考えられる。84は土師質土器の杯である。85は土師質土器釜である。口縁部下方に短い鈎が付く。詳細な時期決定は困難であるが、概ね13世紀前半～後半頃のものと思われる。

#### 竪穴状遺構 2 (SB1002)

H-12, 13グリッド、調査区中央部南側で検出された遺構である (第49図)。一部竪穴状遺構1に切られているため、全体の規模は不明である。竪穴状遺構1と同様簡略な構築物と思われる。遺構内埋土は4層に分層される。



第50図 S B 1001出土遺物実測図



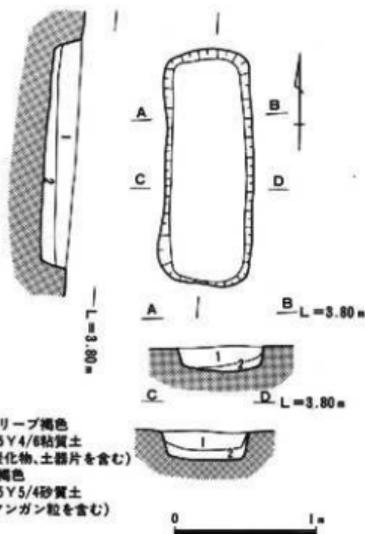
第51図 S B 1002出土遺物実測図

#### 出土遺物（第51図）

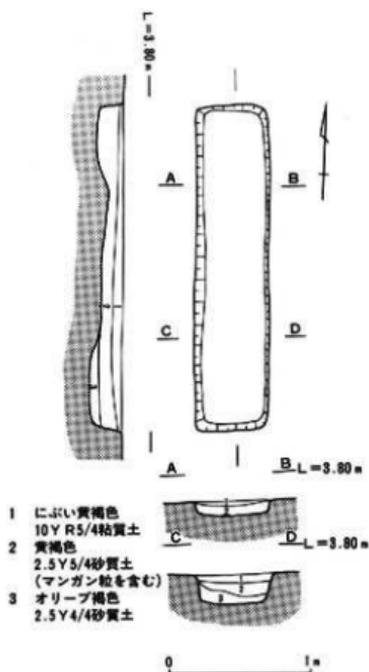
土師質土器、瓦器等が出土しているが、いずれも小片であるため図化し得るものは少ない。86は土師質土器の杯である。厚手であり、口縁端部は尖る。87は東播系の片口鉢である。时期的には東播系中世須恵器第Ⅲ器第1段階、13世紀前半のものと思われる。

#### 土坑

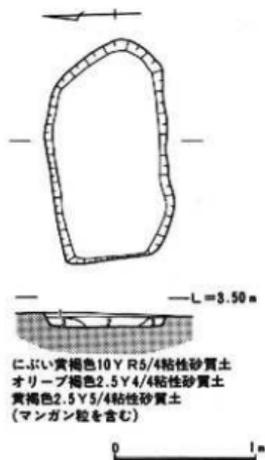
65基ある土坑のうち、長方形もしくは長楕円形の平面プランを呈し、長軸が南北方向を示すものは土壌墓の可能性はあるが、上部表象、人骨および墓前祭祀など墓であることを想定させる遺物は検出されていない。これらの土坑は出土遺物等から、概ね12世紀後半～13世紀前半の時期に属するものと考



第52図 S K 1001実測図



第53図 SK1002実測図



第54図 SK1005実測図



第55図 SK1005出土物実測図

えられる。

#### 土坑1 (SK1001)

J-10グリッド、調査区中央部西側で検出された土坑である(第52図)。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸1.63m、短軸0.54m、深さ0.2mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北方向である。

#### 出土遺物

土師質土器片・瓦器片・青磁片等が埋土中より出土したが、小片であるため実測可能遺物はなかった。

#### 土坑 2 (SK1002)

K、J-10グリッド、調査区中央部西側で検出されたSK1001西側に位置する長方形の土坑である(第53図)。長軸方向は南北である。遺構内埋土は3層に分層される。規模は長軸2.1m、短軸0.5m、深さ0.2mである。

#### 出土遺物

SK1001と同様、土師質土器片・瓦器片・青磁片等が埋土中より出土したが、小片であるため図化できなかった。

#### 土坑 5 (SK1005)

D-13グリッド、調査区中央部で検出された楕円形状の平面プランを呈する土坑である(第54図)。長軸1.52m、短軸0.82m、深さ0.1mである。長軸方向は東西方向である。遺構内埋土は3層に分層される。土師質土器片・瓦器片等が出土したが、いずれも小片であるため実測可能遺物は1点のみである。

#### 出土遺物 (第55図)

88は瓦器碗の底部である。内底面に格子目の平行ヘラミガキが施されている。小片のため詳細な時期の特定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期～Ⅲ-1期、12世紀後半～13世紀初頭に属すると思われる。

#### 土坑 7 (SK1007)

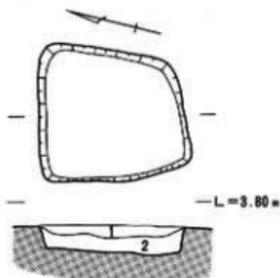
S-3、4グリッド、調査区北部西端で確認された土坑である(第56図)。平面プランは方形を呈し、遺構内埋土は2層に分層される。規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.2mである。長軸方向は南北である。

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、図化し得る遺物はなかった。

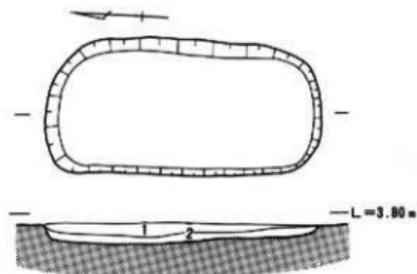
#### 土坑 8 (SK1008)

S-2、3グリッド、調査区北部西端で検出された土坑である(第57図)。平面形は長楕円形状を呈し、遺構内埋土は2層に分層される。長軸は南北方向を示す。規模は長軸1.9m、短軸1.0m、深さ0.14mである。形状から上墳墓の可能性が考えられる。



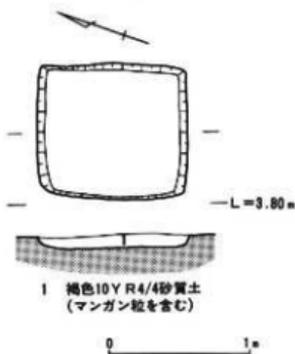
- 1 にじい黄褐色10Y R5/4砂質土  
(炭化物、土器片を含む)
- 2 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物を含む)

第56図 SK 1007実測図



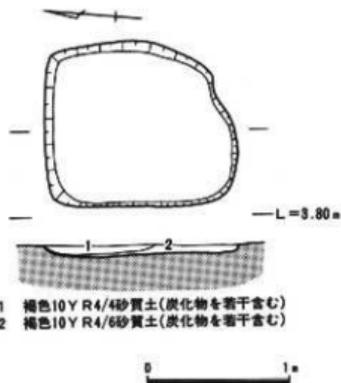
- 1 にじい黄褐色10Y R5/4砂質土  
(炭化物を若干含む、土器片を含む、粘性ややあり)
- 2 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物を含む、粘性ややあり)

第57図 SK 1008実測図



- 1 褐色10Y R4/4砂質土  
(マンガン粒を含む)

第58図 SK 1009実測図



- 1 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物を若干含む)
- 2 褐色10Y R4/6砂質土(炭化物を若干含む)

第59図 SK 1010実測図

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、図化し得る遺物はなかった。

### 土坑9 (SK1009)

S, T-3 グリッド、調査区北部西側で検出されたほぼ方形を呈する土坑である(第58図)。遺構内埋土は1層である。規模は長軸・短軸共に1.0m、深さ0.1mである。

### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、図化し得る遺物はなかった。

### 土坑10 (SK1010)

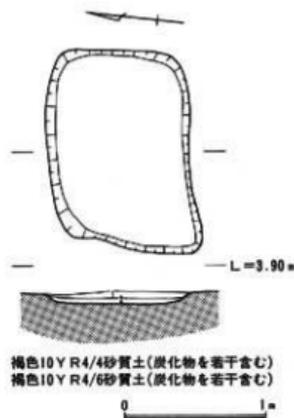
T-3 グリッド、調査区北部西側で検出された方形を呈する土坑である(第59図)。遺構内埋土は1層である。規模は長軸1.3m、短軸1.15m、深さ0.1mである。

### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、図化し得る遺物はなかった。

### 土坑11 (SK1011)

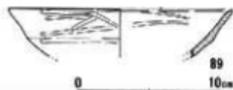
T-3 グリッド、調査区北部西側で検出された長方形の土坑である(第60図)。遺構内埋土は2層に分層される。規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.08mであり、長軸は東西方向を示す。



第60図 SK1011実測図

### 出土遺物 (第61図)

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、実測可能遺物は1点のみである。89は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属し、時期は13世紀前半頃と思われる。



第61図 SK1011出土遺物実測図

### 土坑12 (SK1012)

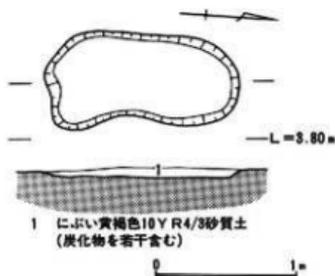
T-3 グリッド、調査区北部西側で検出された楕円形状の平面プランを呈する土坑である(第62図)。内埋土は1層である。規模は長軸1.4m、短軸0.6m、深さ0.1mである。

### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、図形し得る遺物はなかった。

### 土坑13 (SK1013)

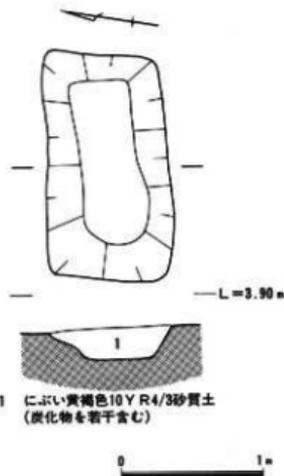
T-3グリッド、調査区北部西側で検出された土坑である(第63図)。平面プランは長方形を呈し、遺構内埋土は1層である。規模は長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.22mである。長軸方向は東西方向である。



第62図 SK1012実測図

### 出土遺物 (第64図)

埋土中より土師質土器片・瓦器片の小片が数点出土したが、実測可能遺物は1点のみである。90は瓦器碗である。土器表面の摩滅が著しく詳細な時期決定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属すものと思われる。概ね時期は13世紀前半頃と考えられる。



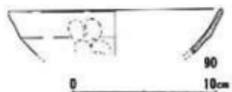
第63図 SK1013実測図

### 土坑14 (SK1014)

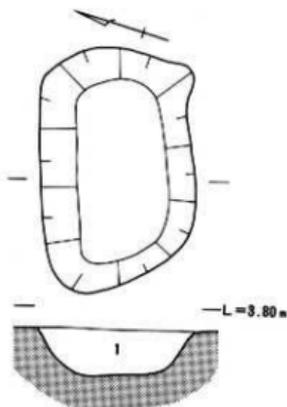
T-3グリッド、調査区北部西側で検出された土坑である(第65図)。平面プランは楕円形を呈し、遺構内埋土は1層である。規模は長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.32mである。長軸方向は東西方向である。

### 出土遺物 (第66図)

遺構内埋土中より土師質土器片、瓦器片等が出土しているが、いずれも小片であるため図化して得る遺物は瓦器小皿1点である。91は和泉型の瓦

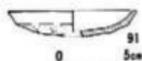


第64図 SK1013出土遺物実測図

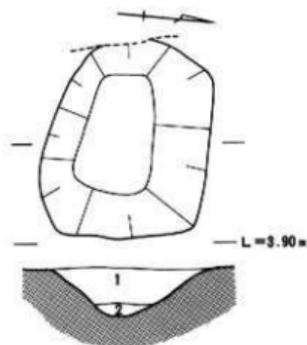


1 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物、土器片を含む)

第65図 SK1014実測図

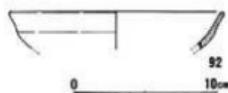


第66図 SK1014出土遺物実測図



1 濃い褐色10Y R5/3砂質土(炭化物、土器片を含む)  
2 褐色10Y R4/4砂質土(炭化物を含む)

第67図 SK1015実測図



第68図 SK1015出土遺物実測図

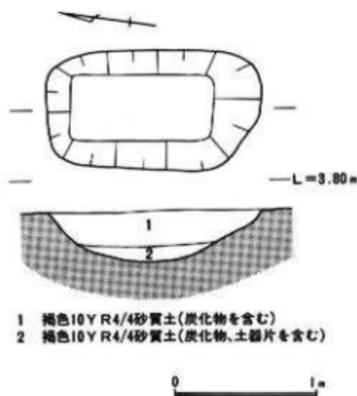
器小皿である。

#### 土坑15 (SK1015)

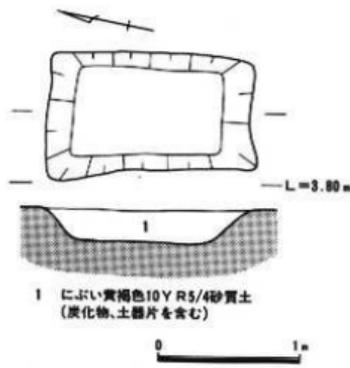
T-2 グリッド、調査区北部西側で検出された土坑である (第67図)。平面プランは楕円形状を呈し、遺構内埋土は2層に分層される。規模は長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.34mである。長軸方向は東西方向である。

#### 出土遺物 (第68図)

遺構内埋土中より土師質土器片、瓦器片等が出土しているが、いずれも小片であるため図化し得る遺物は少ない。92は瓦器碗である。土器表面の摩滅が著しく詳細な時期決定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属するものと思われる。概ね時期は13世紀前



第69図 SK1016実測図



第71図 SK1017実測図



第70図 SK1016出土遺物実測図



第72図 SK1017出土遺物実測図

半頃と考えられる。

#### 土坑16 (SK1016)

U-2グリッド、調査区北部西側で検出された楕円形状を呈する土坑である(第69図)。遺構内埋土は2層に分類される。規模は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.36mである。長軸は南北方向である。土坑の形状からSK1008と同様、土壌墓の可能性はある。

#### 出土遺物(第70図)

遺構内埋土中より土師質土器片、瓦器片等が出土しているが、いずれも小片であるため図化し得る遺物は瓦器碗1点のみである。93は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属するものと思われる。縄文時期は13世紀前半頃と考えられる。

#### 土坑17 (SK1017)

U-3グリッド、調査区北部西側で検出された土坑で、平面プランは長方形形状を呈する(第

71図)。遺構内埋土は1層である。規模は長軸1.4m、短軸0.8m、深さ0.2mである。長軸は南北方向である。土坑の形状からSK1008と同様、土墳墓の可能性がある。

#### 出土遺物 (第72図)

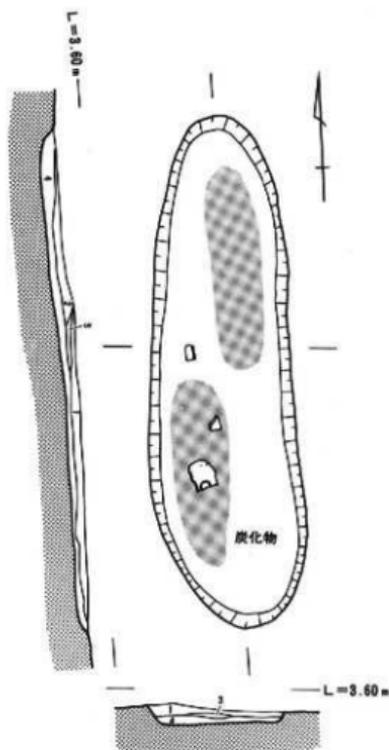
遺構内埋土中より土師質土器片、瓦器片等が出土しているが、いずれも小片であるため図化し得る遺物は1点のみである。94は瓦器碗の底部である。小片であるため明確な時期決定は困難であるが、13世紀初頃頃と考えられる。

#### 土坑19 (SK1019)

T-7グリッド、調査区北部の中央付近で検出された土坑である(第73図)。平面プランは長楕円形を呈し、長軸2.82m、短軸0.8m、深さ0.1mである。遺構内埋土は4層に分層され、部分的に炭化物が集中している。土坑内床面より瓦器碗等が出土している。

#### 出土遺物 (第74図)

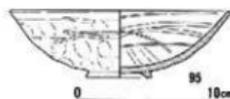
出土遺物はいずれも小片であるため、図化し得るものは1点である。95は尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1



- 1 濃い黄褐色10Y R5/3粘性砂質土(炭化物を多量に含む、土器片を若干含む、粘性ややあり)
- 2 褐色10Y R4/4粘性砂質土(炭化物、土器片を多量に含む、粘性ややあり)
- 3 濃い黄褐色10Y R5/4粘性砂質土(炭化物を多量に含む、粘性ややあり)
- 4 褐色10Y R4/4粘性砂質土(マンガンを若干、炭化物を多量に含む、粘性ややあり)



第73図 SK1019実測図

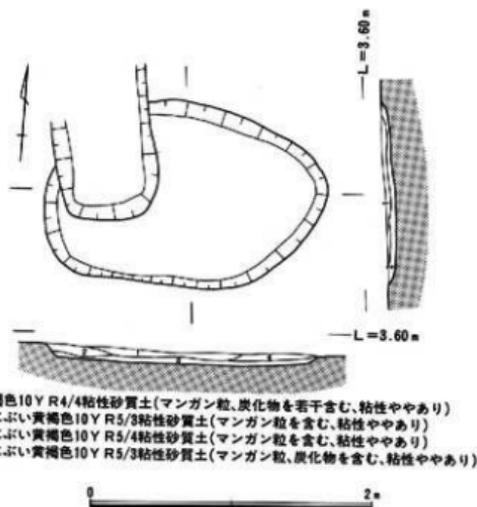


第74図 SK1019出土遺物実測図

期の瓦器碗である。時期は12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

#### 土坑20 (SK1020)

U-8グリッド、調査区北部の中央で検出された土坑である(第75図)。一部SK1040に切られていく。平面プランは長楕円形を呈し、長軸1.92m、短軸1.22m、深さ0.1mである。遺構内埋土は4層に分層される。



第75図 SK1020実測図

#### 出土遺物

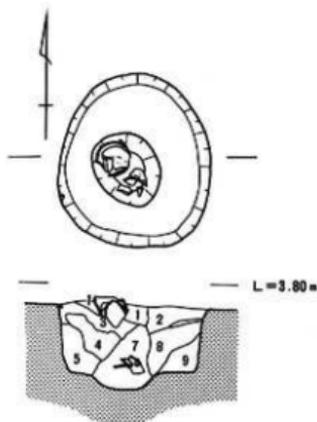
出土遺物はいずれも小片であるため、図化し得るものはなかった。

#### 土坑21 (SK1021)

T-8グリッド、調査区北部中央で確認された土坑である(第76図)。長軸0.92m、短軸0.79m、深さ0.46mを測り、平面プランは楕円形を呈する。遺構内埋土は5層に分層され、土坑の底部には炭化物・焼土が堆積していた。また埋土中より、ほぼ完形の瓦質土器の三足羽釜が出土していることなどから、調理などの作業に伴う「釜屋」的機能を持つ土坑と想定される。この土坑の時期は出土遺物等から12世紀末葉～13世紀初頭の年代が与えられよう。

#### 出土遺物 (第77図)

96は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀前半頃のものと思われる。97・98は瓦質土器の釜である。97は三足の脚をもつ釜である。口縁部は内傾し、短い鈎が付く。98は釜の口縁部である。99は土師質土器鍋である。口縁部「て」の字状に外反する。



- 1 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(炭化物、土器片を含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(炭化物を含む)
- 3 オリーブ褐色2.5Y 4/4砂質土(炭化物を含む)
- 4 オリーブ褐色2.5Y 4/4砂質土(炭化物、土器片を多量に含む)
- 5 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土
- 6 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(炭化物、土器片を含む)
- 7 オリーブ褐色2.5Y 4/4砂質土(炭化物、土器片を多量に含む)
- 8 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土(炭化物を若干含む)
- 9 にぶい黄褐色10Y R5/4砂質土



第76図 SK1021実測図

#### 出土遺物 (第80図)

土師質土器、瓦器碗等が出土している。100・101は瓦器碗である。時期は尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、13世紀初頭頃のものと思われる。102は土師質土器鍋の口縁部である。小片であるため時期の特定は困難である。

#### 土坑24 (SK1024)

U-9グリッド、調査区北部の中央付近で検出された土坑である(第81図)。平面プランは長楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.65m、深さ0.1mである。遺構内埋土は2層に分層される。黒色土器B類碗<sup>19)</sup>が出土している。

#### 土坑22 (SK1022)

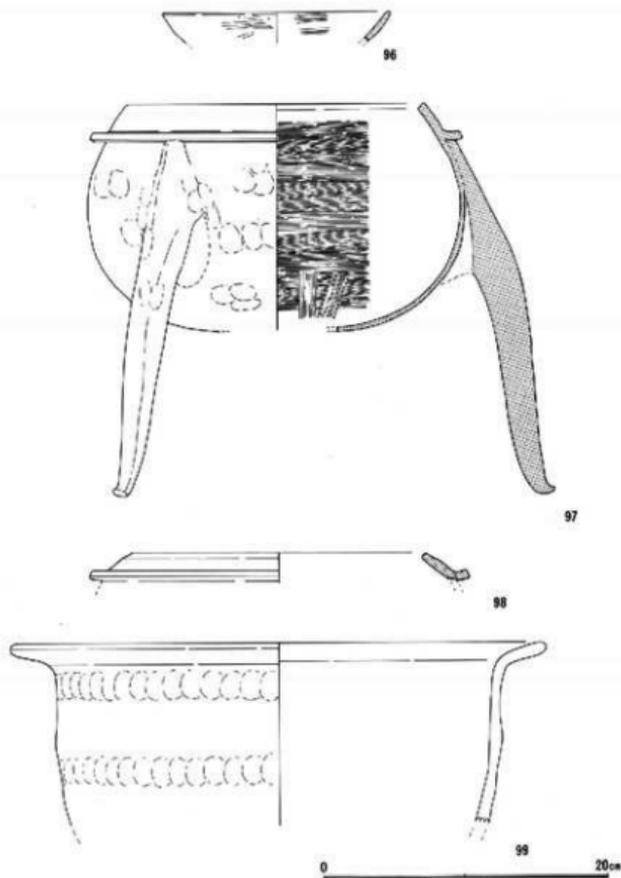
S-9グリッド、調査区北部中央で検出された。楕円形の土坑である(第78図)。長軸1.05m、短軸0.69m、深さ0.14mである。遺構内埋土は5層に分層される。埋土中より、土師質土器・瓦器片等が出土したが、小片のため時期の特定は困難である。

#### 出土遺物

出土遺物はいずれも小片であるため、図化し得るものはなかった。

#### 土坑23 (SK1023)

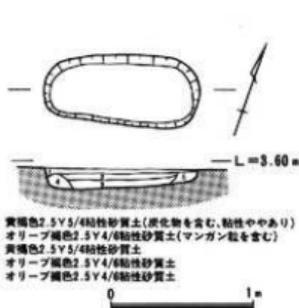
T-8、9グリッド、調査区北部中央で検出された土坑である(第79図)。平面プランは楕円形を呈し、掘立柱建物の柱穴の一つと思われる。規模は長軸0.6m、短軸0.32m、深さ0.44mである。遺構内埋土は6層に分層され、埋土中より、獣骨らしき骨片、土師質土器片、瓦器片が出土している。



第77図 SK1021出土遺物実測図

出土遺物（第82図）

黒色土器B類柄（103）が出土している。内外面とも強い回転力を利用したと思われる同心円状の緻密なヘラミガキが施されている。畿内産の黒色土器を模倣して在地生産されたものと考えられる。時期は12世紀後半頃と思われる。



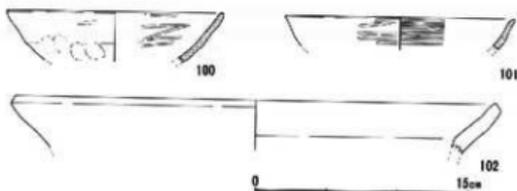
1. 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土(炭化物を含む、粘性ややあり)
2. オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土(マンガン粒を含む)
3. 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土
4. オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土
5. オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土

第78図 SK 1022実測図



- 1 オリーブ黄色5Y6/2粘質土(土器片を含む)
- 2 灰オリーブ色5Y6/2粘質土(炭化物を若干含む)
- 3 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土(骨、土器片を含む)
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土(マンガン粒、炭化物を若干含む)
- 5 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土
- 6 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土(マンガン粒、炭化物を若干含む)

第79図 SK 1023実測図



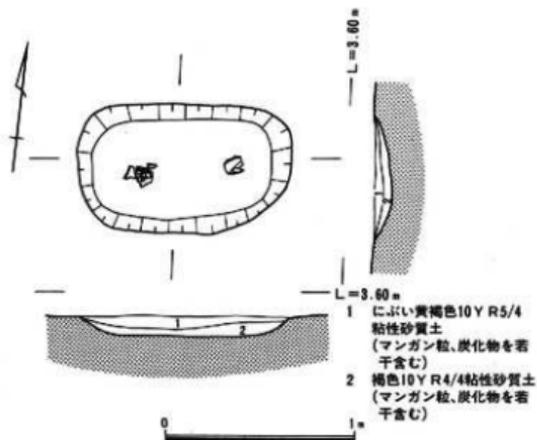
第80図 SK 1023出土遺物実測図

#### 土坑26 (SK 1026)

W-9グリッド、調査区北部中央で検出された土坑である(第83図)。東側が溝2に切られており全容は不明である。平面プランは長楕円形を呈し、現存部分で長軸1.5m、短軸0.85m、深さ0.22mを測る。遺構内埋土は2層に分層される。埋土中よりほぼ完形の黒色土器B類椀が出土している。

#### 出土遺物(第84図)

和泉型黒色土器B類椀(104)が出土している。内外面とも分割の平行ヘラミガキが施されている。時期は12世紀末葉の年代が考えられる。その他、包含層からの混入と思われる備前IV期<sup>印</sup>(15世紀代)の備前摺り鉢(105)が出土している。



第81図 SK 1024実測図

土坑27 (SK 1027)

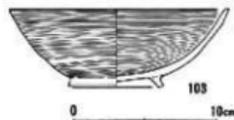
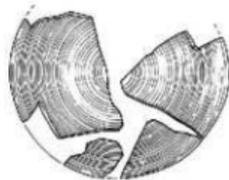
U-9グリッド、調査区北部中央付近で検出された土坑である(第85図)。平面プランは長楕円形を呈し、長軸1.74m、短軸0.4m、深さ0.14mを測る。遺構内埋土は3層に分層され、土坑内埋土中より黒色土器B類碗・土師質土器片・瓦器片等の小片が出土している。

出土遺物

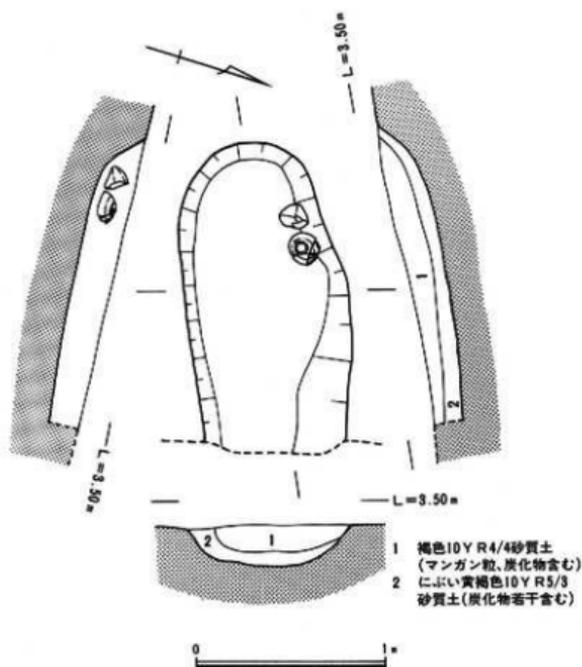
いずれも小片であるため、図化し得る遺物はなかった。

土坑29 (SK 1029)

S-7, 8グリッド、調査区北部中央付近で検出された長方形の土坑である(第86図)。一部調査区外に延びており、全体の形状は不明であるが、現存部分で長軸5.4m、短軸1.2m、深さ0.16mである。遺構内埋土は5層に分層される。埋土中より黒色土器片が出土している。



第82図 SK 1024出土遺物実測図



第83図 SK 1026実測図

#### 出土遺物 (第87図)

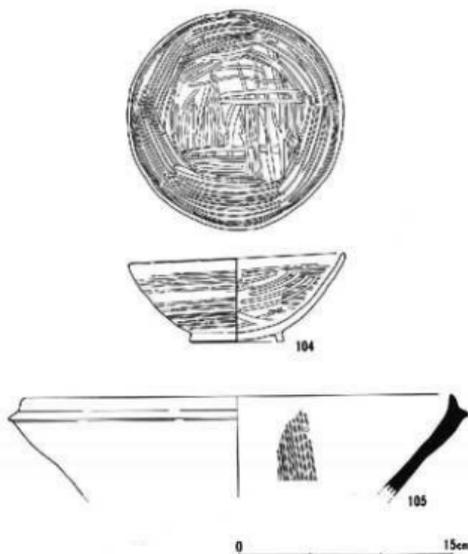
黒色土器B類碗の底部が出土している(106)。小片のため時期の特定は困難であるが、概ね12世紀末葉頃のものと思われる。

#### 土坑31 (SK 1031)

S-9グリッド、調査区北部で検出された土坑である(第88図)一部調査区外に延びているため全容は不明であるが、現存部分で長軸4.06m、短軸1.08m、深さ0.17mである。遺構内埋土は3層に分層される。

#### 出土遺物

いずれも小片であるため、図化し得る遺物はなかった。



第84図 SK 1026出土遺物実測図

#### 土坑32 (SK 1032)

S-8グリッド、調査区北部中央で検出された長方形の土坑である(第89図)。一部調査区外に延びており、全体の形状は不明であるが、現存部分で長軸1.4m、短軸0.52m、深さ0.22mである。長軸は南北方向を指す。遺構内埋土は3層に分層される。埋土中より輸入白磁・青磁片が出土している。

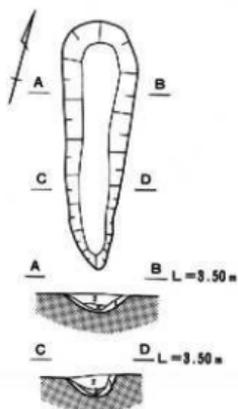
#### 出土遺物 (第90図)

図化し得たのは1点のみである。107は白磁碗の口縁部が出土している。玉縁口縁を呈し、体部には軸の垂下がみられる。横田・森田編東の白磁碗IV-1類に属するものである。時期は12世紀前半頃と思われる。

#### 土坑33 (SK 1033)

T-8グリッド、調査区北部中央部付近で検出された円形状の土坑である(第91図)。長

軸0.86m、短軸0.8m、深さ0.1mである。遺構内埋土は1層であるが、床面近くには焼土の堆積がみられる。また遺構内には直径15cm前後の礫があり、礫の中には被熱により赤化したものや、スガが付着しているものがあること、遺構内埋土より土師質土釜の脚部が出土していること等から「かまど」的機能を有していたものと考えられる。



- 1 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土  
(マンガング粒と炭化物を若干含む)
- 2 濃い黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガング粒を含む)
- 3 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガング粒を含む)

0 1m

第85図 SK 1027実測図

#### 出土遺物 (第92図)

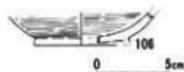
土師質土釜の脚部 (108) が出土している。

#### 土坑34 (SK 1034) (第93図)

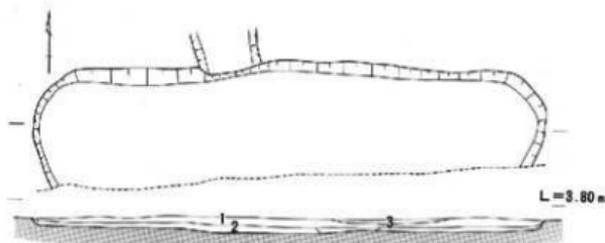
S-5グリッド、調査区北部西側で検出された土坑である。平面プランは長方形状を呈し、規模は長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.36mである。長軸方向は東西である。遺構内埋土は2層に分層される。

#### 出土遺物 (第94図)

109は龍泉窯系の青磁椀である。体部外面にしの



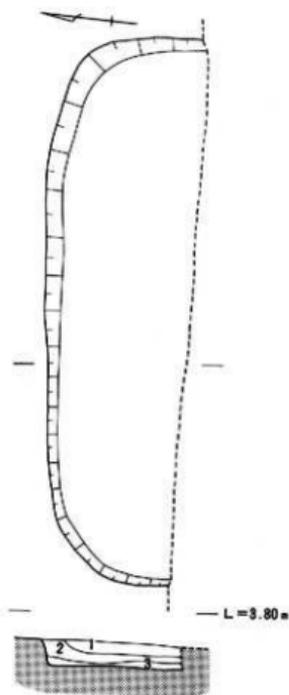
第87図 SK 1029出土遺物実測図



- 1 オリーブ褐色2.5Y4/6粘性砂質土(炭化物が若干含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土
- 3 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土

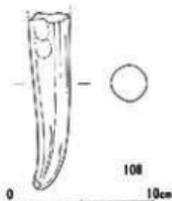
0 2m

第86図 SK 1029実測図

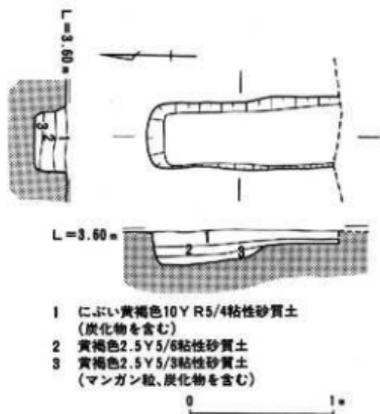


- 0 1 m
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土  
(炭化物、土器片を若干含む、粘性ややあり)
  - 2 褐色10Y R4/4砂質土  
(マンガン粒を含む)
  - 3 黄褐色2.5Y3/4砂質土  
(マンガン粒を含む)

第88図 SK 1031実測図



第92図 SK 1033出土遺物実測図

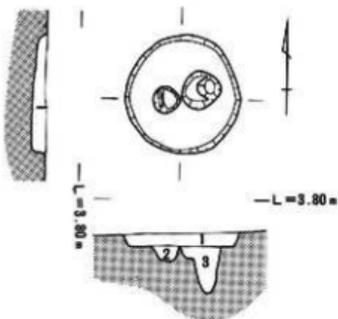


- L = 3.60 m
- 1 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(炭化物を含む)
  - 2 黄褐色2.5Y5/6粘性砂質土
  - 3 黄褐色2.5Y5/3粘性砂質土  
(マンガン粒、炭化物を含む)

第89図 SK 1032実測図



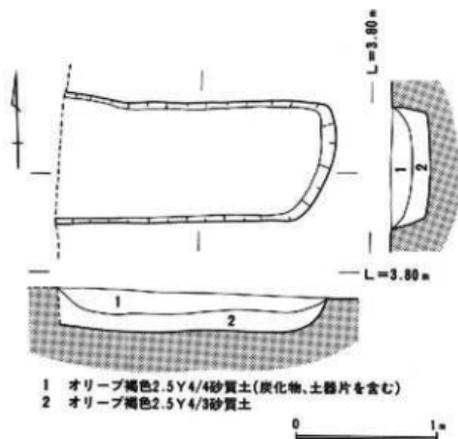
第90図 SK 1032出土遺物実測図



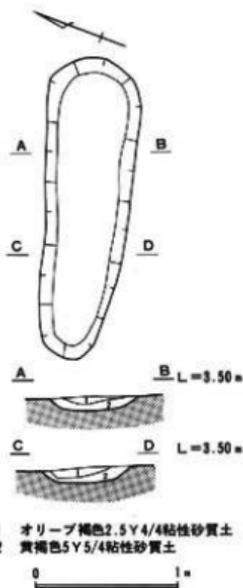
- 0 1 m
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土  
(炭化物含む)
  - 2 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土  
(炭化物を若干含む)
  - 3 にぶい黄褐色10Y R4/3粘性砂質土  
(炭化物を含む)

第91図 SK 1033実測図

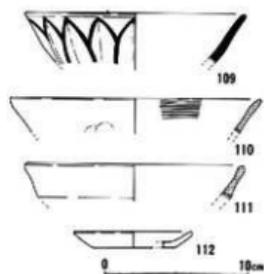
ぎ蓮弁が施されており、横田・森田編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類に属するものである。時期的には13世中葉頃と考えられる。110・111は瓦器碗である。小片であるため明確な時期決定は困難であるが、概ね尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、13世紀初頭頃に属するものと思われる。112は土師質土器小皿である。



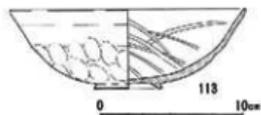
第93図 SK 1034実測図



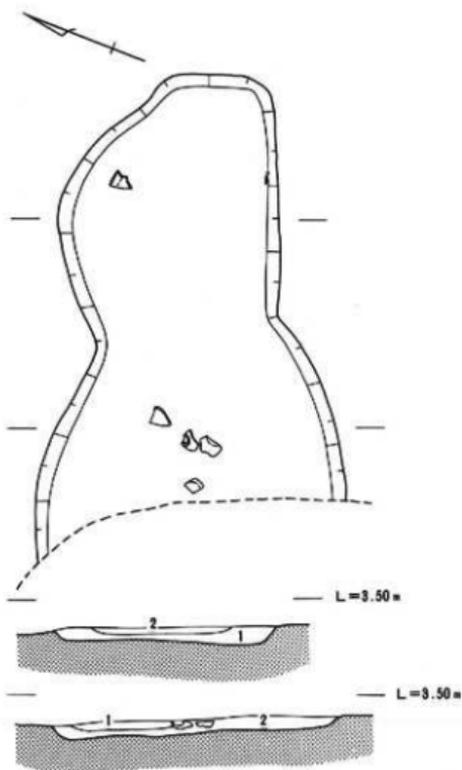
第95図 SK 1035実測図



第94図 SK 1034出土遺物実測図



第96図 SK 1035出土遺物実測図



### 土坑35 (SK1035)

U-9 グリッド、調査区北部東側で検出された土坑である(第95図)。平面プランは長楕円形を呈し、規模は長軸2.2m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。遺構内埋土は2層に分層され、埋土中より瓦器碗が出土している。

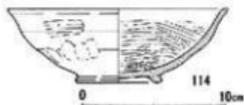
### 出土遺物 (第96図)

113は瓦器碗である。体部は内彎して外上方にのびる。体部内面は粗いヘラミガキがほどこされている。時期は尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、13世紀初頭頃と思われる。

- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土  
(マンガン粒と炭化物を含む)
- 2 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土  
(マンガン粒を含む)



第97図 SK1035実測図

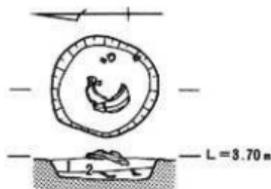


第98図 SK1036出土遺物実測図

### 土坑36 (SK1036)

W-9 グリッド、調査区北東部で検出された土坑である(第97図)。東側が溝2に切られており全容は不明

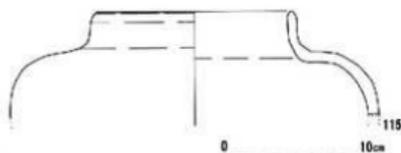
である。平面プランはいびつな長楕円形を呈し、現存部分で長軸2.24m、短軸0.92m、深さ0.1mを測る。遺構内埋土は3層に分層され、床面より瓦器碗が出土している。



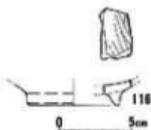
- 1 軸灰黄色2.5Y5/2粘性砂質土  
(マンガン粒を含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土



第99図 SK 1037実測図



第100図 SK 1037出土遺物実測図

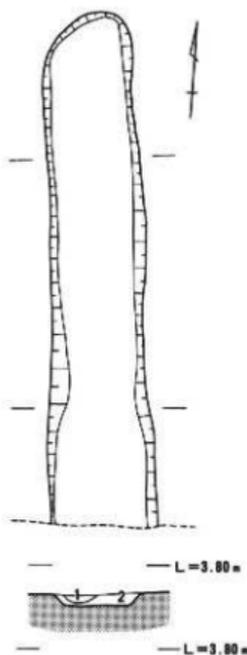


第102図 SK 1038出土遺物実測図

出土遺物 (第98図)

瓦器碗が出土している (114)。時期は尾上分類の

和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、時期は12世紀末葉～13世紀初頭と思われる。



- 1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガン粒、炭化物を含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガン粒を含む)



第101図 SK 1038実測図

土坑37 (SK 1037)

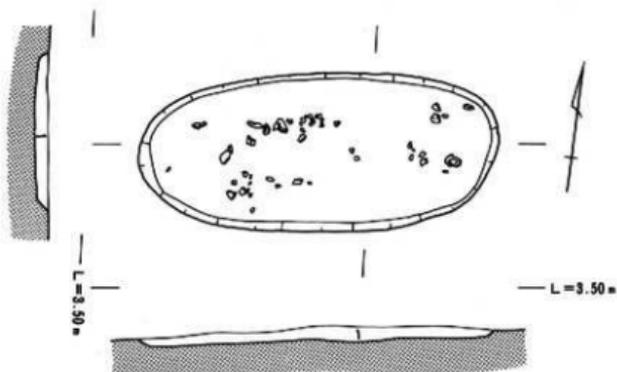
U-9グリッド、調査区北部で検出された土坑である (第99図)。平面プランは円形を呈し、長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.11mを測る。遺構内埋土は2層に分層される。埋土中より土師質土器の釜 (茶釜) が出土している。時期は13世前半と思われる。

出土遺物（第100図）

土師質の土釜である（115）。口縁部は短く直立し、肩が張る。茶釜であると思われる。

土坑38（S K 1038）

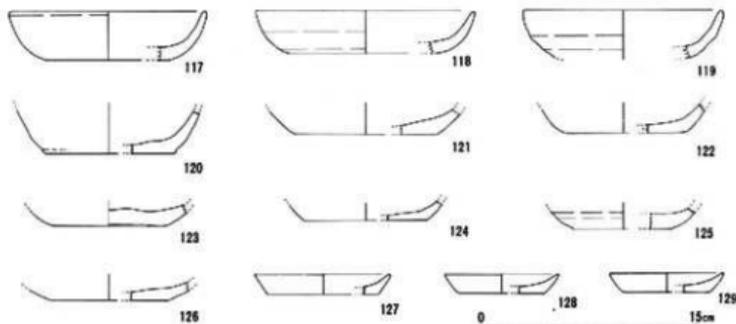
S-8グリッド、調査区北部で検出されたか長楕円形状の土坑である（第101図）。一部調査区外に延びており、全体の形状は不明であるが、現存部分で長軸3.5m、短軸0.66m、深



1 灰オリーブ色5Y5/3粘性砂質土(マンガン粒多量に含む)

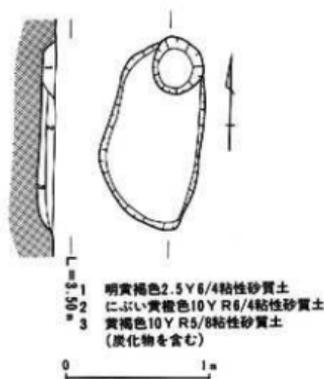


第103図 S K 1039実測図

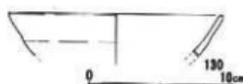


第104図 S K 1039出土遺物実測図

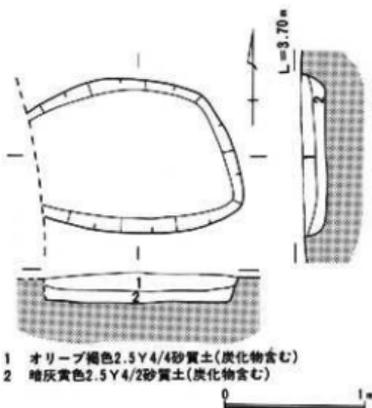
さ0.12mである。長軸は南北方向を指す。遺構内埋土は2層に分層される。



第105図 SK 1041実測図



第106図 SK 1041出土遺物実測図



第107図 SK 1042実測図

#### 出土遺物 (第102図)

埋土中より黒色土器A類碗(116)が出土している。小片のため時期を特定することは困難である。

#### 土坑39 (SK 1039)

S-8, 9グリッドで検出された楕円形状の土坑である(第103図)。長軸1.6m、短軸0.8m、深さ0.08mである。遺構内からは多量の土師質土器が出土しており、ゴミ捨て場的な用途を持つ土坑と考えられる。出土した土器はいずれも小片であり、完形のものはない。

#### 出土遺物 (第104図)

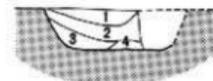
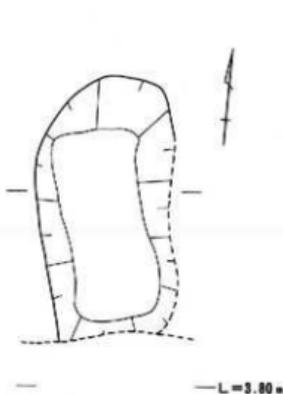
土師質土器の杯・小皿が出土している。117~126は杯、127~129は小皿である。小片のため明確な時期の特定は困難である。

#### 土坑41 (SK 1041)

T, S-8グリッド、調査区北部で検出された楕円形状の土坑である(第105図)。規模は長軸1.34m、短軸0.48m、深さ0.10mである。長軸は南北方向を指す。遺構内埋土は5層に分層される。

#### 出土遺物 (第106図)

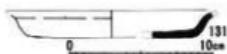
130は土師質土器の碗である。



- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土  
(炭化物を含む)
- 2 灰オリーブ色5Y5/3粘質土  
(炭化物を含む)
- 3 灰オリーブ色5Y5/2粘質土
- 4 オリーブ褐色2.5Y4/6粘性砂質土



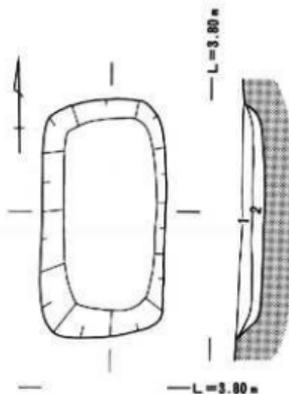
第108図 SK 1045実測図



第109図 SK 1045出土遺物実測図

#### 土坑42 (SK 1042)

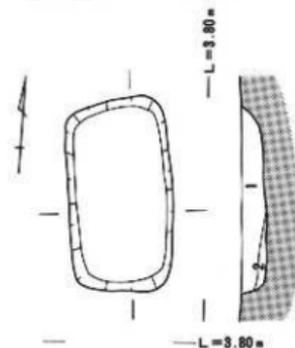
N-5グリッド、調査区中央部西側で検出された長方形の平面プランを呈する土坑である(第107図)。一部調査区外にのびているが、現存規模は長軸1.36m、短軸1.1m、深さ0.2mである。遺構内埋土は2層に分層され、炭化物を多く含んでいた。埋土中より土師質土器、瓦器の小片が数点出土したが、時期を特定することは困難であ



- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
(炭化物、土器片を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土



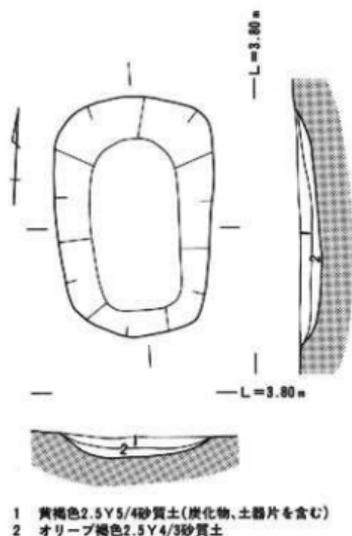
第110図 SK 1047実測図



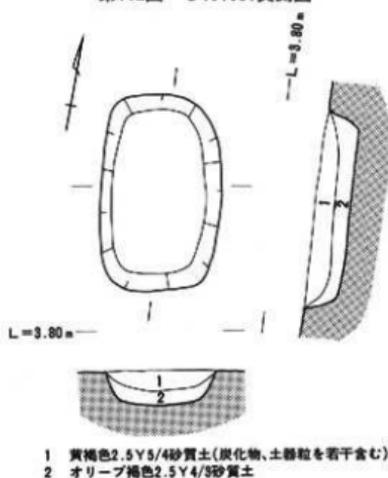
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土  
(炭化物、土器片を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土



第111図 SK 1050実測図



第112図 SK1051実測図



第113図 SK1052実測図

る。

### 出土遺物

出土遺物はいずれも小片であるため、図化し得るものはなかった。

### 土坑45 (SK1045)

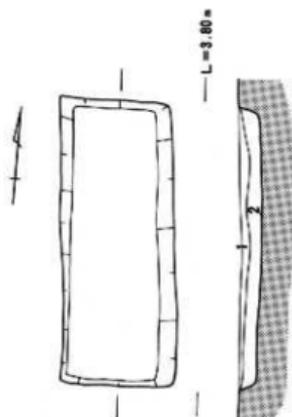
N-5グリッド、調査区中央部端で検出された東西に長い土坑である(第108図)。一部調査区外にかかっているが、平面プランは長方形を呈し、規模は現存で長軸1.93m、短軸0.85m、深さ0.27mである。遺構内埋土は2層に分層される。埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものは少ない。

### 出土遺物 (第109図)

131は須恵質土器の皿である。口縁端部「て」の字状に外反する。小片のため時期の特定は困難であるが、概ね12世紀頃のものと考えられる。

### 土坑47 (SK1047)

O-5、6グリッド、調査区中央部西側で検出された土坑である(第110図)。長方形の平面プランを呈し、長軸1.67m、0.86m、深さ0.15mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北を指す。土墳墓の可能性も考えられるが、そのことを裏付ける資料は出土していない。



- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(炭化物を若干含む)  
2 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土



第114図 SK1054実測図

埋土中より、土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 土坑51 (SK1051)

P-6グリッド、調査区中央部西側で確認された長方形の平面プランを呈する土坑である(第112図)。規模は、長軸1.68m、1.05m、深さ0.15mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北を指す。土坑の形状等からSK1047と同様、土壌墓の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 土坑52 (SK1052)

O-7グリッド、調査区中央部付近で検出された楕円形状の平面プランを呈する土坑である(第113図)。規模は、長軸1.37m、短軸0.84m、深さ0.24mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北を指す。土坑の形状等SK1047と同様、土壌墓の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

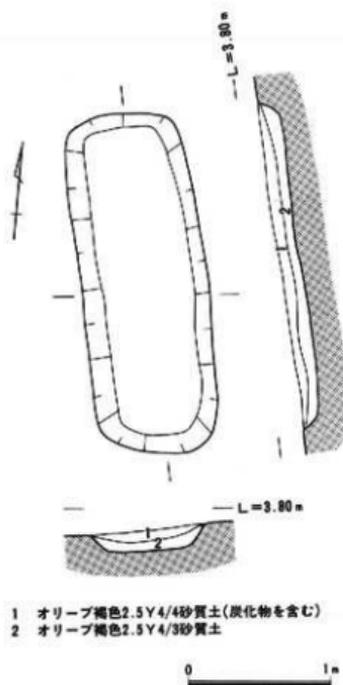
埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 土坑50 (SK1050)

P-6グリッド、調査区中央西側で検出された土坑である(第111図)。長方形の平面プランを呈し、長軸1.35m、短軸0.73m、深さ0.17mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北を指す。土坑の形状等からSK1047と同様、土壌墓の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

埋土中より、土師質土器片・瓦器片等が



第115図 SK 1055実測図

P, Q-7グリッド、調査区中央部付近で検出された長方形の平面プランを呈する土坑である(第115図)。長軸2.4m、0.88m、深さ0.15mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北を指す。土坑の形状等から、土墳墓の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 土坑57 (SK 1057)

O, P-8グリッド、調査区中央部付近で検出された土坑である(第116図)。平面プランは楕円形状を呈し、長軸1.57m、短軸1.27m、深さ0.22mである。遺構内埋土は2層に分層され、遺構の上には炭化物・焼土が堆積していた。その埋土中より瓦器碗・瓦器小皿・土師質土器の杯・小皿・鍋、東播系甕など多数の中世土器の他、獣骨と思われる骨片も出土

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

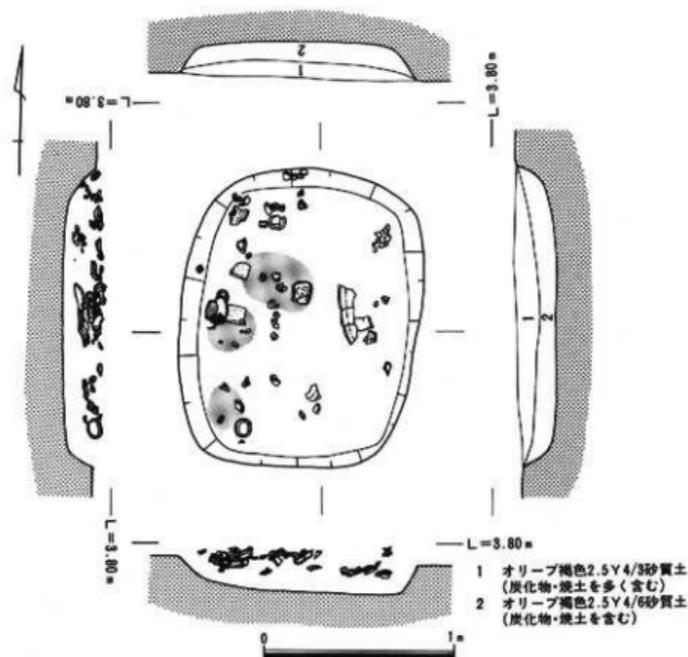
#### 土坑54 (SK 1054)

P, Q-7グリッド、調査区中央部付近で検出された南北に長い土坑である(第114図)。長方形の平面プランを呈し、長軸2.0m、0.8m、深さ0.15mである。遺構内埋土は2層に分層される。長軸方向は南北が指す。土坑の形状等から、土墳墓の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 土坑55 (SK 1055)



第116図 SK1057実測図

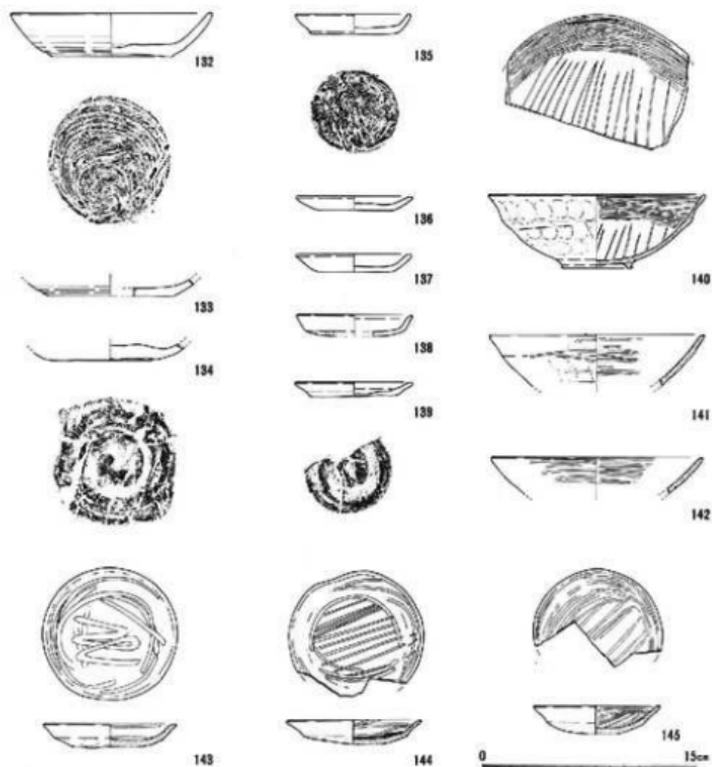
している。出土土器には被熱により土器の表面が変色しているものがみられ、また食物残渣が出土していることから、SK1057は廃棄土坑（ゴミ捨て場）であったと考えられる。出土遺物等から時期は12世紀末は～13世紀初頭頃と思われる。出土した土師質土器の杯・皿には、底部回転ヘラ切り技法と回転糸切り技法のものが一括して出土している。

#### 出土遺物（第117・118図）

132～134は土師質土器の杯である。底部切り放し手法は132・133は回転糸切り、134は回転ヘラ切りである。

135～139は土師質土器の小皿である。底部切り放し手法は135～138は回転糸切り、139は回転ヘラ切りである。

140～142は瓦器碗である。140は内底面に平行ヘラミガキが施されている。また体部外面



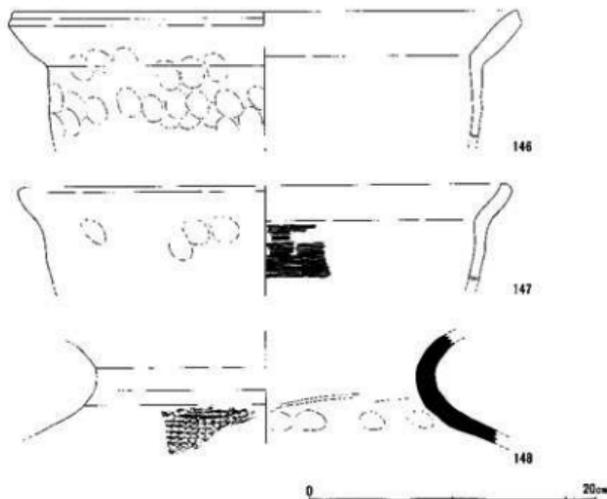
第117図 SK 1057出土物実測図 1

には粘土結合痕がみられる。いずれも尾上分類の和泉型瓦器Ⅱ-3期～Ⅲ-1期に相当するものと思われ、时期的には12世紀末葉～13世紀初頭頃の年代が考えられる。

143～145は和泉型の瓦器小皿である。143は内底面にジグザグ状のヘラミガキ、144・145は平行ヘラミガキが施されている。

146・147は土師質土器の鍋である。口縁部と体部の境の稜は明瞭である。

148は亀山系の甕である。小片のため時期の特定は困難である。



第118図 SK1057出土遺物実測図 2

**土坑58 (SK1058)**

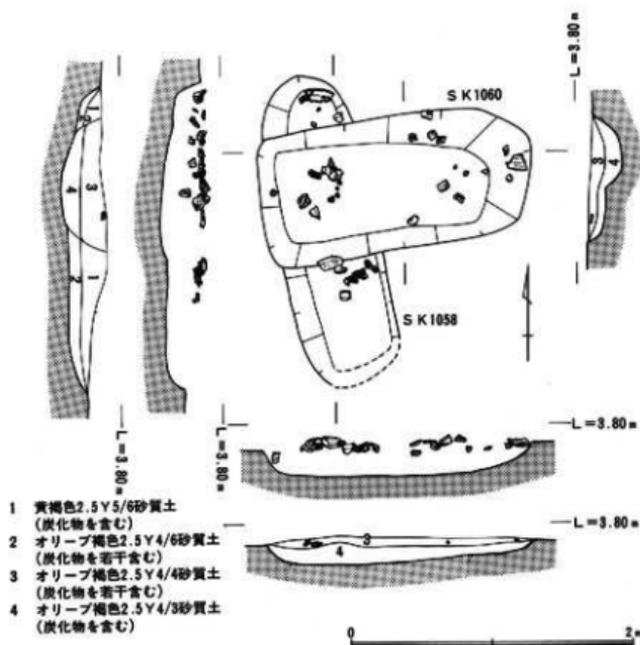
P-9グリッド、調査区中央部付近で検出された土坑で、SK1059と切り合っている（第119図）。平面プランは楕円形状を呈し、長軸2.18m、短軸0.8m、深さ0.28mである。遺構内埋土は2層に分層され、埋土中には炭化物・土器片が多く含まれていることから、ゴミ捨て場の性格を有するものと思われる。

**出土遺物 (第120図)**

149～152は瓦器碗である。いずれも小片であるため、明確な年代決定は困難であるが、概ね尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属し、時期は12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。153・154は土師質土器鍋である。口縁部は「く」の字状に外反し、内面の稜は明瞭である。155は須恵質の短頸小壺である。体部外面には自然釉がみられる。

**土坑60 (SK1060)**

P-9グリッド、調査区中央部付近で検出された土坑である（第119図）。平面プランは楕円形状を呈し、長軸1.89m、短軸0.9m、深さ0.23mである。遺構内埋土は2層に分層され、埋土中には炭化物・土器片が多く含まれていた。SK1058・1059と同様の性格を持つ土坑で



第119図 SK1058 SK1060実測図

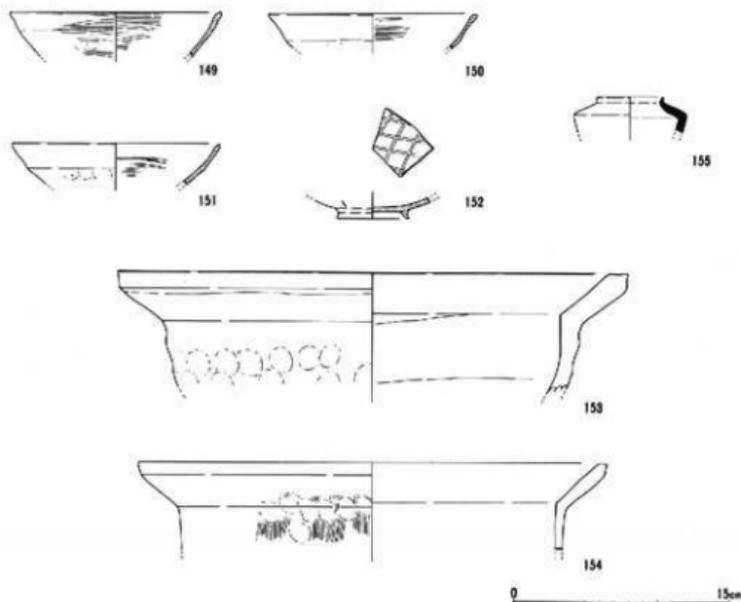
あると思われる。

#### 出土遺物 (第121図)

156~158は瓦器碗である。いずれも屋上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期に属するものと思われる。時期的には12世紀後半頃の年代が与えられる。156は体部外面に粘土結合痕がみられる。

#### 土坑59 (SK1059)

P-9グリッド、調査区中央部付近で検出された土坑である(第122図)。平面プランは楕円形状を呈し、長軸2.85m、短軸0.83m、深さ0.26mである。遺構内埋土は2層に分層され、埋土中には炭化物・土器片が多く含まれていることから、ゴミ捨て場の用途を持つ土坑と考えられる。



第120図 SK 1058出土遺物実測図

出土遺物（第123図）

いずれも小片であるため、図化し得るものは少ない。159は瓦器碗である。時期的には尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期～Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

土坑61（SK1061）

P、Q-9グリッド、調査区中央部付近で確認された土坑である（第124図）。一部調査区外にかかるが、平面プランは楕円形状を呈し、長軸1.77m、短軸0.45m、深さ0.1mである。遺構内埋土は2層に分層され、埋土中には炭化物・土器片が含まれていた。

出土遺物（第125図）

160～161は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期～Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

土坑62 (S K 1062)

O-8グリッド、調査区中央部付近で検出された方形状の土坑である(第126図)。規模は長軸1.32m、短軸1.05m、深さ0.2mである。遺構内埋土は2層に分層される。床面より瓦器碗、鉄製品が出土した。



出土遺物 (第127図)

162は瓦器碗の底部である。内底面には格子目のヘラミガキが施されている。



156



157



158

0 10cm

土坑63 (S K 1063)

P-8グリッド、調査区中央部付近で検出された楕円形状の土坑である(第128図)。規模は長軸1.78

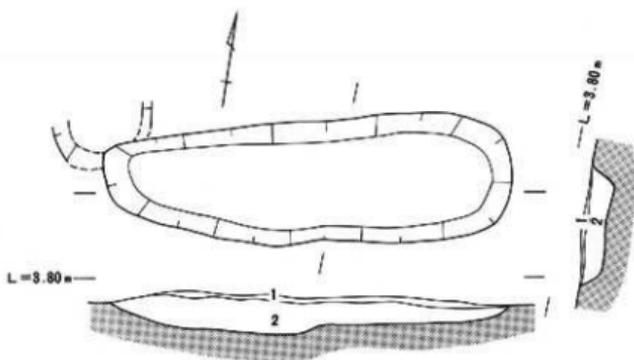


159

0 10cm

第123図 S K 1059出土遺物実測図

第121図 S K 1060出土遺物実測図



- 1 暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土  
(炭化物を含む)  
2 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
(炭化物、土器片を若干含む)

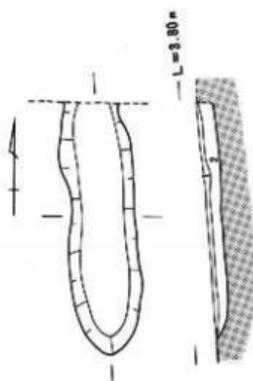
0 2m

第122図 S K 1059実測図

m、短軸1.12m、深さ0.28mで、長軸は南北方向を指す。遺構内埋土は2層に分層される。遺構内埋土中より瓦器碗等が出土した。

#### 出土遺物 (第129図)

163～166は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。また163の体部外面には粘土結合痕がみられる。167は土師質土器銅である。口縁部内面は粗いヨコハケが施されている。168は土師質の管状土簞である。



#### 土坑65 (SK 1065)

0-8グリッド、調査区中央部付近で検出された土坑である (第130図)。平面プランは方形を呈し、規模は長軸0.82m、0.74m、深さ0.14mである。遺構内埋土は2層に分層される。遺構内からは土師質の円盤状高台小皿、底部回転ヘラ切りの土師質小皿、瓦期碗が出土している。

L = 3.80 m



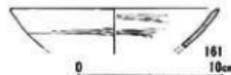
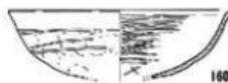
- 1 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土 (炭化物、土器片を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土 (炭化物を若干含む)



第124図 SK 1061実測図

#### 出土遺物 (第131図)

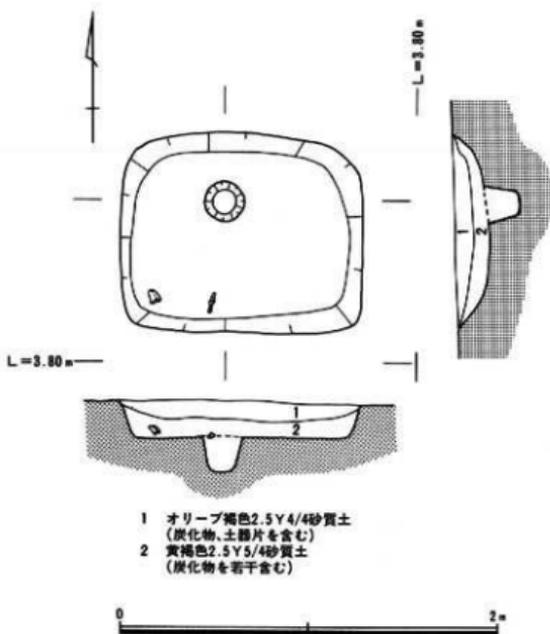
169～172は土師質土器の円盤状高台小皿である。底部は回転ヘラ切りのちナデで仕上げる。時期は12世紀後半頃と思われる。173は土師質土器小皿である。底部切り放し手法は回転ヘラ切りである。174は瓦期碗の底部である。内底面は平行ヘラミガキが施される。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。



第125図 SK 1061出土遺物実測図

#### ビット24 (SP 1024)

I-11グリッドで検出されたビットである (第132図)。平面形は楕円形状を呈し、長軸41cm、短軸28cm、深さ10cmである。遺構内埋土は1層である。



第126図 SK 1062実測図

出土遺物 (第133図)

175は小片のため全体の器形は不明であるが、須恵質土器の壺底部と思われる。



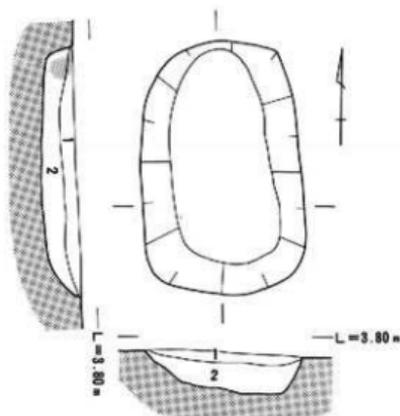
ビット67 (SP1067)

S-8グリッドで検出された直径約22cm、深さ18cm 第127図 SK 1062出土遺物実測図の円形状のビットである (第134図)。遺構内埋土は1層である。



出土遺物 (第135図)

176は瓦器碗である。小片のため明確な時期の特定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉~13世紀初頭頃と思われる。



1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土  
(炭化物を若干含む、土器片も含む)
2. 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
(トーン部炭化物集中)



第128図 SK1063実測図

### ビット79 (SP1079)

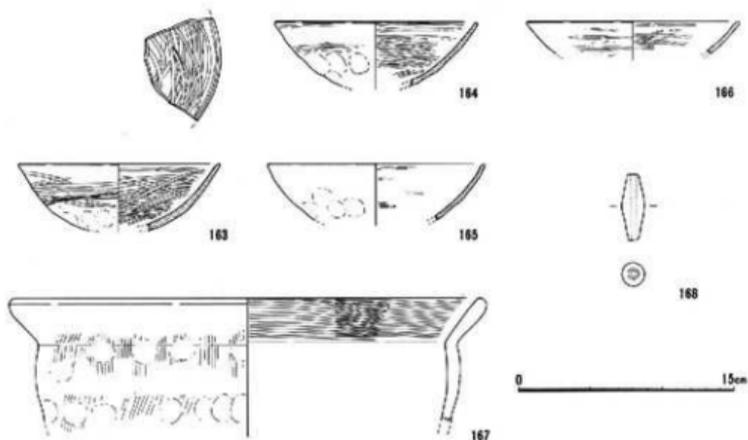
T-8グリッドで検出された直径約22cm、深さ14cmの円形状のビットである(第136図)。遺構内埋土は1層である。

### 出土遺物 (第137図)

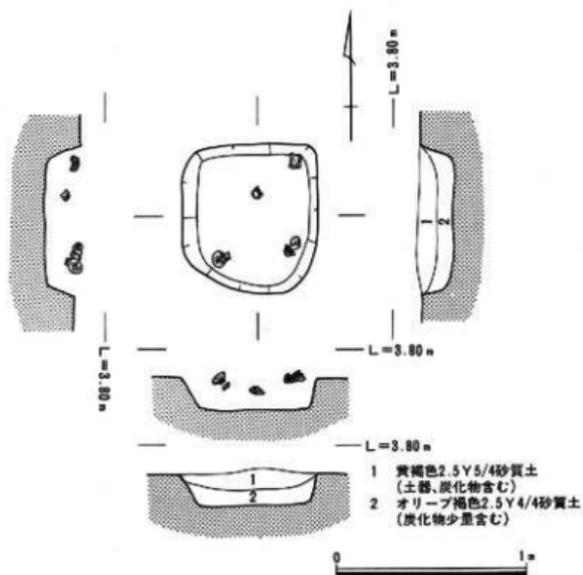
77は青磁碗で器体外面に蓮弁が施されている。横田・森田編年の龍泉窯系青磁碗I-5類に属すものと思われる。

### ビット95 (SP1095)

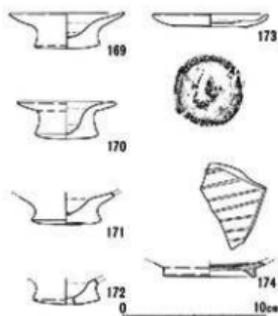
T-8グリッドで検出された直径約30cm、深さ24cmの円形状のビットである(第138図)。遺構内埋土は3層に分層される。



第129図 SK1063出土遺物実測図



第130図 SK1065実測図



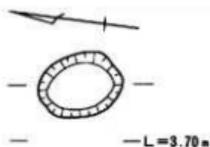
第131図 SK1065出土遺物実測図

#### 出土遺物 (第139図)

178は白磁碗で、口縁部が外反するタイプである。横田・森田編年の白磁碗V-2類、12世紀後半頃の時期と考えられる。179・180は瓦器碗である。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

#### ビット97 (SP1097)

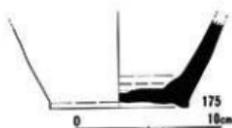
T-9グリッドで検出された直径約22cm、深さ16cmの円形状のビットである(第140図)。遺構内埋土は2層に分層される。



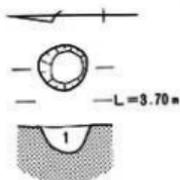
1 灰オリーブ色7.5Y5/3粘質土



第132図 S P 1024実測図



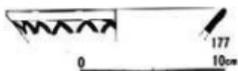
第133図 S P 1024出土遺物実測図



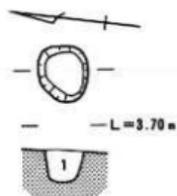
1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガン粒、炭化物を  
含む、土器片も若干含む)



第136図 S P 1079実測図



第137図 S P 1079出土遺物実測図



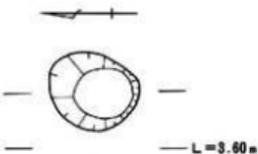
1 オリーブ褐色2.5Y4/4粘性砂質土  
(炭化物を含み、土器片も若干含む)



第134図 S P 1067実測図



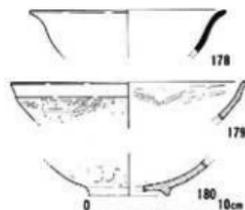
第135図 S P 1067出土遺物実測図



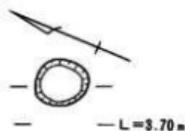
1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(炭化物と土器片を含む、粘性ややあり)  
2 黄褐色2.5Y5/4粘性砂質土  
(マンガン粒を若干含む、粘性ややあり)  
3 黄褐色2.5Y5/3粘性砂質土  
(マンガン粒を若干含む、粘性ややあり)



第138図 S P 1095実測図



第139図 S P 1095出土遺物実測図



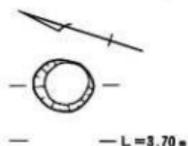
- 1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガング粒、炭化物を含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガング粒と炭化物を含む)  
(土器片も若干含む)



第140図 S P 1097実測図



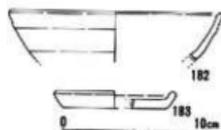
第141図 S P 1097出土物実測図



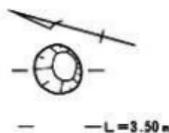
- 1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガング粒、炭化物、土器片含む)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガング粒を含む、炭化物、  
土器片も若干含む)



第142図 S P 1100実測図



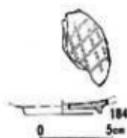
第143図 S P 1100出土物実測図



- 1 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガング粒、炭化物を含む)
- 2 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(炭化物を含む)



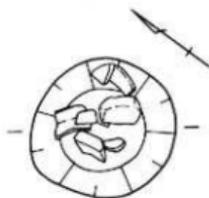
第144図 S P 1104実測図



第145図 S P 1104出土物実測図

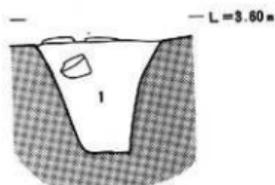
出土遺物 (第141図)

瓦器碗の底部 (181) が出土している。



ビット100 (SP1100)

T-9グリッドで検出された直径約28cm、深さ22cmの円形状のビットである (第142図)。遺構内埋土は2層に分層される。



出土遺物 (第143図)

土師質土器の碗 (182) と皿 (183) が出土している。小片のため明確な時期の決定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

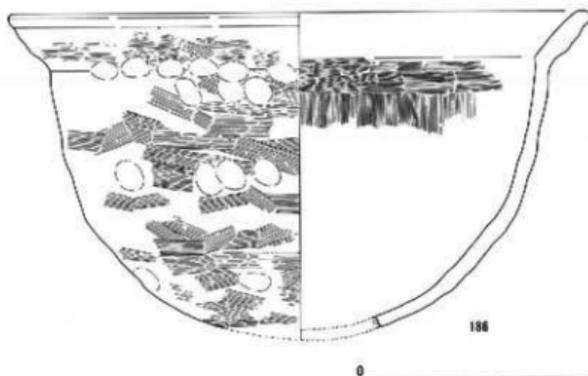
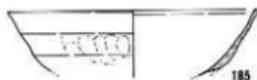
1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガン酸、炭化物、土器片を含む、粘性ややあり)



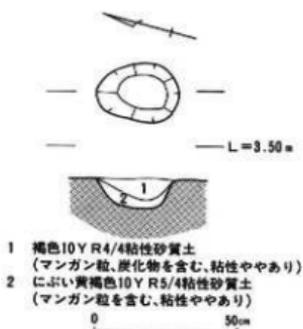
第146図 SP1107実測図

ビット104 (SP1104)

T-9グリッドで検出された直径約22cm、深さ18cmの円形状のビットである (第144図)。遺構内



第147図 SP1107出土遺物実測図



- 1 褐色10Y R4/4粘性砂質土  
(マンガン粒、炭化物を含む、粘性ややあり)
- 2 にぶい黄褐色10Y R5/4粘性砂質土  
(マンガン粒を含む、粘性ややあり)

第148図 SP1114実測図



第149図 SP1114出土遺物実測図

埋土は2層に分層される。

#### 出土遺物 (第145図)

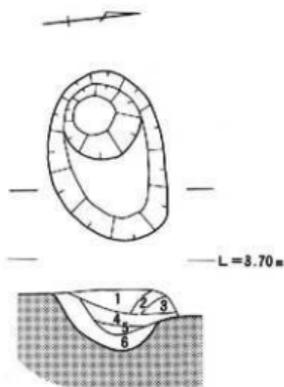
瓦器碗の底部である (184)。小片のため明確な時期の決定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦期碗Ⅲ-1期、12世紀末葉~13世紀初頭頃と思われる。

#### ピット107 (SP1107)

U-8グリッドで検出された、直径約41cm、深さ40cm、平面形は円形のピットである (第146図)。遺構内埋土は1層である。ピット内より土師質土器鍋等が出土している。ピット内に廃棄したものと思われる。

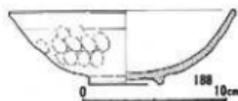
#### 出土遺物 (第147図)

185は瓦期碗である。小片のため明確な時期の決定は困難であるが、尾上分類の和泉型瓦期碗Ⅲ-1期、12世紀末葉~13世紀初頭頃と思われる。186はいわゆる短胴型の土師質土器鍋である。時的には共伴遺物等から13世紀初頭~前半頃のものと考えられる。



- 1 にぶい黄色2.5Y 6/4粘性砂質土(炭化物を若干含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y 4/4粘性砂質土(炭化物を多く含む)
- 3 黄褐色2.5Y 5/4粘性砂質土(炭化物を若干含む)
- 4 オリーブ褐色2.5Y 4/3粘性砂質土(炭化物を多く含む)
- 5 黄褐色2.5Y 5/3粘性砂質土(炭化物を若干含む)
- 6 にぶい黄色2.5Y 6/3粘性砂質土(炭化物を含む)

第150図 SP1144実測図



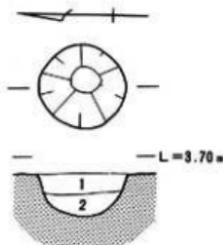
第151図 SP1144出土遺物実測図

### ビット114 (SP1114)

U-9グリッドで検出された直径約22cm、深さ10cm、平面形は円形を呈する。ビットである(第148図)。遺構内埋土は2層に分層される。

### 出土遺物 (第149図)

187は土師質土器碗の底部である。小片のため詳細な時期決定は困難である。



- 1 黄褐色2.5V5/4砂質土  
2 黄褐色2.5V5/3砂質土

### ビット144 (SP1144)

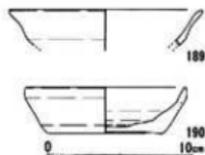
T-8グリッドで検出された長軸60cm、短軸40cm、深さ22cmの楕円形のビットである(第150図)。遺構内埋土は5層に分層される。明瞭な柱穴痕は確認されなかった。

### 出土遺物 (第151図)

瓦器碗が出土している(188)。小片であるため詳細な時期の特定は困難だが、13世紀前半頃と思われる。



第152図 SP1148実測図



第153図 SP1148出土遺物実測図

### ビット148 (SP1148)

N-6グリッドで検出されたビットである(第152図)。直径約45cm、深さ22cm、平面プランは円形状を呈する。遺構内埋土は2層に分層される。

### 出土遺物 (第153図)

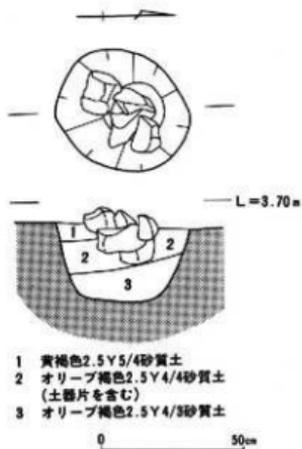
土師質土器の碗(189)・杯(190)が出土している。いずれも小片であるため、時期の特定は困難である。

### ビット151 (SP1151)

O-6グリッドで検出された直径約45cm、深さ27cmのビットである(第154図)。平面プランは円形を呈し、遺構内埋土は3層に分層される。上面には拳大の角礫が集石していた。

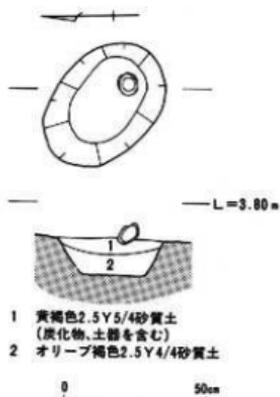
### ビット166 (SP1166)

O-6グリッドで検出されたビットである。規模は長軸49cm、短軸33cm、深さ14cm、平面プランは楕円形を呈する(第155図)。遺構内埋土は2層に分層される。



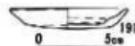
- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質土
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土  
(土器片を含む)
- 3 オリーブ褐色2.5Y4/8砂質土

第154図 SP 1151実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
(炭化物、土器を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土

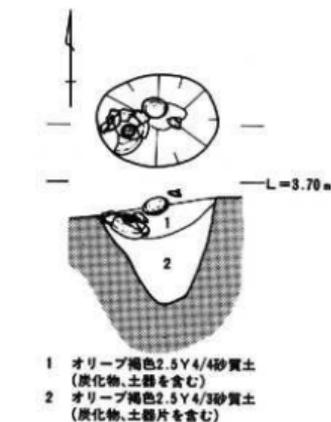
第155図 SP 1166実測図



第156図 SP 1166出土遺物実測図

#### 出土遺物 (第156図)

土師質土器小皿 (191) が1点出土している。12世紀末葉～13世紀初頭頃と思われる。

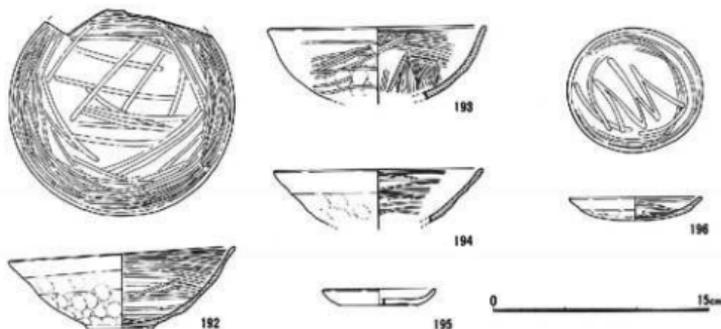


- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土  
(炭化物、土器を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土  
(炭化物、土器片を含む)

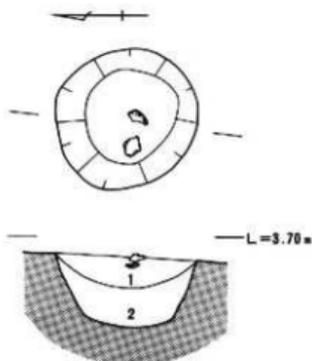
第157図 SP 1173実測図

#### ビット173 (SP 1173)

P-9グリッドで検出された長軸42cm、短軸36cm、深さ36cm、平面プランは楕円形のビットである (第157図)。遺構内埋土は2層に分層され、1層には炭化物を多く含んでいた。遺構内より、ほぼ完形の瓦器碗・瓦器小皿が出土している。土器は二次的な焼成を受け橙色に変色している。また瓦器碗の高台内に串

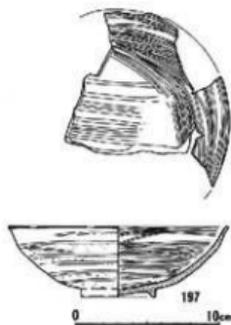


第158図 SP1173出土遺物実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
(炭化物、土器片を含む)
- 2 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土

第159図 SP1178実測図

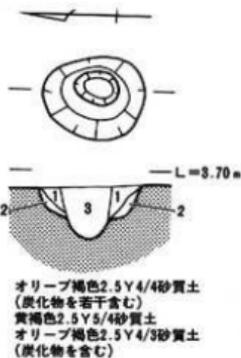


第160図 SP1178出土遺物実測図

状のもので十字が印されているものが出土していること等から、祭祀的な性格をもつピットであると思われる。

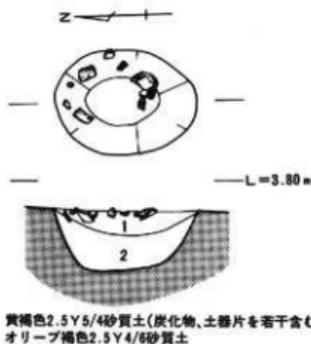
#### 出土遺物 (第158図)

瓦器碗 (192~194)・瓦器小皿 (196)、土師質小皿 (195) が出土している。192~194の瓦器碗は尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属するものと思われ、ピット内出土物は12世紀末葉~13世紀初頭頃の年代が与えられる。192は被熱しており、一部赤褐色に変色している。また高台内には十字状の記号が記されている。195の小皿は底部回転糸切りである。



- 1 オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土  
(炭化物を若干含む)  
2 黄褐色2.5Y5/4砂質土  
3 オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土  
(炭化物を含む)

第161図 SP1179実測図



- 1 黄褐色2.5Y5/4砂質土(炭化物、土器片を若干含む)  
2 オリーブ褐色2.5Y4/6砂質土

第163図 SP1181実測図



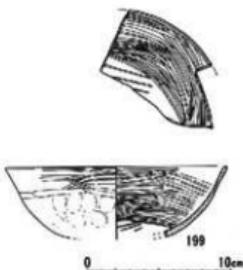
第162図 SP1179出土遺物実測図

#### ビット178 (SP1178)

O-8グリッドで検出されたビットである(第159図)。平面プランは円形状を呈する。規模は直径約48cm、深さ21cmで、遺構内埋土は2層に分層される。

#### 出土遺物(第160図)

瓦器碗が出土している(197)。尾上分類の和泉型 瓦器碗Ⅱ-3期に属するものである。時期は12世紀後半頃と思われる。



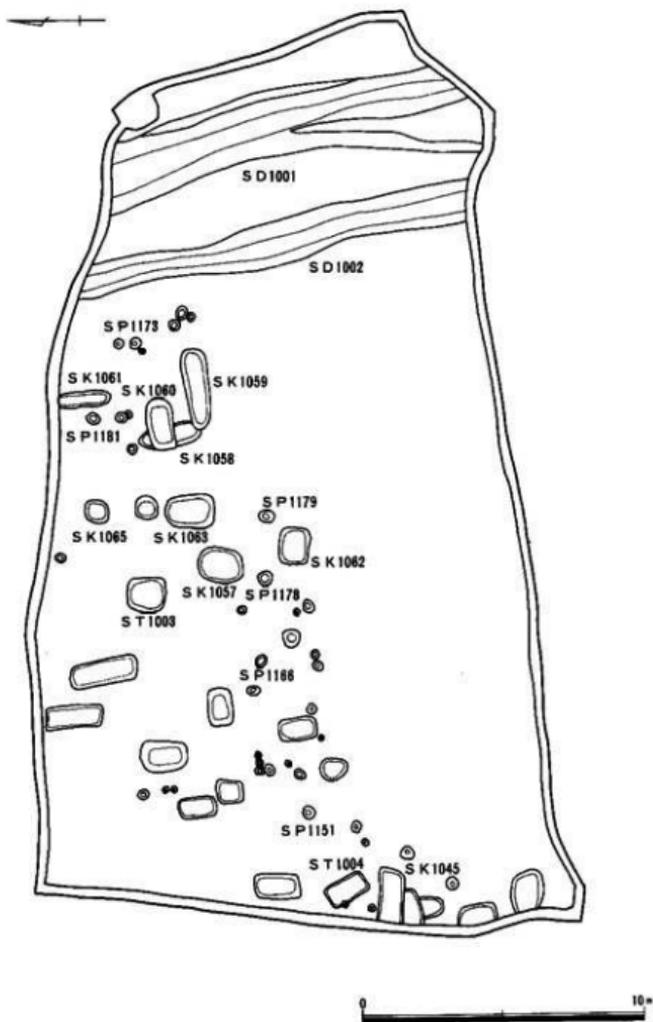
第164図 SP1181出土遺物実測図

#### ビット179 (SP1179)

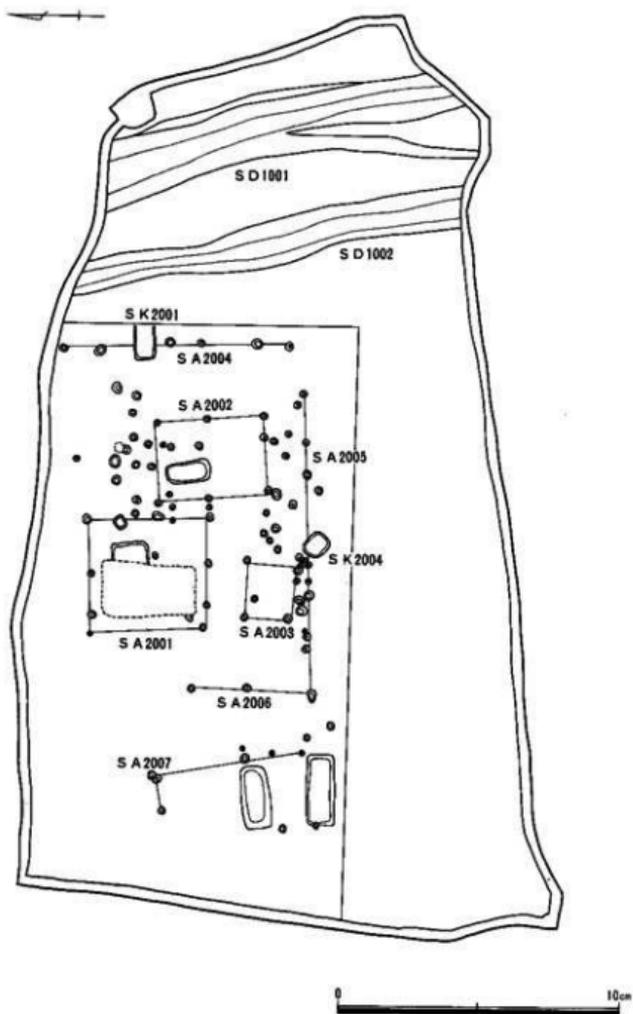
O-8グリッドで検出されたビットである(第161図)。平面プランは楕円形状を呈する。規模は長軸52cm、短軸43cm、深さ27cmで、遺構内埋土は3層に分層される。

#### 出土遺物(第162図)

和泉型の瓦器小皿(198)が出土している。



第165図 2次調査区第1遺構面遺構配置図



第166図 2次調査区第2遺構面遺構配置図

## ビット181 (SP1181)

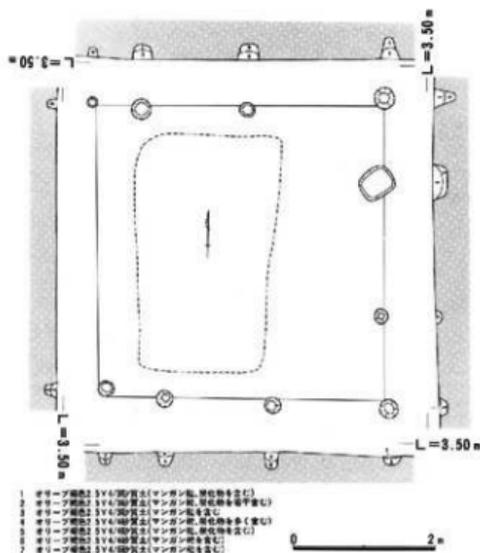
P-9グリッドで検出された平面プランは楕円形のビットである(第163図)、規模は長軸50cm、短軸37cm、深さ22cmである。遺構内埋土は2層に分層される。

## 出土遺物(第164図)

瓦器碗(199)が出土している。小片であるため詳細な時期の特定は困難であるが、屋上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属するものと思われ、ビット内出土遺物は12世紀末~13世紀初頭頃の年代が与えられる。

## 2 第2遺構面

第2遺構面では掘立柱建物、土坑等が検出された。一部柱穴が不明であるが、調査区のほぼ中央において柱列が並ぶ掘立柱建物を3棟およびそれに付随するものと思われる棚列を4列検出した。SA2001・2002は主屋、SA2003はそれらに付属する納屋であると思われる。これらの掘立柱建物・棚列の時期は、周辺の状況から12世紀前半~末(平安時代末~鎌倉時代前半)の頃であると思われる。



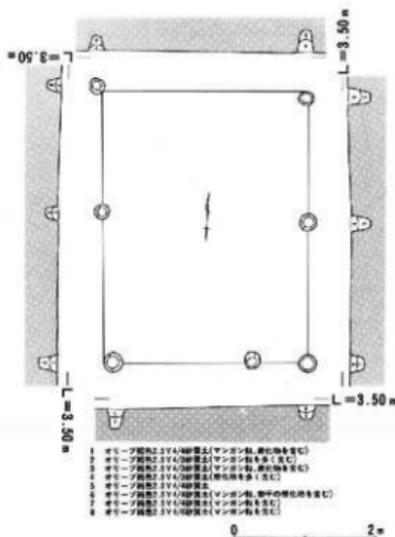
第167図 SA2001

## 掘立柱建物(SA2001)

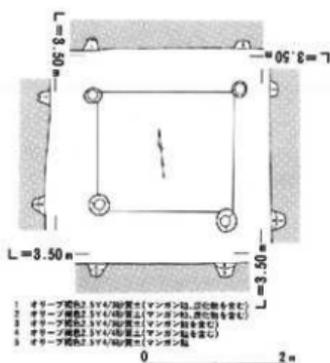
P-7, 8グリッドで検出された8基のビットにより構成される。SA2001は梁間2間×桁行3間である(第167図)。東側に庇をもつ。棟方向はN-89°-Wである。ビット内埋土は柱痕をとどめない。

## 出土遺物

ビット内からは土師質土器の杯・皿等が出土したが、小片であるため実測可能なものはなかった。椀ね12~13世紀頃のものであると思われる。



第168図 SA2002実測図



第169図 SA2003実測図

つものと思われる。

### 掘立柱建物跡2 (SA2002)

O, P-8, 9グリッドで検出された6基のピットにより構成され、SA2001の東側に位置する。棟方向はN-5°-Eである。規模は梁間2間×桁行3間である(第168図)。ピット内埋土は柱痕をとどめない。

### 出土遺物

ピット内からは土師質土器の杯・皿等が出土したが、小片であるため実測可能なものはなかった。概ね12~13世紀頃のものであると思われる。

### 掘立柱建物跡3 (SA2003)

O-7, 8グリッドで検出された4基のピットにより構成される。SA2001の南側に位置する。棟方向はN-5°

-Eで規模は梁間1間×桁行1間である(第169図)。

### 出土遺物

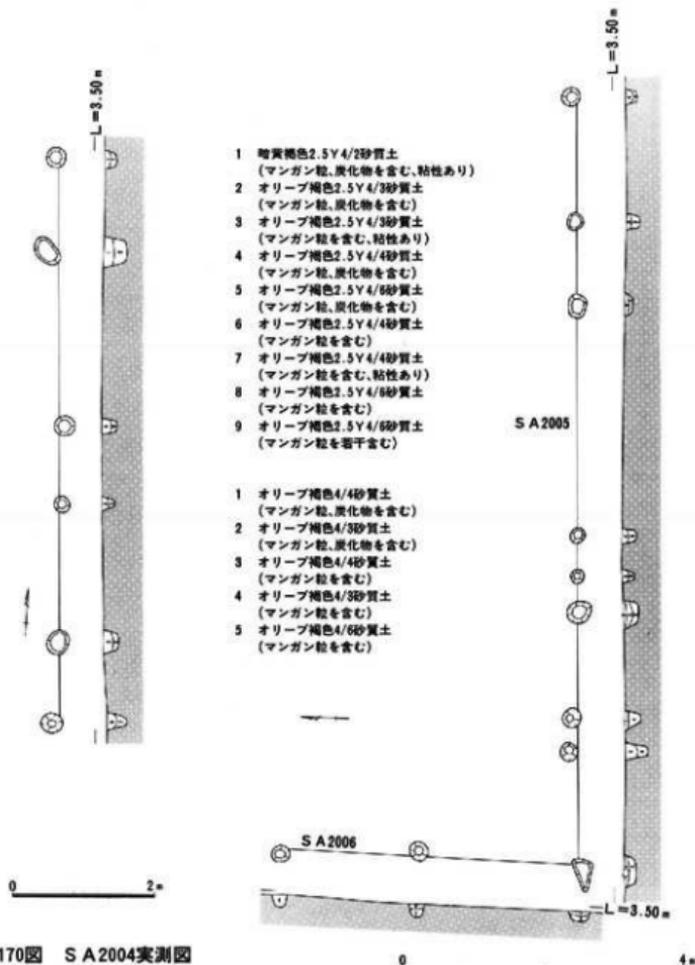
ピット内からは土師質土器の杯・皿等が出土したが、小片であるため実測可能なものはなかった。概ね12~13世紀頃のものであると思われる。

### 掘列 (SA2004~2007)

SA2001~3を画するように検出された掘列である。一部柱穴が不明であるが、掘列の柱穴間間は約2.0mを測る。屋敷を区画する機能をも

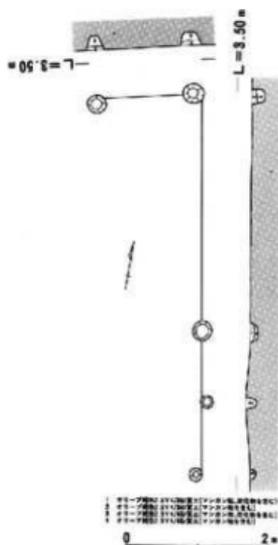
欄列1 (SA2004)

O～Q-9グリッドで検出されたピット列である。SA2002の東側に位置し、SD1001と平行して南北に延びる。確認できる現存長は約8.0mである(第170図)。SA2001～3の建物群と付随するものと思われ、SA2001～3と同時期に構築されていたものと思われる。



## 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。



第172図 SA 2007実測図

### 柵列 2 (SA 2005)

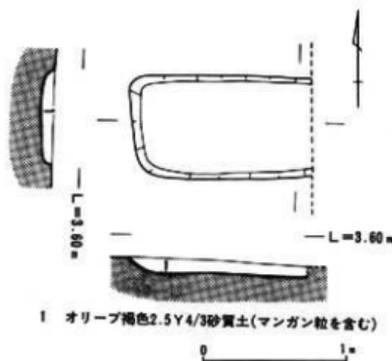
O-7~9グリッドで検出されたピット列である。SA 2001~3の南側に位置し、東西に延びる。確認できる現存長は約11.0mである(第171図)。SA 2004と同様、建物を区画する用途を有するものと想定できよう。時期的には他の柵列と同時期と思われる、12~13世紀頃であろう。

### 出土遺物

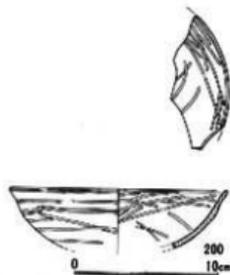
埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

### 柵列 3 (SA 2006)

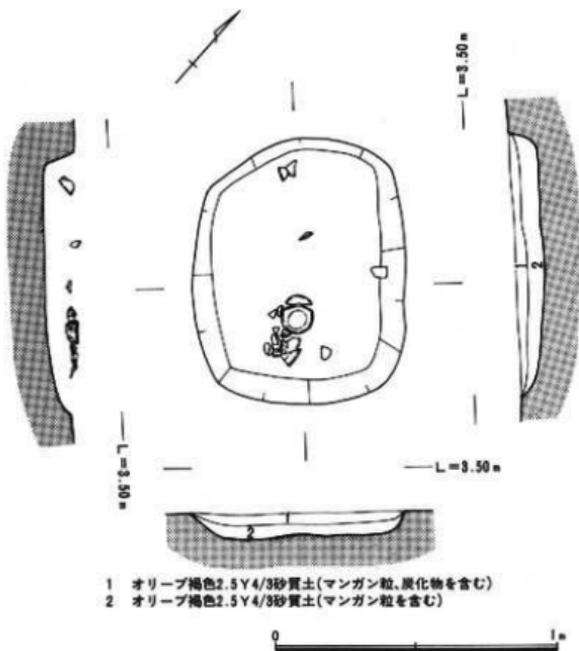
O、P-9グリッドで検出されたピット列で、SA 2001・3の南側に位置する。SA 2005の西端から北へ直角に曲がり南北に延びる(第171図)。確認できる現存長は約4.2mである。SA 2004と同様、建物を区画する用途を有するものと想定できよう。時期的には他の柵列と同時期と思われる、12~13世紀頃であろう。



第173図 SK 2001実測図



第174図 SK 2001出土遺物実測図



第175図 SK2004実測図

#### 出土遺物

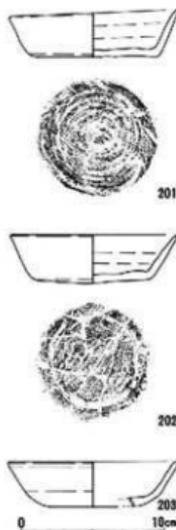
埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。

#### 柵列4 (SA2007)

O, P-6グリッドで検出されたピット列である。SA2004の西側に位置し、南北に延びる(第172図)。確認できる現存長は南北へ約5.3m、西へ1.5mである。時期的には他の柵列と同時期と思われ、12~13世紀頃であろう。

#### 出土遺物

埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片のため図化し得るものはなかった。



第176図 SK2004出土遺物実測図

#### 土坑1 (SK2001)

P-9グリッドで検出された土坑である(第173図)。平面形は長方形状を呈し、長軸方向は東西である。一部調査区外に延びているが、現存で長軸1.3m、短軸0.73m、深さ0.09mである。遺構内埋土は1層である。

#### 出土遺物(第174図)

瓦器碗(200)が出土している。時期的には尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期に属するものと思われ、12世紀前半頃と思われる。

#### 土坑4 (SK2004)

O-8グリッド、調査区中央部西側で検出された土坑である(第175図)。平面プランは長方形状を呈する。規模は長軸0.95m、短軸0.75m、深さ0.1mで、長軸方向は北西である。遺構内埋土は2層に分層され、1層は炭化物が多量に含まれていた。遺構内より、土師質土器の杯等が出土している。

#### 出土遺物(第176図)

土師質土器の杯(201~204)が出土している。体部は直立気味に外上方に延びる。いずれも底部切り放し手法は回転ヘラ切りである。時期的には12世紀初頭~前半頃のものと思われる。

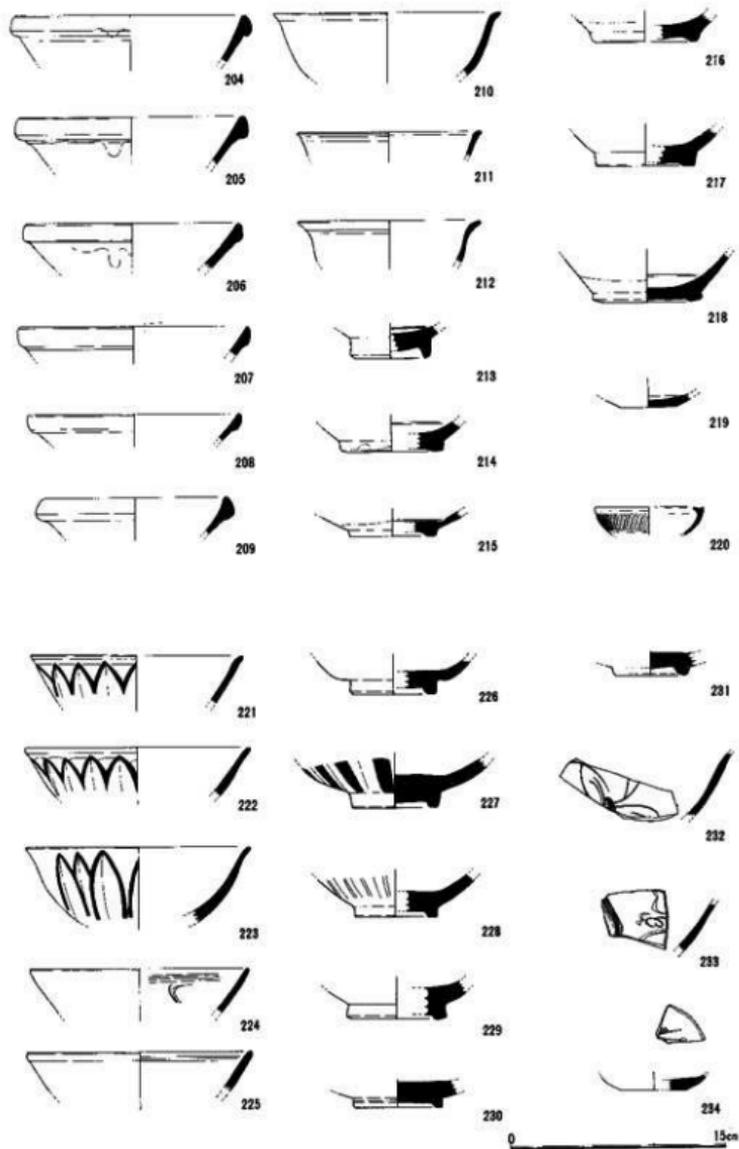
#### 遺物包含層出土遺物(第177~190図)

古城遺跡(C地点)からは遺構に伴う遺物の他、包含層中からも多量の遺物が出土している。その中で図化し得た遺物について機能・用途別に分け、提示しておきたい。

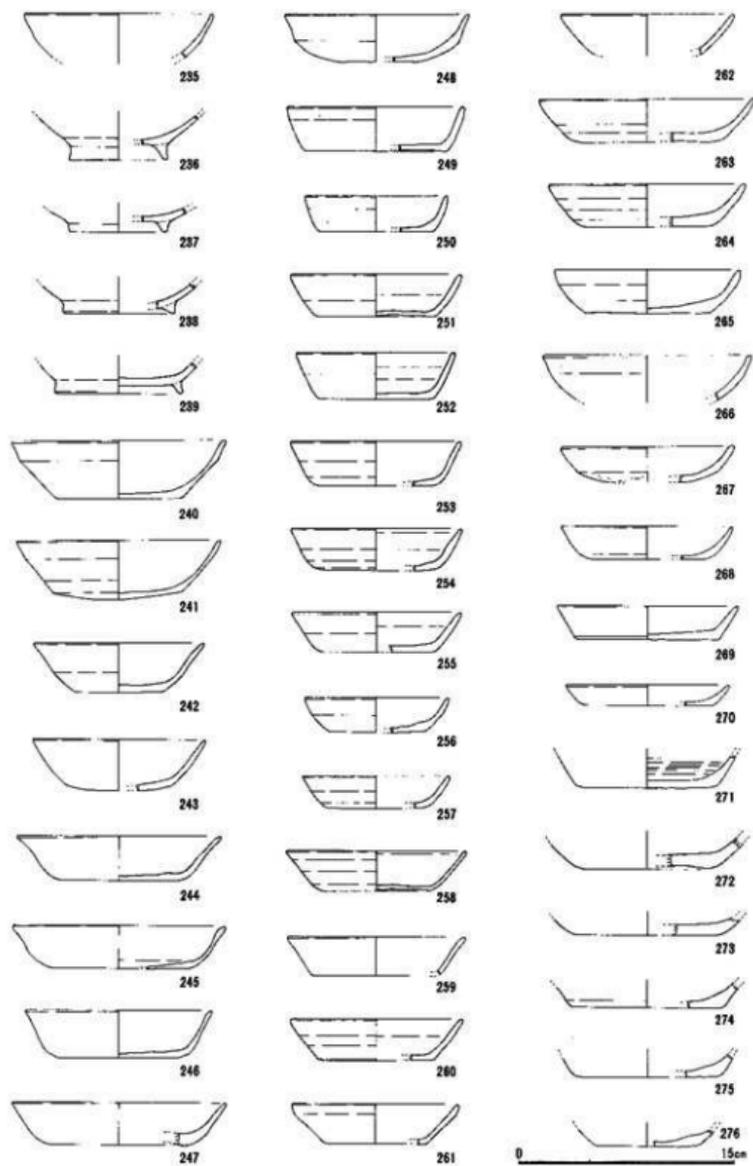
#### 輸入磁器(青・白磁)(第177図)

古城遺跡(C地点)からは輸入磁器が比較的多く出土しているが、いずれも小片のため図化し得る個体は少ない。

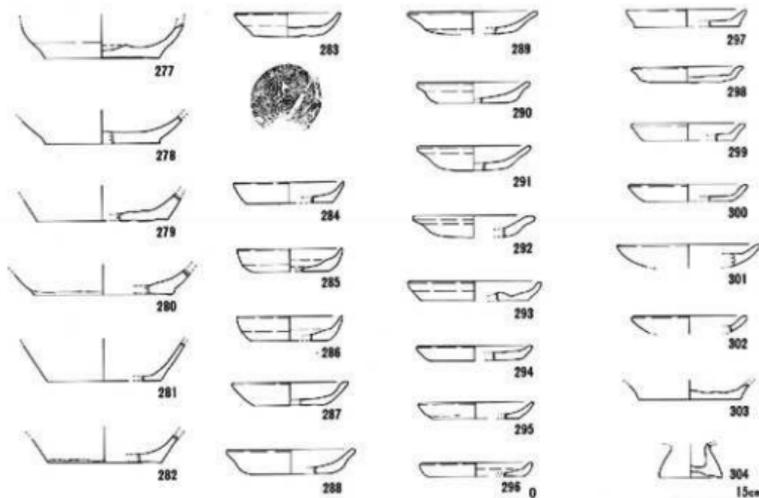
204~220は白磁である。204~218は碗である。204~209は玉縁の口縁である。204~209・314~218は白磁碗Ⅳ-1類で時期は11世紀中葉~12世紀前半の頃と思われる。210~212はV



第177图 遗物包含層出土遺物実測图 1



第178图 遺物包含層出土遺物実測図 2



第179図 遺物包含層出土遺物実測図 3

— 2 類の口縁部が外反するものである。213～218は高台部である。213は細く高く直立した高台で白磁碗V-1類。214～218は高台は厚く、削り出しは浅い。白磁碗IV-1類に属するものである。見込み部分に沈線有するものがみられる。219は白磁小皿IV-1類の小皿、220は白磁合子である。

221～234は青磁である。234は同安窯系の青磁小皿のV-2類で、それ以外は龍泉窯系の青磁小皿でI-4～5類である。概ね12世紀中葉～13世紀初頭頃と思われる。

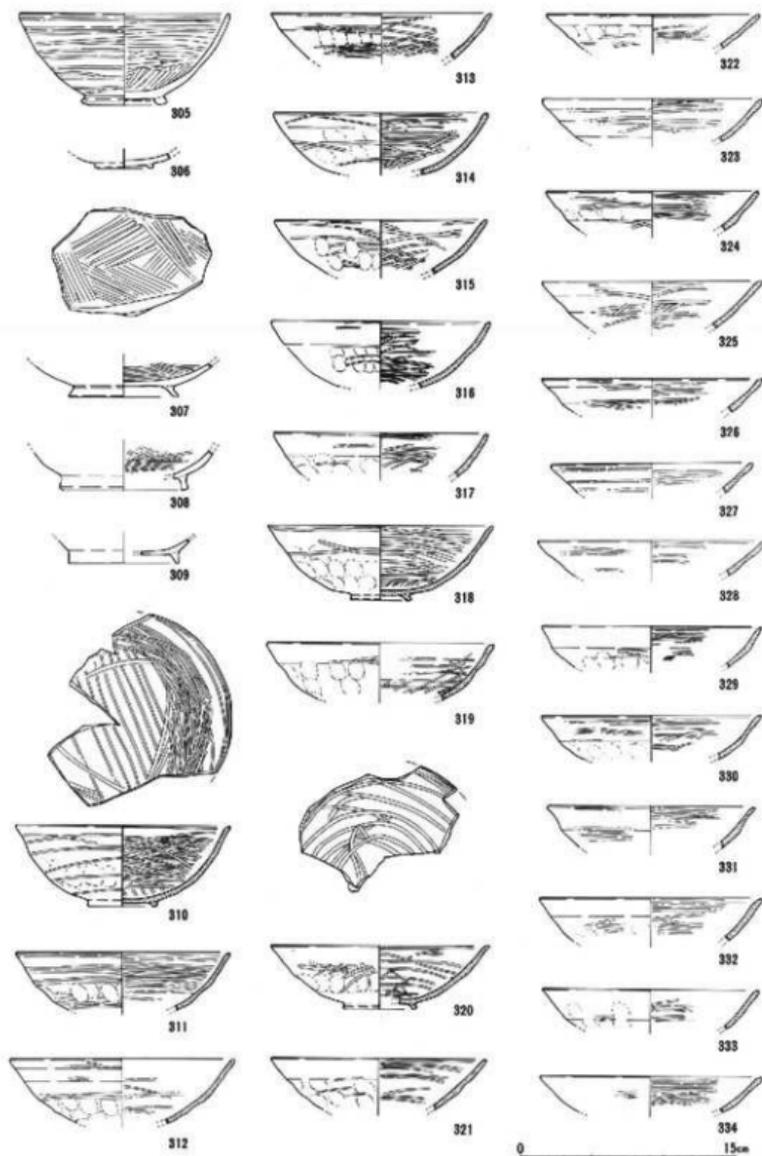
#### 供膳具（第178・179図）

##### 土師質土器杯・皿・小皿

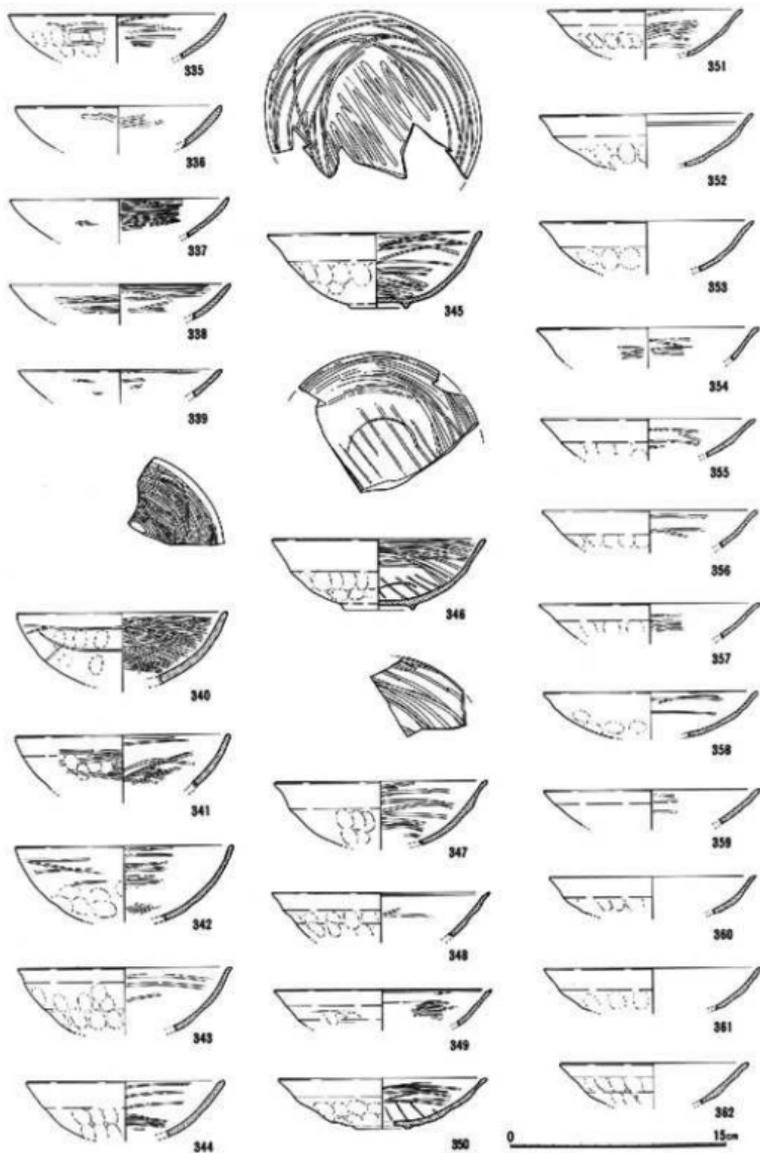
遺物包含層から土師質土器の杯・皿等が多く出土しているが、完形のものではなく、時期の特定は困難であるが、概ね12～13世紀頃のものと思われる。235～239は碗である。240～282は杯である。体部は直線的に外上方に延びる。283～303は小皿である。304は円盤状高台小皿で、時期は12世紀後半頃と思われる。

##### 黒色土器碗・瓦器碗・小皿（第180～183図）

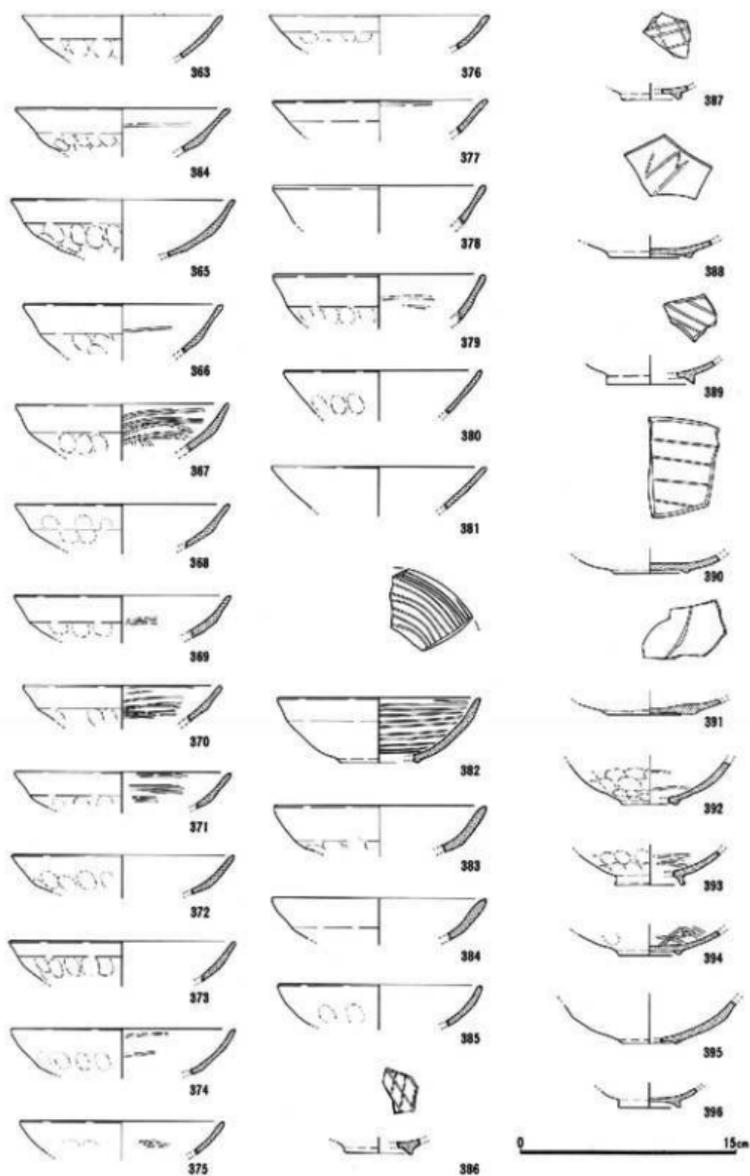
305～309は黒色土器碗である。305はB類、306～309はA類である。



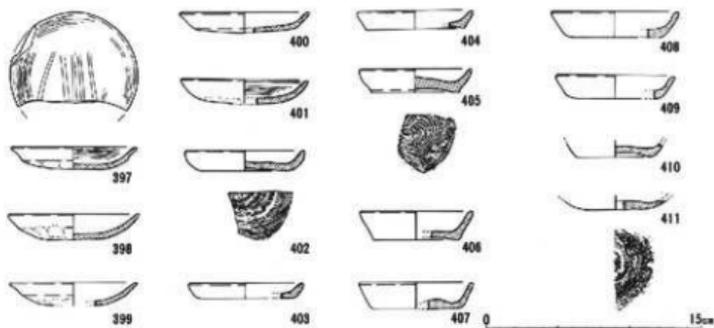
第180图 遺物包含層出土遺物実測图 4



第181图 遗物包含層出土遺物実測図 5



第182图 遗物包含層出土遺物実測图 6



第183図 遺物包含層出土遺物実測図 7

310～396は瓦器碗である。概ね尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期、12世紀後半～13世紀前半頃のものと思われる。310～318は尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期に属するものである。時期は12世紀後半頃と思われる。382は産地不明で出土瓦器碗の中で異質である。

397～411は瓦器小皿である。402～410は底部回転糸切り、411は底部回転ヘラ切りである。

#### 煮沸具（第184・185図）

412～414は土師質土器釜である。414は拱津C型の土師質の釜である。时期的には13世紀後半頃と思われる。415～417は土師質土器鍋である。頸部は「く」の字状に外反する。

418～426は瓦質土器釜である。418・419は口縁部が直立するタイプ、420～425は口縁部が内傾するタイプ、426は体部が直線的に外上方にのびるタイプである。424・425の鋸直下にはユビオサエが明瞭にみられる。

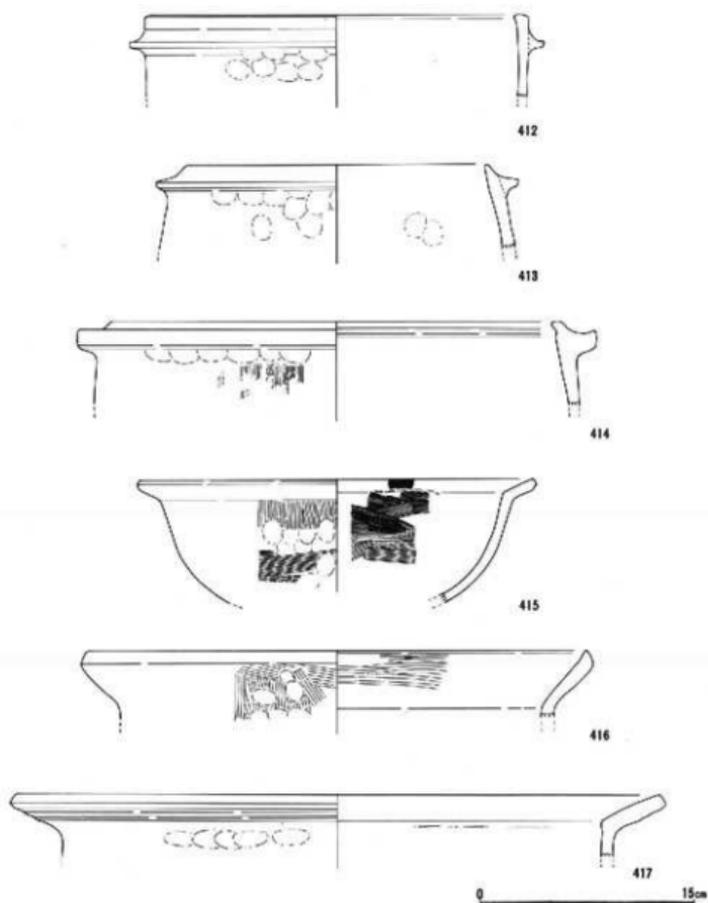
#### 調理具・貯蔵具（第189・187）

427～441は東播系片口鉢である。427～433は東播系中世須恵器Ⅱ期第2段階、12世紀末葉～13世紀初頭頃のものである。434～438はⅢ期第1段階に属し、时期的には13世紀前半～後半頃に位置付けられよう。439～441はⅢ期第2段階、14世紀前半～後半に属するものと思われる。

442～445は東播系甕である。小片であるため詳細な時期は不明である。

#### 中世須恵質土器拓影（第188図）

東播系須恵質土器の叩き文の拓影である。445～454は亀山系の格子目タタキ、455～562は魚住系の斜めタタキ（樹枝文）である。463は土師質土器鍋底部に格子目のタタキが施され

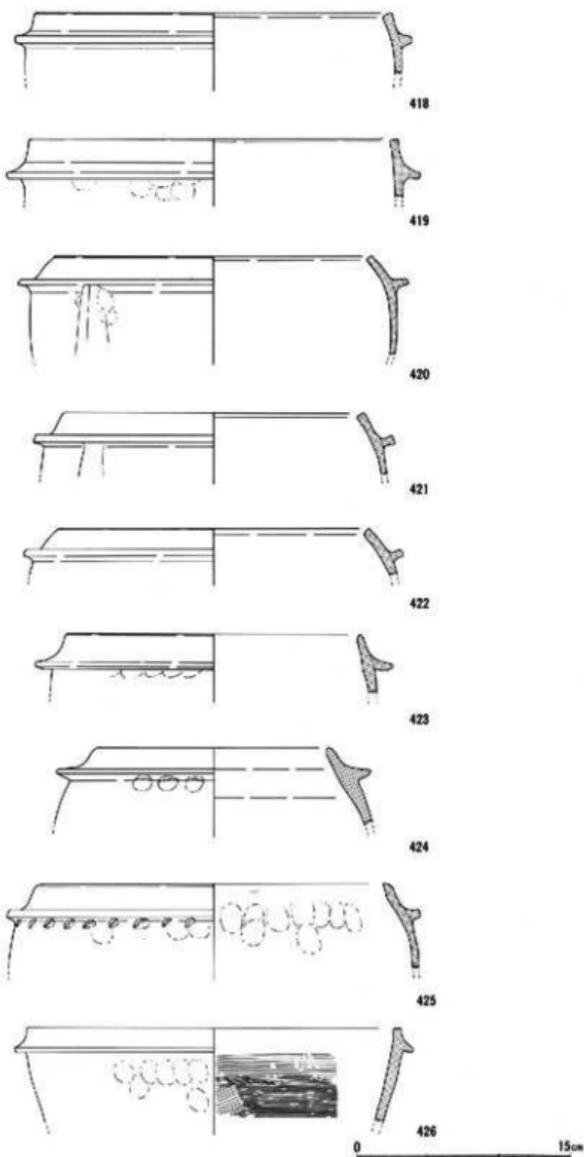


第184図 遺物包含層出土遺物実測図 8

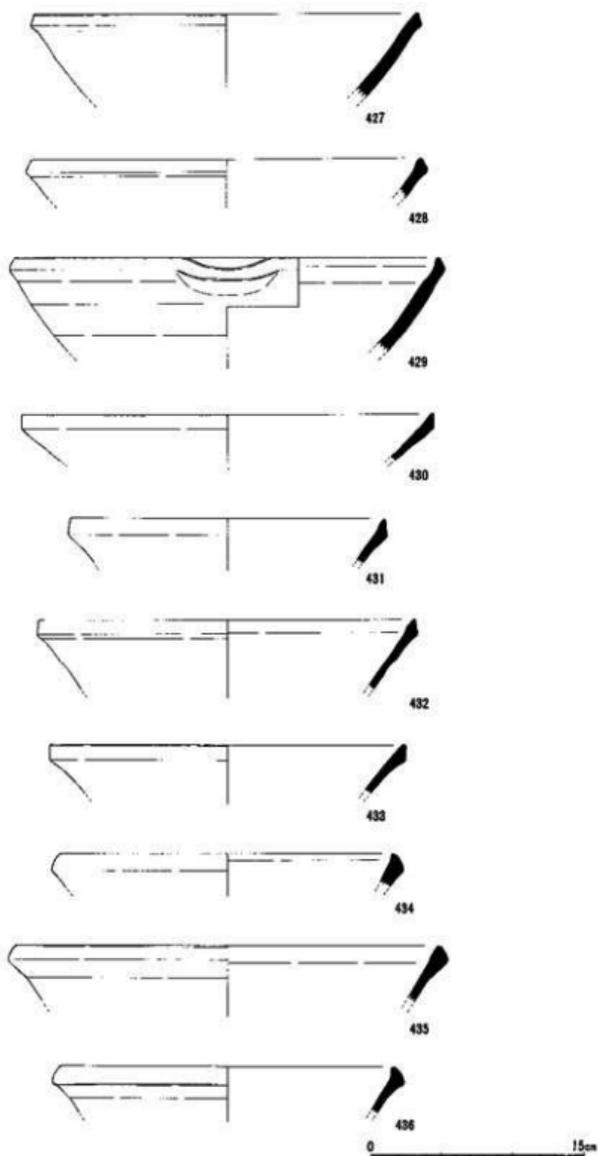
る。

その他 (第189図)

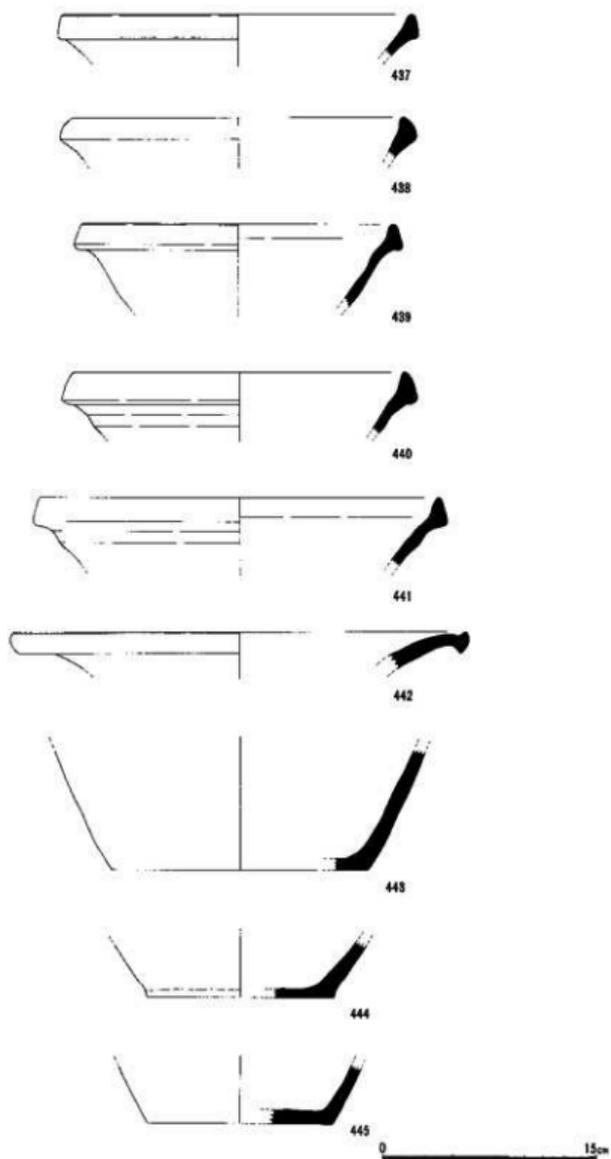
464・465は備前系杯である。小片のため詳細な時期は不明である。466は備前摺り鉢である。口縁部の肥厚は小さく、断面形は四角形状を呈する。備前Ⅲ期末頃と思われる。467は



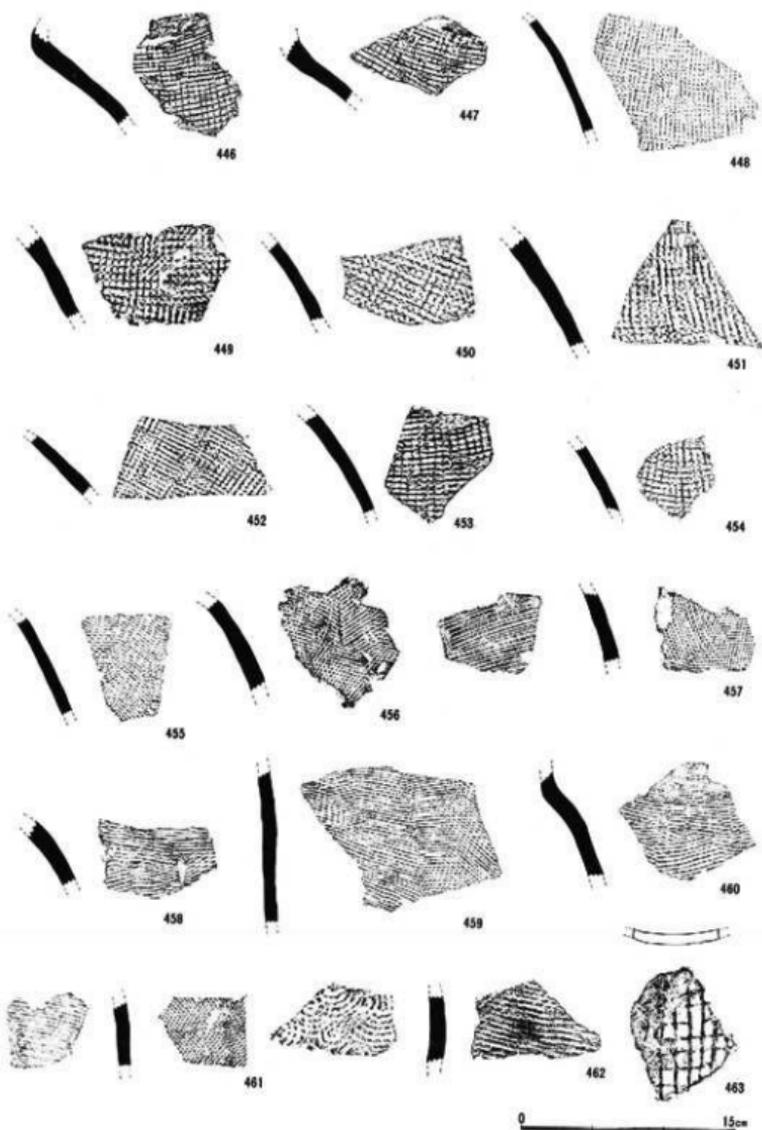
第185图 遗物包含層出土遺物実測图 9



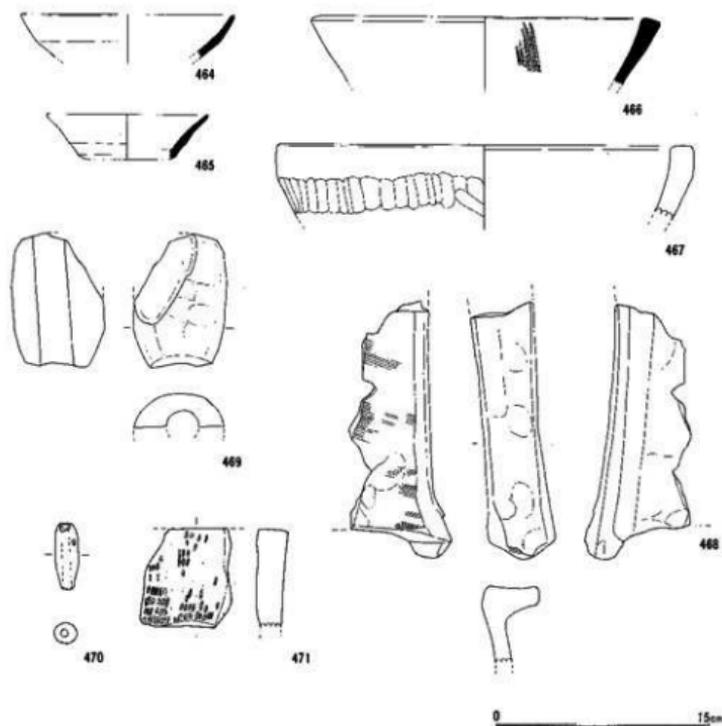
第186圖 遺物包含層出土遺物實測圖 10



第187图 遗物包含層出土遺物実測图 11



第188圖 遺物包含層出土遺物拓影



第189図 遺物包含層出土遺物実測図 12



第190図 遺物包含層出土銭貨拓影

滑石製石鍋である。体部外面にノミ痕があり、意図的に鏝の部分を削り取ったものと思われる。468は土師質の竈の吹き口である。469・470は土師質の管状土錘である。471は土師質の

瓦である。

#### 銭貨（第190図）

銭貨が4枚出土しており、いずれも北宋銭である。

472は皇宋通宝（初鋳年1089年）である。473・474は元豊通宝（初鋳年1078年）で、うち一枚（474）は横鋳銭と思われる。475は大觀通宝（初鋳年1107年）である。

#### 4 第3遺構面

第3遺構面は26層（第29図）のマンガング粒を多量に含むにぶい黄褐色の粘質土である。この層を弥生時代の水田跡と想定したが、そのことを裏付ける畦畔等の遺構を確認することはできなかった。しかしながら、近隣の板野町黒谷川宮ノ前遺跡において弥生時代後期の水田遺構が検出されていることから、古城遺跡周辺においても弥生時代の集落あるいは水田が存在していたことは想像に難くない。今後周辺地域での調査に期待したい。また遺物包含層掘削中に極少量の弥生土器と思われる細片が出土したが、図化するには至らなかった。

## 5 まとめ

今回の調査により、中世の大溝により区画された居住区的一端が明らかにされ、当該期の集落構造を解明する上で興味深い。今回の調査で、本遺跡は平安時代末～室町時代にかけて存続した、溝により区画された屋敷地を伴う居住区及び土墳墓群であることが確認された。

今回の調査で、本遺跡は平安時代末期～室町時代初頭にかけて存続した中世の集落および中世の土墳墓群であることが確認され、前回の調査で確認できなかった第1遺構面（鎌倉時代前半～室町時代）とその下約20cmに第2遺構面（平安時代末）の2時期が遺構面を確認することができた。第1遺構面では中世土墳墓群が検出され、当該期の埋葬形態について貴重な資料が得られた。第2遺構面では掘立柱建物跡が3棟検出され、本遺跡が、溝により区画された屋敷地を伴う居住区から墓域へと変化したことが明らかになった。

第1遺構面では土墳墓群が検出された。土墳墓群の周辺にピットが検出されており、建物群の存在が想定されることから屋敷墓と捉えることもできるが、このような在り方は通常の屋敷墓ではなく、むしろ小規模墓地と考える方が適当であろう。これらは中世集落における墓制を検討していくうえで貴重な資料となろう。

積石土墳墓のST1001は全国的に類例が少ないが、板野地区において近接した時期のものが本遺跡を含め3例検出されている。これらの土墳墓は雑帯を持つ点と十坑の形状は共通点が見いだせるが、石組の形態・下部構造などに相違点があり、これらは集落を構成する集団間の相違あるいは時期的な相違によるものか詳細は不明である。類例資料の増加を待ち今後の課題としたい。

また出土遺物については、主に12世紀～14世紀の土師器・瓦器・輸入陶磁器等の中世土器を検出し、特に土師質土器の製作技法のひとつである回転糸切り技法が県内において12世紀前半にはすでに通常の技法として確立していたことが明らかになった。本遺跡出土の土師器・瓦器等はほとんど不明であった本県に於ける当該期の土器様相を知る上で貴重な資料となろう。また備前窯・東播系須恵質土器・亀山焼等の国内産陶器や青・白磁等の輸入陶磁器および瓦器椀等の搬入土器の出土が県下の他の遺跡と比較しても多く、本遺跡が吉野川水系を利用した四国北東部と畿内を結ぶ交通・商品流通の拠点・中継地またはその周辺に存在した集落であったことを示唆するものであろう。古城遺跡においては立地条件からみて律令制衰退後も、地域経済や畿内と地方を結ぶ諸物資の流通に占める役割は大きなものがあつたと考えられる。当該期における官道の陸路（南海道）の経済的に果たした役割および吉野川の水運といった交通・流通体系も視野にいれて検討していかねばならない課題である。

第2遺構面では、主屋と思われる掘立柱建物跡が2棟、それらに付属する納屋と思われる

掘立柱建物跡が1棟、計3棟検出された。その規模・構成及び短期間で廃絶されていることなど当該期の集落の在り方を検討する上で興味深い。また検出された2条の大溝など、隣接する黒谷川宮ノ前遺跡においても大溝により区画された方形屋敷地が検出されており、本遺跡との関連が注目される。近年、西日本においては、居住区とそれを区画する溝との関係が注目されており、類似した区画をもつ居住区と比較検討することにより中世集落研究の有効な資料となるであろう。屋敷地の区画・規模など中世集落研究の基礎資料の積み上げを持ち、中世当該期の解明を期待したい。集落から墓域へ変化していく屋敷地の変遷は、当時の社会を解明する上で興味深く、今後の研究の一助となれば幸いである。

#### 注

- (1) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について - 型式分類と編年を中心として -」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
- (2) 尾上 実「南河内の瓦器碗」『古文化談叢』1983
- (3) 『世界陶磁全集 3 中世』小学館 1977
- (4) 森田 勉「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987
- (5) 田中 琢「古代・中世における手工業の発達 窯業 畿内」『日本の考古学』Ⅵ 河出書房 1967
- (6) 考古学ライブラリー「播磨」ニューサイエンス社

## IV 考 察 - 古城遺跡 (C地点) 平成4年度調査区を中心にして -

### 1 古城遺跡の中世土器様相について

古城遺跡 (C地点) は古野川下流域、古代より荘園経営が営まれた地域に所在している。近隣には南海道の郡頭駅 (推定地) が所在し、郡衙の存在が予想される地域である。

本遺跡からは多量の土師質土器・瓦器・東播系須恵質土器等の中世土器、龍泉窯系・同安窯系の青磁、白磁等の輸入磁器が出土している。これらの出土遺物は、ほとんどが遺物包含層からの出土であり、遺構出土のものはさほど多くはない。また全体の器形が判別できるものもわずかである。このような状況において、徳島県における当該期の土器様相について明確に述べることは容易ではない。しかし、本遺跡の出土遺物は量的にはかなりのまとまりがあり、特に土師質土器杯・皿、瓦器碗等の供膳具については、これまでの徳島県内で調査された中世遺跡のなかでは良好な資料には成り得る。ただし、これらの資料は当該地域 (古野川下流域) のある時期の特長、遺跡の特殊性を反映しているだけなのかもしれない、徳島県下の様相を総合的に説明するものではないことをあらかじめ断っておきたい。

#### (1) 中世土器組成

古城遺跡 (C地点) の出土遺物には土師質土器・黒色土器・瓦器・須恵質土器・青磁・白磁がある。これらの中世土器を機能・用途別に分類すれば、供膳具 (碗・杯・皿・小皿) としては土師質土器・黒色土器・瓦器・輸入陶磁器がある。本遺跡からは、特に和泉型瓦器碗が多く出土し、碗形態の大部分を占め、土師質土器の碗形態はほとんどみられない。煮沸具 (釜・鍋) には土師質土器・瓦質土器があり、徳島県下においてはその他として滑石製石鍋がある。調理具 (鉢) としては、東播系須恵質土器・土師質土器・瓦質土器・備前焼があるが、そのほとんどが魚住窯の片口鉢で占められる。貯蔵具 (壺・甕) には、東播系須恵質土器 (魚住・亀山) がある。

これらの内訳は第191図のとおりである。第191図は比較的安定した出土をみせた平成4年度調査区についてまとめたものである。これは遺構・遺物包含層出土遺物を含めた全出土点数2,741点について分類したものである。これで見ると土師質土器・瓦器 (瓦質土器) がそれぞれ40%、以下、魚住・亀山などの須恵質土器・備前などの国内産陶器が10%、輸入陶磁器 (青磁・白磁) が7%、黒色土器碗1%、鉄釘・銭貨などその他が2%となっている。ここで目につくは、瓦器・瓦質土器と輸入陶磁器の占有率が高いことが挙げられる。これらは

小片も含めた数字であり、必ずしも絶対的な評価ではないものの、県下の他の遺跡と比較しても高いように思われる。

古城遺跡の出土遺物の大半は日常雑器で占められている。それらの土器組成を分類すれば第191図のようになる。古城遺跡（C地点）の出土十器は土師質杯・皿類は在地産であるが、碗形態（和泉型瓦器碗）・調理具・貯蔵具についてはほとんどが搬入品に依存しており、日常の雑器の中で搬入品の占めるウエイトが高いことが窺われる。このことは

徳島市中島田遺跡と類似した様相をみせ、陸路・水路の両面の立地条件からみて、古城遺跡（C地点）が商品流通の中継地もしくはその周辺に立地していたものと想定できよう。本稿では論じ得ないが、古城遺跡においては律令制衰退後も、地域経済や畿内と地方を結ぶ諸物資の流通に占める役割は大きなものがあつたと考えられる。同時に当該期における吉野川の水運といった流通体系も視野にいれて検討していかねばならない課題である。



第191図 古城遺跡（C地点）出土中世遺物の分類

## (2)12世紀後半～13世紀後半にかけての供膳具形態

古城遺跡（C地点）における供膳具には、土師質土器と瓦器の両者が量の主体であり、器種構成は「碗」＋「杯・小皿」のセット関係によって構成されている。古城遺跡（C地点）出土遺物は概ね12世紀後半～13世紀前半に位置付けられ、瓦器碗については尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3～Ⅲ-3期まで認められ、法量的には口径15～16cm、器高4～5cm、高台径4～5cmのものが中心となっている。不十分ではあるが、古城遺跡における比較的良好的一括資料をもとに編年表を兼ね、便宜的に12～13世紀いくつかの小期に分け、供膳具のセット関係についてまとめてみたのが第192図である。

「碗」形態については、すでに和泉型の瓦器碗が主流であり、尾上分類の和泉型瓦器碗のⅢ期段階には土師質土器の碗形態は淘汰され、ほとんど土師質土器の碗は出土していない。

土師質土器の杯・小皿類については器高が高いものから低いものへ形態変化がみられ、体部が直立気味から外方に延びるようになるようである。技法的には底部ヘラ切りが衰退し、

時期	器種	黑色土器			瓦器		土師質土器	
		椀	椀	小皿	椀	小皿	杯	小皿
11C	I							
12C	II 1							
13C	III 1							

第192図 古城遺跡(C地点)出土中世遺物年表

回転糸切りが出現し始める。回転糸切りの初現の時期は瓦器碗との関係から和泉型瓦器碗Ⅲ-1期(12世紀後半)頃にその初現が認められるよう。13世紀代には回転糸切りが隆盛を極めるが、14世紀代にはいとふたたび回転ヘラ切りが台頭してくると考えられる。

また在地生産と思われる底部回転糸切りの瓦器小皿は、徳島県内においては吉野川中流域～下流域にかけて分布がみられ<sup>(1)</sup>、時期的には土師質土器の皿類と同様、和泉型瓦器碗Ⅱ-3～Ⅲ-1期、12世紀後半～13世紀初頭頃に初現がみられるものと考えられている<sup>(2)</sup>。

### (3)瓦器碗と台頭と土師器碗の撤退

炭素の吸着を必要とする新技術の瓦器生産と比べて、伝統的な碗・杯・皿・甕を主要な生産器種とする土師質土器は、瓦器出現期に生産の様相が一変する。供膳具では土師質の碗は消滅し、杯・皿類の器種分化は抑制され、「杯・小皿」のみとなる。

阿波国内に畿内産の瓦器、特に和泉型瓦器碗の搬入が開始されるのは和泉型瓦器碗Ⅱ-2～3期段階であろうと思われる<sup>(3)</sup>。Ⅱ期段階では吉野川下流域において小規模の搬入がみられる程度であり、阿波国内で和泉型瓦器碗が本格的に普及するのはⅢ期段階になってからである。吉野川下流域においては、Ⅲ期段階(13世紀代)になると供膳具の碗形態はほとんどが和泉型瓦器碗の搬入品で占められるようになる<sup>(4)</sup>。これらは吉野川水系における水運の発達と瓦器碗の商品性の確立との関連が示唆される。

### (4)ヘラ切りの衰退と糸切りの展開

瓦器碗が本格的に搬入され始めるようになると、土師質土器の製作技術にも新たな変化が生じてくる。SK1057の良好な一括出土遺物では和泉型瓦器碗Ⅲ-1期の瓦器碗と、ヘラ切りと糸切りの土師質土器杯・皿が共存している。13世紀代には確実に回転糸切りが主流を占める。底部回転糸切り技法は瓦器出現期と同時期に発生し、回転ヘラ切り技法は衰退していくが、消滅することなくふたたび13世紀後半遺構に回転ヘラ切りが復活し、回転糸切りと共存するものと考えられる。徳島県下では和泉型瓦器碗Ⅱ-2期に瓦器碗の初現がみられる<sup>(5)</sup>。12世紀中～後半に瓦器碗の搬入が開始されたことにより、在来の土師質土器の再編成が行われ、碗・杯・皿といった日常雑器(供膳具)の構成に変化が生じ、碗形態は瓦器碗に、土師質杯・皿は回転ヘラ切りから糸切りへ製作技法の変化がみられる。おそらく12世紀後半～末葉頃に土師質土器の技術的画期を設定することは可能であろう(第192図)。

本遺跡SK2004他出土の土師質土器の杯3点は体部が直線的に、直立気味に外上方に延びる。底部は回転ヘラ切りである。形態的に名西郡石井町ひびき岩16号墳<sup>(6)</sup>石室内出土遺物の

土師質杯と類似している。また同一遺構面の遺構であるSK2001出土の瓦器碗(和泉型瓦器碗Ⅱ-3期)からみて時期的に12世紀後半以降と位置付けられ、ひびき岩16号墳出土の杯の年代と合致する。

底部回転糸切り技法は徳島県内の中世遺跡より出土する土師質土器の杯・皿類に普遍的にみられる技法であり、吉野川下流域では徳島市阿波国府跡第6次<sup>(9)</sup>・第9次<sup>(7)</sup>、名東遺跡<sup>(8)</sup>、中島田遺跡<sup>(9)</sup>、板野郡板野町黒谷川宮ノ前遺跡等<sup>(10)</sup>が、吉野川中流域では板野郡上板町神宮寺遺跡<sup>(11)</sup>、板野郡上成町前田遺跡<sup>(12)</sup>、阿波郡阿波町口吉谷遺跡<sup>(13)</sup>等で出土している。

吉野川下流域右岸の徳島市阿波国府跡第6次調査のSK44では、底部回転ヘラ切りの小皿と回転糸切りの小皿が和泉型瓦器碗と共伴して出土しており、時期的には12世紀後半頃と見られている。また名西郡石井町ひびき岩16号墳横穴式石室再利用時の出土遺物中の土師質土器の杯は底部回転ヘラ切りであり、時期的には共伴する白磁碗から12世紀半ばに位置付けられている。

吉野川下流域左岸においては、本遺跡(C地点)のSK1057で底部ヘラ切りの小皿と底部糸切りの杯が和泉型瓦器碗・小皿と共伴して出土している。これらの底部ヘラ切り技法と糸切り技法の共伴例からすると、辻 佳伸氏が指摘<sup>(14)</sup>するように吉野川下流域においては底部糸切り技法の導入は12世紀後半～末葉にかけて行われたものと考えられる。

また古城遺跡(C地点)のSK1065から出土している底部ヘラ切りの土師質土器小皿、円盤状高台小皿(注状小皿)<sup>(15)</sup>については、和泉型瓦器碗Ⅲ-1期の瓦器碗と共伴するものと思われ、12世紀後半～13世紀に比定されよう。

## 2 古城遺跡の中世土壌墓について

古城遺跡(C地点)においては、中世の墓制に関する一資料に成り得る土壌墓と思われる土坑が多数検出された。これら検出された土坑群(土壌墓群)は、いずれも建物に伴うような、いわゆる屋敷墓と呼ばれる形態ではなく、土坑(土壌墓)が単独で検出されていることから、小規模集落地と捉える方が適当であろう。その中で人骨の検出および副葬品を伴うなど、確実に墓と認定できるものは計4基である。時期的には川土遺物等から12世紀末葉～13世紀初頭の頃の年代が与えられるよう。埋葬方法はいずれも土葬であり、埋葬形態はいずれも北頭位仰臥屈葬である。供献形態については土師質土器の杯・小皿、瓦器碗等の供膳具で構成されている。なおST1003には被葬者の胸部付近に鉄製刀子が副葬されていた。

## (1) 積石土墳墓・土墳（土葬墓）墓の様相

古城遺跡（C地点）の土墳墓には、礫・石組などの外部表象をもつ積石土墳墓、素掘りの土墳墓がある。平面形は長方形あるいは楕円形を呈し、長軸方向は南北方向（北頭位）を示す。

積石土墳墓1（ST1001）は、調査区北部のほぼ中央部で検出された方形の石組の土墳墓である。上部構造は不明であるが、大形の河原石を長方形に組み、その上に傘形の小礫で覆っている。これらの小礫の集石は墓地形成途上に敷かれたものであろう。下部構造は土葬である。長軸1.8m、短軸1.2m、深さ0.32mで、主軸方向は北西方向である。積石土墳墓1からは埋葬人骨（頭蓋骨その他）と副葬品と思われる土師質土器小皿が3点出土している。

被葬者の埋葬形態は北頭位横臥屈葬であると思われるが、人骨の腐蝕が著しく特定は困難である。遺体は木棺に納められていた可能性があるが、それを裏付ける資料は検出されなかった。埋葬時期の特定は困難であるが、副葬品および土墳墓周辺の状況から13世紀前半と思われる。

積石土墳墓1からは、副葬品として床面より土師質の小皿が3点出土している。いずれも頭部付近に収められている。粗雑な作りで、体部は短く外方に延びる。内面は緩やかな段を有する。また、表面の礫中からも土師質・瓦質土器等が出土している。

積石土墳墓は全国的に類別が少ないが、板野地区において近接した時期のものが本遺跡を含め4例検出されている。これらの土墳墓は礫帯を持つ点と土坑の形状は共通点が見いだせるが、石組の形態・下部構造などに相違点があり、これらは集落を構成する集団間の相違あるいは時期的な相違によるものか詳細は不明である。類例資料の増加を待ち今後の課題としたい。

積石土墳墓2（ST1002）は、調査区北部のほぼ中央部で検出された積石土墳墓である。ST1001の南側に隣接して造営している。石組は長方形に組まれていたものと思われるが、崩壊が著しく一部が残存するのみである。下部構造はST1001と同様、土葬である。土墳は楕円形の平面プランを呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.2mである。遺構内埋土は2層に分層される。土師質の杯・馬具（ハミ）等が出土している。

土墳墓3（ST1003）は、調査区中央部西側で検出された土墳墓である。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸1.5m、短軸0.8m、深さ0.3mである。埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬であり、被葬者の胸部には鉄製の刀子が副葬されていた。北野天神絵巻などにみられる葬列には、棺の脇に鎌刀を持った人が添っている情景が描かれたものがあることから判断して、これは刃物の呪力によって悪霊がとりつくのを防ぐまじないとして添えられたものであろう。遺骸は木棺に納められていた可能性があるが、その痕跡を確認することはできなかった。埋

葬時期は、埋土中より出土した瓦器碗等から12世紀末葉～13世紀初頭にかけての年代が考えられる。

ST1003からは、遺構内埋土中より瓦器碗が2点出土している。共に薄手であり、体部は内彎して外上方に延びる。体部外面にもヘラミガキがみられ、時的には尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅱ-3期～Ⅲ-1期頃と思われる。被葬者の胸部に副葬されていた鉄製の刀子は木質が部分的に残存している。

土墳墓4 (ST1004) は、調査区西端で検出された土墳墓である。平面プランは長方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.1mである。埋葬形態は北頭位の仰臥屈葬である。ST1003と同様、木棺に納められていた可能性があるが、その痕跡を確認することはできなかった。埋葬時期はST1003と同時期と思われる。

遺構内埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片であるため実測可能なものは瓦器碗(1) 1点のみである。尾上分類の和泉型瓦器碗Ⅲ-1期に属するものと思われる。

#### ①遺構の形態

土墳墓は隅丸長方形、長楕円形を呈す。このような土墳の形態は土葬で木棺を使用するか、あるいは脚を折り曲げた形で葬る屈葬であることを示すものと考えられる。

規模は長軸1.2m～1.8m、短軸0.7m～1.2mの範囲におさまる。人間の背丈から考えてやや小さめの感があるが、これは埋葬する際に屈葬形態が一般的であったことを示唆するものであろう。

土墳の方向については、長軸は北に方位(南北)をとるように構築されている。墓の方位は北を意識したものばかりでなく、屋敷地、建物の方向、条甲の方位あるいは土地の形状等の状況も、墓の方向というものに大きく影響を与える要素であると考えられる。

土墳墓の形態については、土墳墓を作る集団(村落の構成集団)が主体的にその形態を選択することにより、葬送墓制の地域色を成立させる要因となったと想定できよう。

#### ②副葬品の埋納形態

ST1001は副葬品として床面より土師質の小皿(44～46)が3点出土している。いずれも被葬者の頭部付近にならべて置かれていた。また外部表象の石組礫中からも土師質・瓦質土器等の碗・皿・土釜等の破片が出土している。

ST1002は遺構内埋土中より土師質土器の杯(76)・鉄製馬具(ハミ)等が出土している。出土層位は遺構内埋土上面であることから、埋葬時の儀式に使用した物を埋置あるいは廃棄した可能性が高い。

ST1003は遺構内埋土中より瓦器碗(78・79)が2点出土している。出土層位は遺構内埋

土上面であることから、埋葬時の儀式に使用した物を埋置あるいは廃棄した可能性が高い。また被葬者の胸部に副葬されていた鉄製の刀子である。木質が部分的に残存している。

ST1004は遺構内埋土中より土師質土器片・瓦器片等が出土したが、小片であるため実測可能なものは瓦器碗(80)1点のみである。尾上分類のⅢ-1期に属するものと思われる。

一般的に副葬の位置は棺内、棺外に埋置される。棺内に埋置された副葬品は、死者自身に直接食物を供える意味が考えられ、死者に対する敬意を表するものと考えられる。副葬品は碗・皿形態が主に埋置される。棺外に埋置する形態は、死者に対する直接の副葬ではなく、木棺を埋めた後、埋葬時の儀式に使用した物を埋置あるいは廃棄した可能性が高い。

## (2)副葬品(供献土器)の器種構成

墓、特に単独で造立された土墳墓で普遍的に埋納されているのは、碗・小皿等の供膳具形態が主体である。これらの遺物が土墳墓(土葬墓)に収められる背景には、それらに何らかの意義があるものと考えられる。これらの供膳具は基本的に日々の食事に用いられていることから、日常的に人間と接触する、極めて身近な品物(愛用品)であるという点に集約される。つまり、中世(前期)においては橋田正徳氏が指摘するように、土墳墓(土葬墓)に収められる品物は、死者(被葬者)が生前に使用した身体に最も近い品物であった<sup>(4)</sup>と考えることができよう。それらが葬送儀礼の過程で用いられ、死者(被葬者)とともに土墳墓(土葬墓)に収められたのであろう。ただし供膳具はひとつの土墳墓(土葬墓)でも複数の位置から出土する場合があります、さらに多様な構成をもって出土することから葬送儀礼に関連する墓前祭祀あるいは別の用途も考えられる。

古城遺跡(C地点)においては、供献される碗形態に瓦器碗を用い、土師質の小皿を数点をもって供献行為を行ったものと考えられる。こうした葬送儀礼に関与する人物たちは、おそらく聖と呼ばれた遊行の僧たちであろう。当時の庶民の葬送には、仏教が次第に影響をもつて浸透していったものと考えられ<sup>(7)</sup>、仏教以前の伝統的な葬法・習慣といったものを習合しながら定着したのであろう。土墳墓から出土する品物の形態はおそらく、こうした共通する作法に則り、死者の縁者に命じて供献に必要な品々を集めさせた結果と考えられる。また碗形態以外の土師質土器小皿などの数量は、死者に関連する人々の数あるいは祭祀行為の優劣の差によるものと思われる。

13世紀代になると輸入陶磁器が村落(集落)に一定のブランド的価値をもって流通するようになると、耐久性に優れた陶磁器が土器に変わり死者と共に土墳墓(土葬墓)に収められるようになるとされる<sup>(8)</sup>。しかしながら、古城遺跡(C地点)においては、いずれの土墳墓からも輸入陶磁器は出土していない。このことは階層や性別の差異による結果とは考えにく

く、他の要因としては当該期・当該地域（吉野川下流域）における葬送墓制上の慣習の相違と考えられ、地域性を示すものであると捉えられよう。

### (3)集落の廃絶と墓域の形成（変容）

古城遺跡（C地点）の建物群は12世紀後半から13世紀後半頃まで存続していたものと思われる。集落が短期間のうちに廃絶しており、おそらく集落の構成集団は流動的な生活を営む階層であったと思われる。古城遺跡（C地点）の建物群は、その規模や存続期間等から掘立小屋のような簡略な構築物であったと思われ、簡易市場のような空間利用がなされていたものと想定される。集落が廃絶した理由としては、河川の氾濫によるものが想定できよう。建物群の廃絶後、墓域（小規模集団墓地）として変化しており、集落を構成する集団の性格や階層性を示すものとして興味深い。

小規模な集団墓地は平安時代末期に出現すると考えられているが、本格的な集団墓地の形成は鎌倉時代前期以降のことである。中世集団墓地が形成される以前は、特定の支配階層が造墓を行っていたと考えられ、天皇・貴族は各氏ごとに一定の墓域を形成していることが田中久大氏によって明らかにされている<sup>(4)</sup>。また各地域の大小領域支配者についても小規模な墓域を形成していたことが報告されている。これ以外の層（集団）が造墓活動を行っていた痕跡は何れも、中世集団墓地の形成には、何らかの強い外的要因が働いたものと推察される。中世集団墓地の出現期とされる12世紀末葉以降は鎌倉幕府の成立期と重なり、各地に中央（京、鎌倉）派遣の守護・地頭が任命、派遣されていく変革期である。つまり、これら地頭層が上層化していく過程で、かつてからの在地領主層との軋轢の中、その存在意義を墓制あるいは埋葬に顕在化させていったことは十分に考えられよう。

鎌倉時代から南北朝時代における墓地の増加は、浄土信仰の普及とあわせて、古代的な制度や思想の崩壊から生み出された中世的な論理構造によって初めて可能になったといえよう。新しい墓地の出現は、平安時代の整った墓域が貴族や僧侶などの限られた人々のものであったのと比較すれば、大きく被葬者の層が拡大されるようになった。庶民の墓とは必ずしも断言しえないにしても、墓地の増加と被葬者層の拡大は、庶民の墓が成立する延長線上にあると考えていいだろう。

古城遺跡（C地点）の土壌墓群は、造墓権が拡散し、富裕農民層（有力名主・在地武士層）の台頭とそれらの地縁的・惣的結合により、新興の小領域支配者が一定共通の墓域を設定し、集団化（惣墓）するようになる前段階と捉えられよう。

以上、古城遺跡（C地点）平成4年度調査区を中心にして12～13世紀代の供膳具形態およ

び土墳墓群からみた本遺跡の葬送墓制の様相について予察的に述べてきた。しかしながら、このような状況は限られた遺跡、限られた地域、限られた時期に行われたもの的一端であるかも知れないため、当該期の様相を総合的に示すものではない。

また、集団墓地の持つ意味、つまり民衆の精神的背景について言及することができなかったことや、また徳島県下においては11～12世紀代に該当する資料は現在乏しく、瓦器出土以前に黒色土器や土師器の動向は不明と言わざるを得ない状況にある。これらのことは当該期古野川の水運もふまえ、今後の発掘調査により明らかにされなければならない課題である。

古城遺跡（C地点）の成果が、古代から中世への土器様相の成立過程および葬送墓制上における中世社会構造を解明していくための一助となれば幸いである。

## 注

- (1) 古城遺跡（C地点）の他、阿波郡市場町古田遺跡（Ⅱ）、上喜米福子～中佐古遺跡、日吉～金清遺跡、乾山～観音遺跡、板野郡十成町前田遺跡などから出土している。
- (2) 湯浦康守「徳島県における古代末～中世の土器様相について」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1992  
久保隆美朗「阿波における瓦器の出土状況」『第4回 四国中世土器研究会発表資料』1992  
辻 佳伸「前田遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告2』徳島県埋蔵文化財センター 1993
- (3) 前掲注（2）
- (4) 前掲注（2）
- (5) 早淵隆人「黒谷川宮ノ前遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告9』徳島県埋蔵文化財センター 1994
- (6) 石井町教育委員会『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』1986
- (7) 徳島市教育委員会「阿波国府第6次調査概報」1988
- (8) 徳島市教育委員会「阿波国府第9次調査概報」1991
- (9) 徳島県教育委員会「名東遺跡（天神地区）」『県営名東町団地立てに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1990
- (10) 徳島県教育委員会「中島田遺跡」『県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989
- (11) 前掲注（5）
- (12) 早淵隆人「神宮寺遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告10』徳島県埋蔵文化財センター 1994

- (13) 辻 住伸「前田遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告2』(徳島県埋蔵文化財センター 1993)
- (14) 小泉信司「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告7」(徳島県埋蔵文化財センター 1993)
- (15) 前掲注(10)
- (16) 類似した土器は他に香川県川津元結木遺跡・兵庫県下土井遺跡等でも出土しており、木遺跡の畿内・瀬戸内地域との関連が示唆される。
- (15) 橋田正徳「中世前期における土葬墓の出土供器具の様相」『貿易陶磁研究NO.13』日本貿易陶磁研究会 1993
- (17) 『今昔物語集』の中にある「播磨国印南野において野猪を殺した話」には庶民の葬列について仏教的な情景が描写されている。
- (18) 前掲注(17)
- (19) 田中久夫「文献にあらわれた墓地」『墓地』 1975

#### 参考文献

橋本久和「中世土器研究序論」真陽社 1992

## V 徳島県古城遺跡出土 一人骨の所見一

高知医科大学 第1解剖学教室 山本 恵三

### I. ST-1003墓墳

ST-1003墓墳から出土した人骨はST-1004の人骨に比較して腐食と変形が更に強く、上塊中から取り出された骨は数も少なく、勿論完全な形態を保存しているものもないが、一応下記の骨群が得られている。

#### A. 頭蓋の骨

##### 1. 下顎骨 Mandibule

(図1. A~D)

この下顎骨は腐食浸軟と十斤のためと思われる変形が著明である。変形は左側半では比較的少ないが、右側半では極めて著しい。

下顎体：右側半の変形は著しい。右側下顎体はオトガイ部から大きく外方に開くように変形し、更に小臼歯部では折損して内方に向かってかなり強く屈曲しており、この部分の外面の緻密質には欠損部がみられる。左側半には右側半程の著明な変形はみられないにしても、やはり全体として多少内方に傾くような状態の変形が認められる。これらの変形はいずれも土圧と腐食浸軟によって生じたものと推測される。

下顎体右側半の歯槽部の大臼歯部には歯根を溶れた歯槽が1個認められるが、形態的にはやゝ不明瞭になっている。他の沮喪については左右両半ともに腐食のために変形して不明瞭になっており、個々の歯槽の同定が困難な状態である。

下顎枝：右側下顎枝の変形は非常に著しい。おそらく土圧のためと思われるが、下顎枝自体は強く外方に倒れるように変形している。腐食浸軟のための変形も著しく、下顎枝は極めて薄くなっており、土塊中に埋没していた状態をできるだけ再現するように接合復元したものの、正常な形態とは著しくかけ離れた形に変形し、傾きや幅も左側の下顎枝著しく異なった原型には程遠い形態に変化している。勿論、筋突起、関節突起、下顎切痕などの構造は殆ど失われている。左側下顎枝は右側に比べて変形がはるかに少なく、筋突起は殆ど完全に失われているが、関節突起はやゝ変形した下顎頭基部を一部残して欠失している。

## B. 上肢の骨

### 1. 鎖骨 Clavicle

右鎖骨のみが得られた。

#### 1. 右鎖骨 right clavicle

(図2, A, B)

長さ約12.5cm。内側端(胸骨端)を欠失している。土塊№1から取り出された時には中央部で折損していた。折損部では、特に上面の緻密質がかなり剝離欠損していたために、この部分は他の部分よりも著しく細くなっている。外側端(肩峰端)も極一部欠損しているが、肩峰端としての形態はかなり良く残っている。下面の粗面などは不明瞭である。骨全体としてはやゝ華奢な印象を受けるが、これは緻密質の脱落や表面の腐食によって骨全体が細くなっているためであろう。

### 2. 上腕骨 Humerus

右上腕のみが得られた。

#### 1. 右上腕骨 right ulna

(図2, C, D, E)

長さ約21cm。土塊№2から取り出された時には5片に折損していた。形態の特徴から右上腕骨骨体部と推定される。腐食による浸軟がかなり強く、緻密質の欠損部も多くみられ、また、表層の腐食のために各種構造物が不明瞭になっている。

上端部は外科頸から上方の部分を完全に欠失している。

骨体部は表層の腐食のために橈骨神経溝が極めて不明瞭になっているが、骨自体は腐食による変化を考慮すれば、やゝ頑丈であったと思われる。

下端部は肘頭窩付近から下方の部分をすべて欠失している。

## C. 下肢の骨

### 1. 大腿骨 Femur

右大腿骨のみが得られた。

#### 1. 右大腿骨 right femur

(図6, A, B, C)

長さ約21cm。土塊№4から取り出されたもので、右大腿骨骨体中央部(図3, Aa, Ba,

C a) と推定される。全体に腐食がかなり強く、その前面上部には大きな横方向の変形による凹みが形成されており、この部分には多数の亀裂が入って細片状の外観を呈している。この凹みはこの部分に他の骨或いは何等かの物体が重なり合っていた上に強い上圧が加わり、更に腐食浸軟が起こったことによって生じたものと推定される。骨体後面には、腐食のためにやゝ不明瞭になっているが、粗線とみられる隆起が上下に走っている。上下の骨端部および骨体の上端部は完全に欠失しており、緻密質の層は相当な厚さがあるが、腐食のために浸軟されて脆くなっている。

## 2. 頸骨 Tibia

### 1. 左頸骨 left tibia

(図3. A, B, C)

長さ約14cm。土塊№4から取り出されたもので、形態的特徴から左脛骨の上端部付近から骨体上部にかけての部分(図3. A c, B c, C c)と推定される。前縁上端の脛骨粗面にあたる部分は欠失しているが、上端部の一部と思われる部分を僅かに残している。緻密質の層はかなり厚いが、やはり腐食が著しく、浸軟されて脆い。なお、下端部の一部と思われる骨片1個(図3. A d, B d, C d)が得られているが、骨体部に接合することはできない。

### 2. 右脛骨 right tibia

(図3. A, B, C)

長さ約21cm。土塊№4から取り出されたもので、形態的特徴から右脛骨骨体中央部(図3. A b, B b, C b)と推定される。やはり腐食浸軟を強く示し、脆くなっているために前縁中央部を含めて各部の緻密質が剝離欠損している部分が多い。

ST-1003墓壇の人骨は骨盤、下顎を除く頭蓋の骨、軀幹骨が未確認であり、四肢骨は確認されているものゝ、数はST-1004墓壇よりもはるかに少なく、しかも腐食浸軟や土圧による変形がさらに著明で、断片的な資料が多い。四肢の骨はいずれも上下端を欠き、腐食浸軟されて表面の構造物が不明瞭となり、失われているものも多い。したがって、年令や性別の判定は、ST-1004の場合よりもはるかに困難である。大腿骨、脛骨、上腕骨および下顎骨などのように多少でも保存の良い骨でも相当な腐食や変形があるために正確な判定は困難で、おそらく成人男性の骨格ではないかという程度の推測しかできないであろう。



上面觀



下面觀



左前上方觀

右前上方觀



圖1. 下顎骨